

---

部品としての僕 『I as parts』 series 1st story.

ほーらい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

部品としての僕 『I a s p a r t s』 s e r i e s 1  
s t o r y .

### 【Nコード】

N 6 8 9 3 I

### 【作者名】

ほーらい

### 【あらすじ】

第三次世界大戦の最中、数少ない地上の楽園、『ヘヴン』。そこは研究者とその家族、そして戦災孤児だけが住まう平和な都市。半径数百キロの範囲内に他に島はなく、戦争の災禍も受けない絶海の孤島だった。だが、その平和なハズの島では、なにやらおかしな研究が行われていて……。

第二部『部品としての俺』 『I a s p a r t s』 s e r i e



## 第0章 Future End (前書き)

第六回スクウェア・エニックス小説大賞第一次選考突破作品です。惜しくも第二次選考は通りませんでした。・・・

まあ、後ほど読み返してみると誤字脱字誤植が多数見受けられたので、仕方がないとは思いますが。

むしろこんな作品でよくそこまでいけたものだと思います。つまり素晴らしい作品ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第0章 Future End

### 第0章 Future End

彼女はどこへ行ってしまったのだろうか。

辺りを見回しても、彼女の姿らしいものは見当たらない。

僕は少し歩いて、彼女の名を呼んでみる。しかし、それに応える声はない。

真に絶望する。辛苦の中で、幾度となく絶望を突きつけられても心が折れることなく今までやってきたことができたのも、彼女がそばにいてくれるという安心感があったからだだった。

……だが彼女は今、ここにはいない。それは、僕にとって唯一の希望であった光を奪われ、深淵なる闇の世界へと明かりもなしに放り出されたに等しかった。

途端に膝が折れる。乾いた地面には砂埃が舞い、僕はそのまま座り込む。

「なんで……どうして……彼女だけでも一緒だと信じていたのに……」

頬から流れた温かなものが、乾いた大地に小さな染みを作る。それは少しだけ跡を残して、すぐさま消えてしまった。

こんなところで泣いていても仕様がなことはわかっていた。だが、頬を伝うものを止める術を僕は知らなかった。

両手を大地へと投げ出し、僕は崩れるように倒れ伏す。手の平を中心に、真っ赤な軌跡が描かれ、先ほどのものとは打って変わって大きな染みを作り出す。

「痛……」

手の平は真っ赤に濡れていた。どうやら、落ちていたガラスの破片で手を切ってしまったようだった。だが、それがどうしたというのだろうか。僕は自身の体がどれだけ傷付こうと、もはやそんなことに興味はなかった。

ようやく血塗れのガラスの破片を見つけ出し、摘み上げてみる。乾いた光を受けて輝くそれは、鋭く尖っていて、肌に押し当てるだけでよく切れそうだった。

「どうせもう、一人じゃどうすることもできない。それに……僕は……」

しばらくの間、破片を指先で弄んでいたが、それももう飽きてしまった。

僕は首筋にそれを優しく押し当てる。体の内側では、力強く命の鼓動が鳴り響き、体中を生命のエネルギーが流れて巡っていた。

だが、いくら体が強く生きていても、もはや心が壊れてしまったのだ。壊れた心に体は必要ない。だから、そんな鼓動に意味はない。僕はゆっくりと目を閉じる。偽りの思い出もたくさんあるかもしれない。だが、少なくとも、“あの”思い出だけは正真正銘の思い出であることは間違いない。

「楽しかったなあ……あの頃は皆で馬鹿やって、ふざけあって、彼女ともたくさん笑い合ってた……」

駆け巡る思い出。一つ一つの映像が目の前で繰り広げられているように思い出され、そして流れるように消えていく。

そして、最後の記憶が流れていったとき、もう僕には未練がなかった。

目を閉じたまま、指先に神経を集中させ、そのままゆっくりとガラスの破片を沈ませていった。

## 第0章 Future End (後書き)

これは何時の記憶？

少年は突如襲いくるチヨークによって叩き起こされる。

夢のことなど記憶の彼方に吹き飛ばした少年はいつもの平和な日常がそこにあることに安堵する。

見知らぬ少女との出会い、友人との戯れ・・・。

残り少ない平和な毎日を楽しむことに彼は喜びを覚える。

次回、第1章 Introductory Chapter

## 第1章 Introductory Chapter

### 第1章 Introductory Chapter

「起きなさいっ！」

真つ白なチヨークの弾丸が彼の意識を呼び覚ます。未だにぼんやりとした頭のままだったが、いつも通りの教室であることは彼の頭でも理解できた。

「まったく！ 授業中に寝るとは何事よ！」

彼は顔を上げて、眠そうに目をこすりながら周囲を見渡す。

どういうわけか、自分へと集中するクラスメイトの視線。自分が犯した過ちに気付けぬまま、彼はぼやけた頭をフル回転して必死に理由を考える。

「……ふえ？」

二度目のチヨーク。そこでようやく彼の焦点が定まり、もやがかかった頭がクリアになる。

「はい質問。この街の成り立ちを説明しなさい」

教師……ミシエル・シスターヴァは未だ目をこすっている少年を指さし、厳しい口調で尋ねた。

彼女が質問した内容……この街の成り立ちとは、今日たった今授業で手ほどきを受けたばかりの内容で、当然ながら彼の頭の中にはわずかも記載されてはいなかった。

「レン！ これ見なさい」

隣に座っていた金髪の少女がこっそりノートを差し出す。そこには先ほどの授業の内容が、可愛い丸文字でびっしりと書き込まれていた。

彼はこっそりと視線をノートへ移すと、書いてある内容を朗読し始める。

「あー……うん。えっと……株式会社オキシデリボは2100年、全世界で起こっている第三次世界大戦の災禍から研究所と研究員を



守るため、アメリカの領土内にある無人島を買い取り、永世中立都市『ヘヴン』を建造します」

ミシエルは小さくため息をつく、容赦なく次の質問を繰り返す。

「次はオキシデリボの説明ね」

先の問題と同じく、今日習ったばかりの単元であり、今まで生きてくるのにそれほど必要がなかった知識なので、彼の頭の中には欠片ほどもその知識は入っていない。

ミシエルの言葉を聞いて、少女は素早くページをめくり、ノートの一部を指差す。レンはそこへと視線を集中させ、書いてある内容を読み始める。

「オキシデリボ社は2040年創業の大手製薬会社で、主に遺伝子組み換えによる薬品の製造、及び医療技術を開発している企業である。現在では製薬、医療に限らず、教育、食品、アミューズメントなど多岐に渡る研究が行われており、世界中にその産物は提供されている。私達が所属するこの孤児院も、オキシデリボ社の教育プログラム試験的施設であり、それと同時に不遇な戦災孤児達を助ける活動の一部である」

ミシエルにも、レンがただノートを音読しているだけだということはおわかっていて。だが、これは彼女なりの知識の定着法の一つであった。実際に音読すれば、知らないことも頭の中に刻まれる。

「なぜ、第三次世界大戦が発生し、そしてどのように広がっていったの？」

「2083年、アフリカ大陸に突然発生した小国『ロベミライア』がアフリカの各国へと侵攻したのが始まりだといわれている。アメリカを中心に、国際連合に所属する国々はロベミライアへとアフリカ侵略を即刻停止するように交渉したが、ロベミライアはこれを拒否。強力な機械兵『オートマータ』と転移という技術を用いて各地へと送り込み、瞬く間にアフリカ全土を制圧。続いてヨーロッパへも攻撃を行い、現在ではアジア及びアメリカとの戦闘が行われている」

「この島が平和な理由は？」

「ロベミライアもオキシデリボ社の顧客の一つであり、ロベミライアとオキシデリボ社は不可侵協定を結んでいるから」

ちやうどそのとき、授業の終わりを告げるチャイムが大きな音で鳴り響く。ミシエルは小さく舌打ちすると、開いていた教科書を閉じた。

厳しい様子で、それでいて大いなる慈悲をたたえたまま、彼女はレオンに言った。

「リサに感謝しなさいね」

悪戯っぽく笑う少女。彼はバツが悪そうにぼりぼりと頭を掻く。その様子を見て、ミシエルはようやくやく微笑みを浮かべた。

「では、これで授業を終わります。日直さん、礼」

「ありがとうございます」

ぼさぼさの黒髪。この少年を形容する言葉としてこれ以上当てはまるモノがあるだろうか。少年の名はレウオン。名字はない。なぜなら、彼には元々名前がなかったからだ。友人達は親しみを込めて彼をレンと呼んでいる。

自分の出身がどこか、自分の親が誰か、それを彼は知らない。なぜなら、オキシデリボの孤児院に勤める者達が黙して語らないからだ。それは彼に限らず他の子供達も同じである。

だが彼はそれを不思議に思ったり、それどころか興味すらない。ただ今を見据え、そして未来を静かに見つめる彼の視線に、過去のモノは映らない。

今も彼はどのように今を楽しみ、そしてどのような自分になるか、それしか考えてはいない。

彼の隣には、一人の少女がいた。可愛らしい金髪のおさげを下げ、綺麗なコバルトブルーの目を持つ、恐らく美人と形容されるである

うその少女の名はリサイアといった。彼女もレンと同じ孤児院の院生である。友人達は彼女をリサと呼ぶ。

彼同様過去のことに興味はなく、自分が何者なのかなど考えたこともない。彼と違うのは、今をどう生きるかしか考えていない点だろう。彼女のモットーは、明日は明日の風が吹く、である。

元気いっぱい天真爛漫を地で行く彼女は、他人に対する言葉もやや厳しい。思った通り、素直に言葉を述べ、思った通り素直に行動する。その言動は傷付けられることを恐れる者達からはやや敬遠されがちである。おかげで、彼女と行動を共にしようなどという変わり者はレンを除いて他にいない。

教室の昼寝の件で大恥をかかされたレンは、ぼんやりと見えていた夢などもはや忘却の彼方へと吹き飛び、その昼寝の件をからかわれないようにすることで必死だった。

「それにしても、アンタが昼寝なんて珍しいわね。……昨日、何かよからぬことでもやっていたのかしら？」

「なんで悪い方向に考えるんだよ……。たまには夜更ししてもいいじゃないか」

リサは悪戯っぽい笑みを浮かべる。それに対し、レンは不服そうな表情を浮かべた。

「へへー、アンタでもそういうこと考えるんだー！　うふふ、面白いこと知っちゃった」

「ば、なんでリサはそういう方向に持っていきたがるんだ！」

「さあーねっ！　あははは！」

リサは両手を大きく広げて駆けずり回る。乙女らしからぬそんな行動にレンは眉をひそめつつも、うっすらとした笑みも浮かんでくる。今年、ついに彼らは記念すべき、そして嘆くべき年を迎えることになる。ついに18歳になったのだ。生まれも親も知らないが、誕生日と生まれた年だけはなぜかはつきりとしていた。なぜわかるのかを人に尋ねても教えてはくれないが、きちんと毎年一回祝ってもら

えるだけで彼らには十分だった。

そして、今年18歳になったということは、ある一つのことを意味する。このヘヴンを出なければならぬということだ。

外の世界では第三次世界大戦なるものが繰り広げられているらしいが、そんなことはこの島には関係なかった。けれども、この平和な樂園を出れば、彼らには間違いなく厳しい世界が待っているに違いない。

そんなことを考えると、レンには目の前で繰り広げられている平和な光景がとても貴重なもののように思えてくる。

リサはしばらくの間走り回っていたが、やがてレンの元へと戻ってくると、ふにやっと座り込んだ。

「あーづーいー！ 疲れたよ〜」

レンは頭上で輝く太陽を見上げる。空には晴天が広がり、一点の混じりもない青がどこまでも広がっていた。

「レン、アイスクリーム！ ノート見せてあげたんだからオゴリなさいよね！」

そう言っつて、リサは公園で売られているアイスクリームの屋台を指さす。涼しげな風鈴を下げた屋台では、老婆がアイスクリームを子供達に売っていた。無論、この島の中で営業している以上、中の老婆も製品も、オキシデリボに所属するものである。

「貸し一個消化じゃダメ？」

「あれだけじゃもつたいないわよ。もつといいことに使いなさいよねー！」

リサはわけのわからないことを言いながら、早速屋台のおばちゃんにアイスクリームを注文する。レンはしぶしぶ財布を取り出した。とはいうものの、その財布からは小銭特有の重さというものは感じられない。

「おばちゃん！ シーソルトアイス！」

「はいはい、カードをいただきますね」

「ほらほらレン、さっさとカード出すー！」

レンは財布から一枚のカードを取り出した。老婆は差し出されたカードを受け取ると、カードリーダーで読み取った。

「職業番号91111、住民番号7074、レウオンです」

「はい、確かに」

カードは個人の身分を示すものであり、そして財布代わりのクレジットカードの役割を果たす。カードを使用する度に、使用した金額が銀行の残高から引かれていくというシステムだ。普段から現金を持ち歩く必要はなく、安心して生活できるという優れ物である。だが、中には不心得な拾得者や、盗人というものも存在する。そのため、使用時には自身がどのような職に就いているかを示す職業番号、自身が島に住む人間であることを示す住民番号、そして名前を毎回申告するようになっていく。また、ある一定金額以上の高額な買い物をするためには手続きが必要となる。紛失した際も役所へ申告すれば、カード利用停止や再発行も行いうことが可能となっている。

「おばちゃん、アイス二つね！」

「はいはい、少々お待ちを」

老婆はなれた手付きでレジスターを操作する。こうして、レンの口座からアイスクリーム二つ分の金額が引き落とされたというわけだ。老婆はレンへとカードを返却する。レンはカードを受け取り、財布へとしまった。

そして、ほぼ同時に出てくる二つのアイスクリーム。ミントブルーの水晶のようなそのアイスは、爽やかな潮の香りを放ちながら、リサのサファイアのような双眸を釘付けにする。

中心にはミントブルーのアイスクリーム。その表面を覆うクリスタルのような層。これは特殊な塩を結晶化させたものだ。

「はい、レン」

「サンキュ」

すぐ近くのベンチに腰を下すと、さっそく舐め始めるリサ。途端に表情が恍惚としたものへと変化する。

「ほわわわ……爽やかでほんの少し香るような海の味と、後からや

つてくるあまあーいミントが口の中で弾けて……し あ わ せ

「レンも頷きながらアイスを口に含める。」

「メロンに生ハムとか、スイカに塩とか、甘いものにしょっぱいものを合わせるよ、より甘さが引き立つって、不思議だよね。」

「それに加えて、ウチのアイスはオキシデリボ社特製の品種改良されたミントを使ってるから、香りが違うよ。潮料も使ってるから、海の風味もばっちりさ。」

潮料とは、その名の通り海の香りを疑似的に作り出した塩である。ただの塩ではなく、海の香りをそのまま凝縮したもので、海に行かなくとも海の気分を楽しむことができる。これがこの、水晶のような層の正体である。

「まあ、海なら背後に大きく広がっているけどね。」

言葉通り、彼の背後にどこまでも広がる大海。このヘヴンは絶海の孤島という表現がまさに正しい。太平洋上に浮かぶこの島の半径数百キロの範囲内に島はなく、船舶も定期的にやってくる物資運搬船と、一年に一回やってくる孤児渡航用船舶のみで、他に島の外へ出る手段は、未だ実験段階の“曰く付きの転送装置”しかない。

「けれども、数カ月後にはこの海を超えて外に行くんだよね……」  
レンはアイスクリームを舐めるのをやめて、背後に広がる海を見渡す。リサもその言葉を聞いて、同じように視線をやる。

「そんなこと言っただけじゃしょうがないじゃん。このまま私達みたいな孤児が島にいたら、この島はパンクしちゃうわよ。もともと研究員と、その家族しか住むことができない島なんだし、18年間平穩に過ごせるだけありがたいのよ。」

一応は渡航先の住所を用意し、一定期間は働かなくとも生活できるだけの資金を提供されると彼は聞いていたが、それ以降は企業へ恩返しをしなければならぬわけである。要するに、今まで18年間生きてくるのに使った分のお金の一部を返さなければならぬのだ。ヒトを一人成人させるといふことは非常に金銭のかかることである。

だが、企業としてもただ孤児にタダ飯をくわせているわけではない。新しい教育用のプログラムや教科書、それから食品、衣料品、家具、住居、その他ありとあらゆる新しい商品の実験台として彼らは利用されている。そのため、自分が生きるために使われたすべてのお金を返却しろとは言ってこないのである。もっとも、それを差し引いても返さなければならぬ金額は莫大なものとなるだろう。レンはこれからの生活の厳しさを想像しながらも、今という心地良い平和に逃避する。

「ともかく、今は今を楽しみましょう。楽しくて、平和な日常を享受できる今を、ね。……あ！　アイスが溶けかかっているっ！」

綺麗な水晶のような形状だったアイスクリームは、いつのまにか滴が垂れ落ち、不気味な様相を呈していた。そのことに壮絶なショックを受けたリサは、急いでアイスを舐める作業を再開する。そんな彼女の様子に、レンはもう一度笑みを浮かべて彼女同様アイスクリームを舐め始めた。

リサは一人で先に寮に戻ると言い出した。レンはリサを一人寮へと返すと、海からやってくる涼風を楽しみながら夕方の公園を散歩していた。

視界の端では真っ赤な夕日が海上に浮かび、とても眩しい。

そんなとき、レンは不思議な様子の女性を見かけた。街中では滅多に見ることもない白衣を身にまとったその女性は、公園と海を隔てる柵から身を乗り出し、遙か下方を見つめていた。

その女性が気になったのか、レンは何の気なしに声をかけてみる。

「こんにちは」

「はいっ!?　こ、ここ、こんにちわっ！」

突然声をかけられたことでも驚いたのか、かなり上擦った口調で女性は返事をした。その様子に一瞬驚いたが、レンは続けて質問をする。

「あの、なんだか困っているように見えただんですけど、どうかしました？」

「ああああの、ここ、こんなことを見ず知らずの人に、たた、頼んでいいのかわかりませんが……たた、助けてください！」

桃色がかかった美しい金髪のその女性は、おるおると落ち着かない様子でレンに頭を下げる。何のことかわけがわからないレンは、とりあえず女性をなだめようと、ゆっくりとした口調で言った。

「とりあえず落ち着いて。何がどうしたんです」

「ご、ごめんなさい！　そ、その、知らない人に話し掛けられるのは、なな、慣れてなくて！」

大きく何度が深呼吸をしてようやく少し落ち着いたのか、先ほどと比べてゆっくり、それでもかなり早い口調でわめき散らす。

「ああ、あの、そこから下を見下ろすとわわわかるんですけど……」  
レンは女性の指差す方へと視線を下す。下方に広がるごつごつとした岩が広がる海岸に、何かきらりと光るものが見えた。

「ろ、ロケットをおお落としてしまって……」

そこまでなんとか言葉をひねり出すと、女性は肩を震わせながら泣き出してしまふ。

「うえ……ひつく……だだ、大事な……ひつく……写真が入ってるんです……ぐすっ……」

「わ、わかりました！　ぼ、僕が取ってきますから泣かないで！」  
突然泣き出した女性にレンまで慌てだすも、ともかく女性を落ち着けようとレンは柵を乗り越える。

柵の向こう側はほんの少しの高さがあったが、なんとか着地すると、岩の間に挟まっていたロケットを拾い上げ、ポケットにしまうと柵を乗り越える。

「はい、取ってきましたよ」

やや汚れてしまったが、レンは金色に光るロケット差し出した。彼女はそれをがしっと掴むと、今度は外れないようにしっかりと首にかける。



「ああああありがとございます！　なななんとお礼を言っているのやら！」

「そんなお礼だなんていいですよ。そんな難しいことでもないですし」

女性は泣きながら何度も何度も頭を下げる。レンはその勢いに辟易し、落ち着くように諭す。

「あの、えっと、その……じじ、自己紹介がまだでしたね。わ、私は桜木ユイと言います。あ、英語の場合はユイ桜木でしたね！　とともかくユイです。えっと……その、オキシデリボで研究員をしていて、研究の内容は……あ、これはダメです！　ぜぜ、絶対に言うてはいけません！」

縁の太いメガネをかけ直しながら、ユイは簡単な自己紹介を済ませる。そんな慌てふためくユイの様子に、レンは苦笑いを浮かべながら頷いた。

「僕はレウオン。レンって気軽に呼んでね」

「れ、レン……さん？　……よ、よろしくです……！」

どこかで聞き覚えがあったのか、しばらくの間何かを考えていたが、ぎこちない動きで再び頭を下げる。世の中に人見知りをする人間がいることを彼は知っていたが、これほどまでに酷いものだとは彼も知らなかった。

「どこかで会ったことあるかな？」

「いえいえ、絶対にはいけません！　そ、そんなこと、私は知りません！」

やけに強く主張することに軽い違和感を覚えたレンだったが、きつと知り合いに似た人や同名の人がいたのだろうと思い、笑顔を浮かべた。

「よろしく、ユイ」

「よ、よろしくお願いします！」

二人は同時に頭を下げる。おかげで、ごつりとぶつかり合い、派手な音を響かせた。

「はう〜……めーがーまーわーるー……」

「いたた……だ、大丈夫!？」

ふらふらと揺れるユイをレンは急いで抱き支えた。しばらくの間焦点の合わない視線を泳がせていたユイだったが、徐々に視線がはっきりとしてくる。

「れれれれレンさん!？」

男性に抱きしめられることに慣れていなかったのか、ユイの頬が夕日のように真っ赤に染まる。ふつと視線をそらすと、もじもじしながら何かゆっくりと口を動かした。

「あの……その……えつと……」

「あ、ご、ごめん!」

レンは慌ててユイから手を離す。ほつとしたような表情を浮かべたのは安堵だろうか、未だ頬は赤いままだが小さく頭を下げた。

「ありがとうござい……」

最後の方は聞き取れないほど小さな声でそう呟く。レンはきまりが悪いような表情を浮かべて頭を掻いて、もう一度謝った。

「あの！ わ、私、研究所に戻りますね!」

そう言い残すと、ユイはその場から逃げるように走り去った。

そんな桃色の軌跡を見つめながら、レンはしばらくの間、ぼんやりとそこにつっ立っていた。

日が完全に落ち、散歩を終えたレンは、自分の住まいを置く男子寮へと向かう。

十八階建てのマンションのような形をした建物が横に二つ並んでいた。片方は男子寮、そしてもう片方は女子寮である。

贅沢な造りの建物であるが、その上から下までぎっしりと院生が詰まっている。

一階から五階は幼児を扱う階層である。0歳から5歳までの初等教

育を受ける以前の子供達が收容されている。この部分では男女の区別がなく、隣り合っている寮も一本の廊下で繋がっている。

六階から十二階までは初等教育を受けている子供達が收容されている。十二階までは大部屋に複数人の子供達が生活しているため、自分の部屋というものがない。この階層を含むこより上の階層は完全に女子寮と分離し、非常時用の高架通路で一応は繋がっているものの、基本的には行き来することはできない。

そして、十三階から十五階は中等教育を受ける子供達が入っている。この階層はツインルームとなっており、二人で一部屋となっている。最後に十六階から十八階が高等教育を受けている子供達が收容される。ここでは一人一部屋となり、完全に私室を持つことが許される。部屋のはなかなかのもの、ダイニングとキッチン、そしてリビングともう一部屋、つまりはLDKという一人暮らしには豪華すぎるほどのものである。しかし、それだけの広さであるにもかかわらず、物なんてあつてないようなもので、最低限の衣類や私物を除けば備え付けの調度品の類以外何も残りはない。レンの部屋も、筆記用具や衣類、そしてわずかな思い出の品だけである。

レンはテーブルの上に置かれた写真立を手を取った。ややブレているが、そこには四人の友人達に囲まれて笑っているレンの姿を収めた写真が飾られていた。

リサの他に、二人の少年と一人の少女が楽しそうな笑いを浮かべている。彼らはレンと同じ歳の18歳の孤児達だった。18歳の孤児は彼らを除いて他にはいない。

そのとき、ドアからノックの音が響いてくる。

レンは写真立を机の上に戻すと、玄関の方へと向かう。そして、閉じたドアを通して来客に声をかける。

「誰？」

「おいおい、せめてドアくらいは開けてくれよ」

その声を聞いて誰かわかったのか、レンは扉を開いた。そこには予

想通り、よく見知った人物の姿があった。

「いよっ」

程よく焼けたこげ茶色の肌は日焼けによるものだが、もともと彼の肌は黒い。かといって、黒人のように真っ黒なわけではない。もつとも、生まれも両親もわからない身なので、彼の血管を黒人の血が流れているのか、それとも白人の血が流れているのか、あるいは黄色人種の血が流れているのかわからない。

彼の名はアラウイン。友人達からはアランと呼ばれ、親しまれている。

誰に対しても気さくな態度を取り、性別や年齢を問わず人気が高い。好奇心旺盛で、やりたいことはとりあえず試してみる。そのためならば、規律に反することもしばしば。だからといって他人を疎かにせず、しっかりとフオローしたり、あるいは歩む速度を合わせることもある。

彼はレンとは違い、将来に希望を抱いている。第三次世界大戦という地獄を目の前にしても、それがどんな世界か知りたくてうずうずしているのだ。それは無知ゆえに浅はかさなのか、好奇心ゆえの無謀か。だが、それが時には良い結果を生み出すこともあるだろう。対照的な未来観を持つレンとアランだが、実のところリサとの関係よりも親しい間柄かもしれない。

レンにとっては希望の象徴。アランにとっては自分とは違う考えを持つという未知への興味。これが二人の関係を密接なものにした。

お互いに、相手ならば自分とは違う考えをするだろう。だから、行き詰まったときには相談すれば良い。二人はそう考えているのである。

「アランか。何か用かい？」

レンは親友の顔を見て表情を和らげる。それは思い出の写真を見て

いたときの表情と比較的近いものだった。

アランも嬉しそうな表情を浮かべながら、けれどもちよつと困ったような表情を浮かべながら一枚のカードを提示する。

「ほれ、職業カード。将来どんな仕事をして、どんなふうに生活したいかってのを書くアレだ。お前はもう書いて出したんだっけな」アランはレンの許可が出ていないにもかかわらず、彼の隣をすり抜けて部屋の中へと入っていく。レンもそのことを咎めたりはせず、一緒に自宅のリビングへと向かう。

アランは近くのソファに腰かけ、レンは小さな椅子に腰かける。これが二人のいつものスタイルだった。

リビングに置かれた小さなテーブルへとカードを投げるアラン。レンはそのカードの内容に視線を移す。

「まだ真っ白じゃない。アランのことだから、もうやりたい職種とか決まってると思つてたよ」

「いやな、やりたい仕事はあるっちゃあるんだけどよ……。……絶対に笑わないって約束するか？」

あまりにもアランが真剣な表情で尋ねるので、思わずレンも背筋をピンと伸ばし、顔を強張らせる。

「わかつた、約束するよ」

それを聞いて安心したような表情を浮かべるアラン。他に人がいるわけでもないのに、こっそりとレンの耳元へ自身の口を近付け、小声で何かを呟いた。

「ぶ、冒険家だつて!? あはははっ、アランらしいや!」

「わ、笑わないって約束だろ!？」

「ご、ごめん! でも、あまりにも子供らしくて、それでいてアランにはびつたりだったからついね」

レンは腹を抱えて椅子から転げ落ちる。それに不服なのか、アランはいじけたような表情を浮かべてそっぽを向く。

「はいはい、俺はどうせまだガキのままですよ」

「ごめん、アラン。でもなんだかおかしくって……」

「いくらなんでも笑い過ぎだろ？……？」

ようやく笑いが収まったレンだったが、その目の端には未だ涙の粒がこびりついていた。レンはそれを指先で拭う。

「でも、アランらしいとは思っよ。世界中を見て回りたいて言っただしね。でも、もうあらゆる場所が開拓されしつくして、ほとんど冒険できるようなところは残ってないと思うんだよね」

「ん、まあそりゃそうだが……」

笑顔で説明するレンに、アランは唇を尖らせる。反論したいのだが、レンの言っていることがあまりにも正しかったため、反論することができないでいるのだ。

「もう五百年早く生まれてきたらよかったのにね」

「ちえ、なんとも言えよ」

すっかりいじけてしまったアラン。レンは仕方ないなというような表情を浮かべながら言葉を続けた。

「だからさ……アランはジャーナリストをやったらどうか？ あまり言い方はよくないと思うけど、今はちょうど世界規模で戦争が起こっている。ジャーナリストなら、このことを記事にしながら世界中を巡ることができでしょ。もっとも、とっても危険なことだと思うけど、アランならきつとできると思うんだ」

「ほう……その根拠は？」

「アランだから」

レンは笑ってそう答える。そこには人を小馬鹿にするような嘲笑は含まれていない。純粹に、アランだから大丈夫という絶対の信頼と思いが込められた、彼を信じているからこそできる笑顔だった。

「なんだよそれ。まあ、そう言われて悪い気はしないけどさ」

そう言っつて、ぽりぽりと頭を掻くアラン。親友に褒められることは嬉しいことだが、羽毛の先で触れられるようにくすぐったいことなのだろう。

「照れてる」

「照れてねーよ」

「いいや、照れてる。口では違うって言うてるけど、本当は嬉しいんでしょ？」

「嬉しくねーよ。気色悪いからやめろって」

そう言つて、迫り来るレンを追い払う。無論、二人に同性愛の嗜好はない。ただ、こうやってからかうことはレンにとつての楽しみであり、そしてアランにとつての楽しみでもある。要するに、二人にとっては自然なコミュニケーションなのだ。

「それはともかく置いて……リサとはどうなんだ、レン？ 今日もまたデートしたんだろ？」

アランはいやらしい笑みを浮かべてレンに尋ねる。途端にレンは都合の悪そうな表情を浮かべた。

「で、でーとなんかじゃないよ。彼女とはなんていうか、腐れ縁なだけで……」

「何言つてんだよ。あんな弩級ストレート女、好んで一緒にいるのはお前くらいだぜ？」

「ただ、なんて言うか……彼女は寂しいだけなんだよ。けれども、つい思ったことをそのまま口に出しちゃうだけなんだ。素直だけど、素直に言葉にできない。そんな女の子なんだよ」

「つまり、アレか。素直に好きって言えない女ってことか」

レンは顔を真っ赤に染めて噴き出す。それを見て、アランはさらにニヤニヤ度をアップさせる。

「そんな、言えないってのはそういうことじゃなくて……」

「いやあ、お前はもつと控えめなヤツかと思つてた。それがある日突然、あいつは俺に惚れてるんだ。それが素直に言えないだけさ、なんてキザ男になるとは思つてなかった。本当に成長したなレウオン。あのなよなよしい頃が懐かしいぜ」

「だ、誰もそんなこと……」

「俺はお前の親友だからわかる。だからな、言葉はもう不要なんだ。あとは心と心の対話だけで十分なんだよ」

「むー……違うって言うてるのに……」

今度はレンがいじけ始める。そんな様子を見て、さすがにイジメ過ぎたと思ったのか、アランはレンのおデコを指先で弾く。

「ばーか、んなこと本気で考えてるわけねーだろ。わかってるよ。

あいつが友達欲しいって素直に言えないってことを言いたいんだろ？」

「うー……アランの意地悪」

「さっきの仕返しだぜ？」

「う……」

レンがこんな風にスキだらけになることは滅多にない。彼がこんな面を見せられるのも、相手がアランだからという安心感があるからだろう。それほどまでに二人は強い絆で結ばれていた。

「ま、ともかくカードには書くことができそうだ。これに関しては礼を言わせてもらうぜ。ありがとな」

「ううん、どういたしまして。よくアランに助けられてるもん。たまには恩返しをしないとね」

「その通りだ。俺をもっと称える崇めろそして敬え」

「それは却下」

即答で答えるレン。予想通りの答えだったが、アランは苦笑いを浮かべる。

「ともかく、もっと恩返しをしてほしいもんだぜ」

「それって、普通自分で言うことじゃないよね」

レンも苦笑を浮かべる。

……レンはいつも以上に“恩返し”にこだわるアランに何か違和感を感じていた。それは軽い警鐘程度之感覚。危険というより、面倒なことになるだろうという程度である。第六感が何かを知らせようとしていた。だが、友人のためと思い、レンはそれを無視してアランの言葉を待つ。

「いやー……実はもう一つ“恩返し”してほしいんだわ」

「アラン、それは“頼み事”でしょ？」

額から一筋の汗が流れ落ちる。もはやレンの勘は確実なものとなっ



ていた。

「ああ、そうとも言うな。いや、むしろそうとしか言わないな」

いつもと比べてどこか弱気なアラン。確実に厄介事に巻き込まれることを覚悟した上で、レンはアランをに続きを話すよう促す。

「あー……カード書き終わったらさ、提出に付いてきてほしいんだわ。確か面談あるんだろ？俺、そういうの苦手でさ……」

予想通り面倒事が舞い込んできたことにため息をつくレンだったが親友のためと思うと不思議と不快な気分にはならなかった。

「OK、わかったよ。面談っていつても、そんな大したことはないし、そこまで緊張するようなものじゃないよ」

「ああ……面談なんてしたら俺の未来イメージがボケまくりなのがバレちまうぜ。そんなこと言われたって、緊張するっただけだし、ない」

「大丈夫、大変なことじゃない。一、三質問に答えるだけでいいんだよ」

「ホントか？ホントなんだな？絶対だな？」

レンに問い詰めるように確認をとるアラン。そんな様子に気圧されながらも、レンは大丈夫だと頷く。

「絶対だよ。僕を信じてよ」

アランはさっそくカードへの記載を開始する。職種、志望理由、簡単な小論文。そういったことをカードに書き込み、レンの言う通りあまりよくない場所を直し、カードを仕上げていく。

「できた……」

アランは完成したカードを眺める。どこを見ても、おかしいところはないように感じられた。絶対の出来だった。

「うん、これなら大丈夫だと思う。さ、出しに行こう」

二人はレンの部屋を後にすると、ミシェルが待つであろう孤児院へと足を向けた。

「ついに来た……。」

アランは、職員室と書かれたプレートを見上げながらごくりと生唾を飲み込む。傍から見ればただの扉だが、彼から見れば遙か天まで届く巨大な扉とも等しい。

ゆっくりと手をかけると、しかしすぐに引っ込める。

「ああ、ダメだ。緊張して力が出ねえ」

アランは大げさに胸に手を当てると、うずくまってカードを抱え込む。

「そんな大げさな……。僕が言ってあげるよ」

レンは扉に手をかける。だが、アランはそれを止めさせる。

「待て！ あと……。そうだな、86400秒待ってくれ！」

「何時間待たなきゃいけないの……。もう、開けるね」

レンはアランが止めるのも無視して、こんこんと扉をノックし、開いた。

中にはたくさんさんの机が並べられ、本や教科書、その他雑多なものが転がっている。

「すみませーん、レンとアランです。ミシエル先生はいらっしゃいますか？」

「あら、こんな遅くに何かしら」

ミシエルは二人に手招きする。アランは意地でも動かないと座り込んでいたが、レンに首根っこを掴まれて引きずられていった。

「アランの職業カードの提出にうかがいました」

「あら、レンも一緒に来たのね。本当にあなたは仲が良くていいわね。他の皆もこれくらい仲がいいと助かるんだけどね」

レンはアランからカードを奪い取ると、ミシエルへと手渡した。

「どれどれ……」

しばらくカードを眺めていたミシエルだったが、すぐさま表情が険しくなっていく。

せっかく提出されたものだからと、とりあえず最後まで内容に目を通したようだったが、その表情は恐ろしいを通り越えて呆れを表し

ていた。

「何これ、冗談？」

彼女の第一声はそれだった。その言葉に、レンとアランの表情からすつと血の気が失せる。

「戦場を巡るジャーナリストって、何よ。こんな命をに関わるような職業を選んだ理由がわからないわ。それに、志望理由も全然適当だし。まあいいわ。なんでこんな職を選んだのかは知らないけど、一応面談はしてあげる」

くいつと度のキツそうなメガネを持ち上げると、ミシエルは厳格な口調でこう言った。

「さあアラン。その椅子にすわりなさい」

「……ハイ」

アランは厳しい口調のミシエルに恐縮しながら椅子に座ると、ピンと背筋を伸ばして、しかし目を合わせずに視線を泳がせる。

「はい、第一の質問。なんで？」

そう、ミシエルは簡潔かつ簡素、至極平明単純明快シンプルイメージに三文字で尋ねる。

「えつと……その……世界を見て回りたい……から」

「だからなんで？　なんで戦場なのかしら？」

反応速度コンマ0.2秒で尋ねる。そのあまりの回答速度にレンは閉口する。

「えつと……なんつーか、前線のヤバイ状況を知って……」

「なんで知りたいのよ。いらないでしょ、普通」

相変わらずの反応速度、否、アランの言葉が終わることを待つこともなく尋ねる。このあまりにも厳しい状況にレンはうっすらと冷汗を浮かべる。

「死ぬ気？　ねえ、死にたいの？　なんなら私が今ここで殺しまし  
ようか？」

どこからか白板で使うような巨大なコンパスを取り出し、ばっちゃんばっちゃんと開いては閉じる。その様子を見て、アランは口をぱくぱ

くとさせる。

「シニタクアリマセン」

「なら書き直しね。ああ、新しいのをあげた方が早いかしら。はい」  
そう言うと、ミシエルは新品の真っ白いカードをアランへと差し出す。アランはそれを受け取ると、刹那の時間で回れ右をする。

「し、失礼しました……」

「ああ、レン。あなたのは大丈夫だから。夢に向かってまっすぐ邁進しなさい」

「あ、はい。わかりました」

そう言うと、半ば硬直しきっているアランを引き連れて職員室を後にする。

この後、アランにじくじくと小一時間に渡って文句とも言えない、かといって愚痴ともいえないような苦情を述べ続けたのは言うまでもないことである。

こうして、今日もレンにとって平和で貴重な日常が終わっていくのだった。

## 第1章 Introductory Chapter (後書き)

課外活動のキャンプ。

「起きなさいッ！」

そこには空鍋を持って仁王立ちするリサの姿があった。

前夜、ついアランと話しこんで夜更かしをしていたレンはうたたねしていたところをリサに叩き起こされる。

だが、リサが真に怒っている原因は他にあった……。

次章、第2章 Discovery Story

## 第2章 Discovery Story

### 第2章 Discovery Story

無機質な一室。

壁に羅列されたボタンを見る限り、それは部屋というよりもエレベーターであることがわかる。

そこには、僕と二人の少女。僕達三人は黙ったまま何かを待つようにエレベーターの表示を見つめる。

表示階を見る限り、少しずつエレベーターは降下していることがわかる。

わずかな振動、ゆるやかな動き。ゆっくりと揺れ続けるエレベーターは確実に、それでいて緩慢に降り続ける。

「……？」

一人の少女がふと、不思議そうな表情でエレベーターの表示を見上げる。

少しずつ降りていたエレベーターは、気付くと13という表示を残してその動きを止めていた。

「故障かしら……？」

少女の一人はがんとパネルを叩き始める。だが、そんなことでエレベーターの故障が直れば苦労しない。

止まってしまったのなら、動き出すまで待つしかない。

僕はそう決めると、エレベーターの壁に寄りかかる。

ほんの少しの違和感。そして、どこかで鳴り響く警鐘。

けれども、そんなものはただの思い過ごしに違いない。僕はそう決めつけると、エレベーターの表示が変化するのを待ち続ける。

そうして何分が経過しただろうか。いい加減エレベーターが動き出さないことに嫌気が差してきた頃、その異変は起こった。

閉じられた扉がぎしぎしと軋みながら開き、そして何か丸いものが投げ込まれる。

突如、白煙に満たされる密室。それは吸うだけで喉に激痛が走り、目から涙が溢れ出す。そして鳴り響く火薬の爆ぜる音。金属がぶつかりあって反射するような鋭い音が耳を刺激する。あつという間に倒れ伏す二人。額に口を開き、その命は一瞬で奪われたように見えた。それを見て、僕は覚悟する。もう、これで全てが終わりなのだ。次の瞬間、熱い何か体が中を通り抜けるのを感じ、僕の意識はそこで途絶えた。

「起きなさいッ！」

激痛が彼の頭を襲う。まぶたの裏には幾百幾千の星が散り、頭の中をぐわんぐわんという音が駆けめぐる。最初は視界を覆いつくすほどの星の海だったが、やがて時間が経つにつれて星の数も減り、反響するような音も聞こえなくなってくる。

「いつまで寝てるのよ。人が働いてるっていうのに……。アンタもすっかり働きなさいよ」

「おいおい、起こしちまったのか？ もう少し寝かせといてやれよ。昨日は俺とダベってたから、3時間も寝てないハズだぜ？」

「いいのよ別に。そんな夜遅くまで起きてたコイツが悪いんだからボヤけていた視界が徐々に鮮明になっていく。目の前には、空の大鍋を持って仁王立ちしているリサと、半ば呆れているような表情をしたアランの姿があった。

「え？ ……え？」

「ようやくお目覚めか。リサにブン殴られて頭壊れてないか？ もしもーし」

「え、あ、まあ、うん。大丈夫………だけど………？」

頭を襲う酷い頭痛。頭頂の辺りに触れてみると、熱を持って腫れて

いるようだった。

アランはその腫れた辺りをさすりながら、やれやれとため息をつく。  
「あーあ、タンコブになっちまったな。ちょっと待ってる。氷囊…  
…つっても氷がないから水囊か？ とにかく用意してやるよ」  
しばらくレンの傷をみていたアランはぼんとレンの肩を叩いて立ち  
上がると、何か代用品になりそうなものはないかと探し始める。

そんなアランの様子を見て、リサは冷ややかに言う。  
「まったくおアツいことで」

「ばーか、男の友情だよ。献身的な方が男には好かれるんだぜ？」  
そう言ったアランの顔は真剣そのものである。だが、リサは汚いも  
のでも見るかのような表情を浮かべ、数歩後ろに下がる。

「キモっ！ まったく同性愛とか信じられないわ！」

「んなわけねーだろ。友人を大事にしとけば、将来見返りが大きい  
んだぜ？」

見返り、という言葉聞いて考えが変わったのか、リサはうんうん  
という風に頷いた。

「なるほど…そういう考え方もあるのね」

「納得しないでよ！」

目の前のもんでもないやりとりを聞いて、レンは思わず立ち上がる。  
だが、その途端にふらふらと体が傾いた。危なげな様子のレンをア  
ランは抱き止めると、ゆっくりと椅子に座らせる。

「おいおい、無理するなよ」

「うー…なんだかぼーつとする」

レンは目頭を押さえながら座り込む。アランはタオルを川の清水に  
浸して作った冷却材を彼の患部に当ててやる。

「さっきのはジョークだが、友人を大切にしたいってのはマジだぜ  
？」

「あのやりとりを聞いていたら、それすらも信じられないよ……」  
なかなか立ち上がれないレンがさすがに心配になってきたのか、リ  
サも空鍋を置いてレンのそばに座り込む。そして、やや申し訳なさ



そんな表情を浮かべて謝った。

「あー、なんていうか、やり過ぎたわね。ごめん」

「あんなデカイ鍋で殴ることないだろ？」

何人分のカレーが作れるかわからないほどの巨大な両手鍋を指さしながら、アランは呆れ果てた様子で言った。

「そうね……。せめて片手鍋にしておくべきだったわ」

「そうそう、せめてそれくらいの優しさを……」

「なんでそうなるのっ!? とうか鍋は人を殴る道具じゃないからね!? 食べ物煮熟たり炒めたりする調理器具だからね!? 二人とも使い方間違ってるよ!」

茫然としたような表情でレンを見つめる二人。え、お前何言ってるの、とその表情が語っている。

「鍋蓋が防具で鍋が武器だろ？」

「ほら、よくあるじゃない。じゃんけんをして、勝った方が金槌で殴り、負けた方が鍋蓋で防御するっていう……。あれって金槌がなかったら鍋で代用するんじゃないっけ? 取っ手があつて、先っぽは金属製つて感じで形状似てるし……」

「金槌でやつたら死ぬよ! てか全然似てないし! 二人ともこの空気はなんなの!? この面白くもないポケッツコミは!？」

リサとアランは黙って顔を見合わせると、大きなため息をつく。そして、炊事場のすぐそばを流れる河川の方へと視線を向ける。

「あはははは、待て〜!」

「うふふふふ、ここまでおいで〜!」

まるでどこぞの恋愛小説やら、恋愛映画の一部分を切り取ったかのような風景がそこでは繰り広げられていた。レンはそれを見て全てを理解し、そして二人同様ため息をつく。

水をかけ合つて楽しそうに遊ぶ二人。夕焼けをバックに走る二人の姿はまさにそれである。

淡い茶髪の少年はウィリアム。ウィルと皆からは呼ばれ、親しまれ

ている。

恋人であるアリスのためならば、太陽を東に沈める程度のことならば平気でやってのける少年であり、その目的のためならば、どんな障害すらも乗り越えて突破できるほどのタフガイである。

しかし、それほどの実力を持っていながら、アリスが絡まなくなる途端にしなびたワカメのようになってしまう。

そして、栗毛を可愛らしくポニーテールにしている少女はアリシア。愛称はアリスである。

ウィルのことを月すらも恥ずかしくなつて姿を隠してしまうほど愛しており、そしてその恋愛のせいで性格が90度くらいは変わっただろうといわれている。

以前はおしとやかで可憐、という言葉が似合うほど物静かな少女だったが、今ではまさに大輪咲きの向日葵という表現が正しいといえる。以前の彼女しか知らない者ならば、思わず他人の空似とってしまうだろう。

もはや梓がハートマークで囲まれ、微妙に桃色のエフェクト修正がかかっているのではないかと思ってしまうようなその光景を見てレオンは納得する。あの二人がああなってしまうと、神の力をもつても止めることはできないだろう。

「アイツらは遊んで、私達は仕事して、アイツらは遊んで、私達は会議して、アイツらは遊んで、私達は料理して……もううんざりよっ！」

ついにリサは鍋を放り投げる。

「課外授業でのキャンプなんだから、せめていつもの授業中みたいにアイコンタクトだけでストップさせてほしいぜ……」

普段鍋など持つことのないリサがなぜ鍋を持っているのか、それは今が課外授業のキャンプの真っ最中だからである。

ヘヴンは大部分が都市として開発されたが、中央にそびえる山間部

は未だ人の手が入っていない自然が残されている。そうした部分にキャンプ場が造られ、院ではそこで時折キャンプが催されるのだ。住まいはテント、材料こそ手渡されるものの、食事は全て自分達で用意しなければならぬ。そして、その間どのように過ごすかもメンバーに委ねられる。有意義に過ごすことができるか、それとも無駄に過ごすこととなるか、全ては彼ら次第なのである。

ここはそんなキャンプ場内にある炊事場である。半屋外の炊事場は周囲が緑の自然で囲まれており、少し視線をずらせば山の木々や、さえずる鳥たちの姿を窺うことができる。

そんなキャンプ中、レンはすっかり居眠りをしてしまったのである。原因はもちろん、前夜興奮のあまり、アランとやや騒ぎ過ぎてしまったことであつた。

まな板の上には皮も剥かれていない野菜が転がっていた。それを調理する気になれる者は一人もいない。

「呼んでみようよ。やることがある、っていうことをきちんとアピールすれば、仕事をしてくれるかもしれないじゃない」

「ああ、やるだろうさ。アリスは根が真面目だし、ウィルはアリスのためならなんでもやる男だ。アリスが料理を始めれば、一緒になつてやり始めるに違いない。だが、あの桃色ラブラブフィールドをここで展開されると、そこで同時に作業する人間がどうなるか……」

「私はパス。遠くでぼんやり見ているわ。あんな毒気に晒されたら、それこそ気が触れてしまいそうよ」

「かといつて何もしない、ってわけにもいかないよね。お腹も減つてこない？」

ぐー、という音を奏でる誰かのお腹。それが誰か、ということを追及しようとする者は誰もいなかった。つまりはそんなことを気にする気にもならないほど空腹であり、かつ苛ついているわけである。

「おい！ ウィル、アリス！ ご飯の支度するから手伝ってー！」  
ついに我慢できなくなったレンは、二人に向かって手を振りながら大きな声で呼び掛ける。それが聞こえたのか、ばしゃばしゃと水を

跳ね上げながら二人はこちらへと向かってくる。

「ごめんなさい、ついウィルと遊ぶのに夢中になってしまいました……」

「でも、サボってたぶんはしっかりと仕事させてもらおうよ。さてアリス、今日の献立は？」

「えーと……肉じゃがとサラダ、それにご飯ですね。肉じゃがはそんなに難しい料理ではありませんし、サラダも野菜を切るだけです。ご飯を炊くのはコツがいりますが、私がやっちゃいます。だから、ここは私に任せて皆さんは休んでいてください」

「アリス、ボクも手伝うよ。君一人だけに働かせるわけにはいかないじゃないか」

「まあウィル、手伝ってくれますか？　ありがとうございます！　えつとですね……」

さつそくフィールドを展開し始める二人。毒気に当てられる前に避難することに決め込む三人。どうにか避難が間に合ったが、桃色のフィールドによって、炊事場は異様な空気に包まれる。それをぼんやりと見つめるレン達。

「それをそうして……さすがです、ウィル！　私が思った通り……いえ、思った以上です！」

「当然さ。君の思ったことすらわかるのに、言ったことをボクが理解できないわけないだろう？」

「ああ、ウィル……あなたって本当に素敵です……」

「そんな君も……素晴らしいよ……」

三人は背中を向けて目を背ける。ここまでおおっぴらにやられるともはや文句を言う気にさえなれなかった。二人から視線を外すと、まったく関係のない話を始める。

「あー、ホント夏だよなあ……」

「夏ねえ……」

「夏だねえ……」

すでに18時だということにもかかわらず、未だ西の空に輝く太陽を見

上げて夏をひしひしと感じつつ、黄昏に染まりつつある森でぼんやりと時を過ごした三人だった。

「はい、あーん……」

「あーん……もぐもぐ……口の中に入れた途端に広がるアリスの優しさ……、それにほのかに感じるアリスの慈しみ……、そして飲み込んだときに感じるアリスの愛……。さすがアリス、料理も完璧だよ」

「何の味がする？」

「フツの醤油とみりん、あと少し酒も入っているんじゃないかしら？ たまねぎはもつと細かくして、もつと長い時間煮込んだ方がとろけて美味しいわよ」

「個人的にはあと白滝が欲しいところだね。というか、なんで肉じやがなの白滝がないんだらう？」

「アリスが入れ忘れたからだろ？」

「ホントね、よく見たらまだカゴの中に入っているわ」

食事中もフィールドを形成し続ける二人。ウィルとアリスの愛の結末の前には、白滝の入れ忘れという致命的なミスでも無力である。黙々と食事を続ける三人。さすがに食事場所を変えるわけにはいかないの、仕方なくこのバカップルとともに食事をすることとなった。

二人の眼中にないようで、毒気に直接当てられることもなく食事を過ごすことができたのは幸いだといえるが、聞いているだけでもむず痒くなってくるようなセリフの往来に、そろそろ限界を迎えつつあるリサだった。

「あーもう頭来るわ。私達がいるっていうのにイチヤイチヤイチヤ……」

「そうカッパするなよ。向こうが何かしてくるってわけじゃないんだ、少し大人になろうぜ？」

「そうだよ。僕達は僕達で盛り上がればいいんだしさ」

だが、リサは頬を膨らませて口を尖らせながら、不機嫌そうな表情を浮かべて文句を垂らす。

「でも、こんな背筋に来るセリフ、たとえば……」

「ああアリス……。君の盛り付けはまさに芸術品だ。たてるならば……ミロのヴィーナスのよう。食べてしまうのがもったいないよ」

「そんな……私はウィルのためにきれいに盛り付けをしたんですよ？ 食べてくれないのでしたら、たとえどんなに美しくとも、意味がないですよ？」

「……とかよ。我慢できるかしら？」

レンとアランは少しの間考え込む。二人としてもあまり恥ずかしくないセリフを聞き続けるのはやはり苦痛であった。かといって、この状況の二人に割り込めるだけの勇気をレンは持っていない。アランに至っては、状況を変えようとする努力すらも、どうせ無駄だと諦めきってしまった。

「まったく、使えない男どもね」

リサは皿を一度テーブルに置くと、ずいっと身を乗り出して二人の間に割って入る。

「ちよつとウィル、アリス！ アンタたちがいちゃいちゃしたいのはわかるけど、せめて時と場所つてものを考えなさい！ 今は課外授業のキャンプ中であって、このキャンプの目的は“参加者達の絆を深めること”よ！ アンタらの絆を深めるのもいいかもしれないけど、少しは私達のことも考えなさいよ！ はっきり言っとうんざりだわ。ウィルのキザなセリフを聞き続けるのも、アリスのくねくね踊りを見ているのもね」

しばらくの間、呆けた表情を浮かべていたウィルとアリスだったが、やがて顔を見合わせると笑い始める。

「あはははは、見てご覧アリス。隣に誰もいないものだからボクらの間に割って入ってきたよ」

「うふふふふ、でもウィル。本人の前でそういうことを言うのはよ

くないですよ。もちろん、本人から隠れて陰口というのもあまり賛同できませんけどね……。でも、嫉妬は……」

顔を真っ赤にして口を開きかけたリサだったが、強制的にアランに押さえつけられ、鎮圧される。

「もが！ もがもがもがが！」

「落ち着けて！ アイツらがあんなってる限り、何を言っても意味ねえよ！ 言うだけ無駄だって」

「むぐぐ！ むがむがが！ ……もがッ！」

「ふごおッ!？」

突然腹を押さえたまま撃沈するアラン。どうやらリサが思い切りみぞおちへ肘鉄を食らわせたようだ。

「はあ……はあ……鼻と口を同時に押さえられたら死ぬわよッ！

まったく何考えているのかしら！」

「でも、だいたいはアランが正しいよ。僕達じゃあどうしようもできないもん。仕方ないさ、僕達は僕達で楽しもうよ」

「納得できないけど、仕方がないわね」

轟沈したアランを放置したまま二人は食器や鍋の片付けを始める。

食器を流し台へと運び、スポンジへ洗剤を染み込ませて、ごしごしと食器をこすって洗う。食器は泡に包まれ、みるみるうちに綺麗になっっていく。

「アンタはさ、ああいうの憧れたりしない？」

「ああいうのって……?」

レンは鍋の外側にこびりついたススを落としながらリサに聞き返す。

リサは食器をこする手を止めて、真剣な表情で尋ねた。

「好きな人と思う存分戯れて、甘えて、そして語り合うこと」

突然の予想外の問い掛けにレンも思わず手を止める。

「蕩けてしまいそうなほど甘くて、切なくて、でもとても楽しい時間。私はちよつと憧れちゃうな。さっきはあんな風に言っただけど、ウィルの言っただことも半分は当たってる。羨しいくらいに楽しそうにしてて、ちよつと嫉妬してる」

「リサ……」

「私にはあんなになっちゃうくらい好きな人はまだいないけど、いつか私もあんな風に……楽しそうに人と語り合えるのかな……？」  
レンはリサの思っていることを想像する。

気付くと心の中をぶちまけてしまうリサ。それは長い間一緒に過ごしてきてよく知っていることだった。思っていることを正直に言ってしまう彼女とともに過ごしていると、傷付けられることがある。時々レンも傷付いた。けれども、彼には我慢することができた。だから、一緒に過ごしてきた。最初は我慢できた者もいた。だが、回数が重なっていくとやがて彼女の傍に寄ることはなくなった。レンは理解している。リサがそのことを自分の短所だと認識しているながら、それをどうすることもできないことを。

「私さ……すぐに人に暴言吐いて、すぐに殴って……乱暴な女だね。こんな女のことを愛してくれる人なんて……」

「僕は知ってるよ」

「え……？」

リサが驚いたような表情でレンの方へ視線を向ける。

「リサが本当はすごく優しく、とても頼りがいがある女の子だって知ってる。自分のダメなところがわかってるから、自分のいいところを伸ばそうと努力してるのも知ってる。確かにリサはちょっと短絡的で、乱暴かもしれないけど……それ以上に人のことを思っただけ行動してるもん。それに、僕みたいに弱気なのを引っ張ってくれる……大事だと思うよ。そうやって自分のことを見つめ直せるのはね」

「レン……」

「きつと見つかるよ。リサの優しいところを知って、そんな優しいリサを守ってくれる……強いリサを愛してくれる人が……ね」

そこでレンは言葉を切って、再び鍋洗いに熱中する。取っ手の部分は洗いにくいたため、かなりの努力が必要なのである。

「ありがとう……レン。ちょっとだけ嬉しい」

「礼を言われるようなことじゃないよ」



レンは水道から一気に水を出して大量の泡を洗い流す。みるみるうちに泡は膨れ上がり、流し台は泡だらけになってしまった。

「おいおい、そんな泡風呂作ってどうするんだ？ 誰もそんな小さいところに入れるヤツはいないぜ？」

ようやく肘鉄から復帰したのかアランがやってきた。彼も自分が使った食器や空になったボウルなどを手にしていた。

「ウィル達は？」

「相変わらずラブラブしてるよ。ま、料理はほとんどあいつらがやってくれたから、片付けは俺たちがやるうぜ。……って、リサはまだ怒ってるのか？ 顔どころか耳まで真っ赤だぞ？」

ぱっと両耳を押さえるリサ。そんなリサの行動の意味を理解できず、首を傾げるアラン。

「あ、アンタみたいな馬鹿がいるから真っ赤になってるんよ！」

あーもう、口動かす暇があったら手を動かさなさい！」

「へいへい」

アランも水道の蛇口をひねって水を出すと、スポンジと洗剤を使って順々に皿を洗っていく。

リサはしばらくの間耳を押さえたまま立っていたが、やがてトイレに行くと言い残してどこかへ行ってしまった。

「あれ、リサは？」

長いこと泡だらけの流し台と格闘していたレンだったが、ようやく一段落ついて顔を上げた。

「トイレだよ」

「ふーん、そっか」

特に気にした風もなく、レンは次の鍋に手を伸ばした。

おそらく彼は気付いていなかったのだろう。彼女が怒りではなく恥じらいと喜びで真っ赤になっていて、恥ずかしさのあまりここにいることができなくなったということ。だが、そんなことは愚鈍な彼が気付くことはなかったのだった。

翌日、早朝六時。既に朝日は高く、木々の間には鳥達の歌声が流れ出ていた。

小高い丘には大小色とりどりのテントが張られ、朝が遅い院生達は清々しい空気に包まれながら、気持ちよく熟睡していた。

そんな中、元気な足音が森に響く。

現れたのは一人の少女。大きなあくびをしながら、水道の方へと歩いていく。

「ふわぁ……なんだか寝にくかったわ。背中が固いし、地面はでこぼこしているし……他の皆はよく平気ね……」

リサはばしゃばしゃと冷たい水で顔を洗い、ごしごしとタオルで拭いた。ようやく眠気が飛んだのか、すっきりとした笑顔で大きく伸びをする。

「んー！ いい気分ね。普段は早起きなんて滅多にしなかったからなあ。ま、たまにはこういうのもいいわね！」

歯磨きを済ませ、リサは洗面道具を持って一度テントの方へと戻っていく。そして着替えを済ませると、テントから飛び出して軽くストレッツ運動をする。

シヨートパンツに半袖のシャツという洒落つ気もないアクティブな服装だが、元気そうなその姿はむしろキャンプらしいともいえる。

「アリスもまだ寝てるし……レンも寝てるのかなあ」

レン達が眠るテントの方へと視線を向けるが、どうやら動きらしい動きはなかった。つまらなそうに口を尖らせると、リサは森の方へと駆け出していく。

「えへへ、ミシェル先生、確か森には美味しい夏ミカンがあるって言ってたっけ！」

基本的に人の手が入っていない森ではあるが、院生がキャンプのときに楽しく過ごせるように手入れされた部分もある。その一つが果物の木である。人が丁寧に世話しなくとも、美味しい果実を作るように品種改良された果物達は季節に見合った甘い果実を実らせて、

院生達をもてなしてくれる。

夏ミカン、びわ、桃、ブドウ、それから本来地面に身を結ぶメロンやスイカまでもが木に実っている。これは遠縁の植物同士からでも雑種を作り出す細胞融合という技術によって作られた果実で、正確にはほかの果物との間の子である。

「凄い……これ、スイカだよね……」

リサは恐る恐る木からぶら下がる小さなスイカを手にとる。普段市場で見かけるものと比べると、その大きさはかなり小さいものであるが、夏らしい果物といえば夏らしい果物だといえる。

「こっちは桃かな」

身軽なりサは次々木に上り、いくつかの果物を口にしてみる。それは予想以上に甘く、すぐさま彼女を幸せな気持ちにしてくれた。

「ふわあ……とろけるように柔らかくて甘い……。普段食べてるのと同じなに変わらないわ！」

しばらく美味な果物を楽しんでいたりサだったが、何かを思いついたのかすると木から降り、キャンプ場の方へと駆け出していた。

僕は夢を見ていた。

それは、いつもとさして変わらぬ日常。仲間たちが笑いながら楽しそうに過ごし、僕はそれを眺めながらのんびりと過ごす。

夢の中の僕もまた、やはりいつもと同じように仲間達がはしゃぎ回る様を見て笑っていた。

『でも、これもいつか終わる泡沫の夢なんだよね』

心の中の自分自身が問い掛けてくる。僕はその声に耳を傾け、そして答える。

「仕方ないさ。だって夢だもの。いつかは覚めちゃうものだよ」

『そういうことを言っているんじゃない。僕、つまり君がいつも体験している日常のことさ。ここの世界と何ら変わりはないじゃない』

か』

「やがては島を出て、戦争のある恐ろしい世界に行かなければなら  
ないってこと……?」

僕は眉をひそめる。わかつてはいたが、考えたくない未来。いつま  
でも仲間と遊び暮らすわけにはいかない。それはやはり、この夢と  
同じようにいつかは終わってしまうモノだ。

『今ある日常はやがて過去となり、消えていってしまう。君にそれ  
が耐えられるのかい?』

「耐えられないよ。でも……」

僕の心の中に一つの言葉が浮かんでくる。それは今の僕にとって大  
切なもので、そして未来の僕にとっても大切なものとなるであろう  
宝物だった。

「過去は消えない。心の中で思い出になるんだよ。それはいつでも  
取り出せて、光に透かしてみれば過去を思い出すこともできる」

『思い出さえあれば辛い日常から逃避できるってこと?』

「逃避するんじゃないよ。思い出には辛いものだってたくさんある。  
そういうのを乗り越えてきたっていうのは確かな自信になるでしょ  
? それがあれば、辛い日常でも乗り越えることができるよ!」

それはとても確証に満ちた言葉。光り輝く宝石のような思い出はい  
つまでも輝きを失うことはない。ましてや、苦労して乗り越えたよ  
うな思い出が未来の自分自身の助けにならないなんてことがあるだ  
ろうか、いやない。

……それを聞いてしばらくの間黙っていた“僕”だったが、やがて  
彼の口から笑い声が漏れる。

『思い出が自信に繋がる? 思い出を元にした自信が辛い日常すら  
凌駕する?』

何かよくわからない焦燥感。そして、聞くんじゃないという警鐘を  
鳴らす第六感。

「それが……間違っているとしても?」

僕は“僕”の言葉を促すような言葉をかける。聞いてはいけない、



ぐにぐにと頬を伸ばすリサ。目に涙を浮かべつつも、その凶悪そうに歪んだ表情にはやがて残虐な笑みが浮かんでくる。

「え、何言ってるのか聞こえないわよ？ ちゃんと答えてもらいなさいー。」

「ひやはははひはほはっへんはははははひひよっ！」

ついに手を出すレン。リサの脇の下に手を伸ばすと、そこを思い切りくすぐる。

「きゃはははっ！ ちょ、レン！ やめなさいって！」

「ひやはほっひほふへふほほひゃへへ！」

……ようやく長い戦いに終止符が打たれ、レンは頬の痛みから、リサはくすぐったさから解放される。

「はあ……はあ……私がくすぐりに弱いのは知ってたてやったのかしら？」

「痛い……そつちだつて僕が口内炎に苦しんでるの知ってるでしょ？ それになんだか頭も痛い……。なんかしたの、リサ？」

「それはアンタのせいよ……。アンタがいきなり飛び起きるから、思い切り私のおでこに激突したのよ……。」

「ああ……それでリサは怒ってたのね……。」

こくこくと涙を浮かべながら頷くリサ。額はぶくつと膨れ上がり、本当に痛そうだとレンは思った。

「ごめん……。」

「わかればいいのよ……。」

一騒動があつたにもかかわらず、隣では相変わらずアランとウィルがいびきをかき続ける。それを見て、レンは重要なことを思い出す。

「リサ……ここは僕達のテントだね。なんでいつの間に入ってるのさ？」

「それは……わざわざこれを持って来てあげたからよ。」

リサは端に置いておいたカゴを取り出す。そこには色とりどりの果物が入っていた。

「これを……？」

「朝散歩に出かけたら、たまたま見つけたから取ってきてあげたのよ。私一人だけが楽しむのもなんだか気が引けるからね。別に、アソタのために持ってきたわけじゃないのよ？ 私の気分が悪くなるから取ってきてあげたんだから、そのところ勘違いしないでよね！」

レンは桃を一つ手に取ってみる。ほどよく熟したその桃は、適度な弾力と重さを彼の手に感じさせてくれた。リサが差し出したナイフを受け取り、器用に皮を剥いていく。ある程度皮を剥いたレンは、その柔らかな果実にかぶりつく。

「……うん。凄く美味しい！ ありがとう、リサ！」

「お礼なんて……」

リサも桃を一つ手に取ると、同じように皮を剥いてかぶりついた。

「別にお礼なんていらさないわ！」

ふいとそっぽを向いてしまいうりさ。だが、そんなりさの様子を見てそれが彼女なりの照れ隠しであることはレンにも理解することができた。レンは笑いを浮かべて、もう一度お礼を言う。

「ありがとう、リサ」

「だからお礼なんて……一応すこーしだけありがたくだいておくわ。言っとくけど、ほんとに少しだけだからね！」

「はいはい、わかってるよ」

楽しそうな声が静かな森の合間に響く。

こうして二人は、朝の談話を楽しみながら甘い果実を思う存分味わっていた。

果物を食べ過ぎたため、朝食を辞退することにしたレンとリサは皆が朝食を取っている間、二人で河原の方へとやってきた。今日の予定は川で水遊びをするというものである。それなりの深さがあるので、泳いだりすることもできる。流れはさして早くはない。

さっそくビキニの水着に着替えたリサは、レンが河原で待っていていよ

うと言っているにもかかわらず、一人だけ川に飛び込み気持ちよさそうに泳いでいた。レンも水着に着替えてはいたが、かたくなに水の中に入ろうとはしなかった。

「レナー！一緒に泳ごうよお！」

ばしゃばしゃと水を跳ね上げながら、気持ちよさそうに泳ぎ回るリサ。その様子はまるで人魚のように華やかで、それでいて仔イルカのように無邪気だった。

レンはそんな様子を見つめながらも、河原に座ったまま一步も動かなかった。

「僕はいいよ。その……だから……」

リサは一度川から上がるとレンの正面に腰を下す。

「泳ぎましようよ？とても気持ちがいいわよ？」

「いや……だから……その……」

レンはバツが悪そうに言葉を濁す。レンのその様子を見てニヤリとした笑みを浮かべるリサ。背中からはよきによきと悪魔の羽が生えてくる。

「なーにー？大きな声で言わないとわからないわよ？」

「かな……だから」

にやにや笑いをさらに加速させながらレンに詰め寄るリサ。そして、もう一度尋ねる。

「泳がないの？」

「うー……かな……づち……」

それを聞いた途端、リサは河原をごろごろと転がりながら文字通り笑い転げる。

「あははは！か、金槌なんだ！レンって金槌なのね！」

「い、いちいち繰り返すことないじゃないか……。その、少しは努力したんだよ？少しは……」

やや語尾が弱まっていたが、ともかくクロールの形に腕を動かす。しかし、それを見てリサはやはり腹を抱えて笑い出す。

「れ、レン、それじゃあ沈んじゃうわよ！ホント愉快ねえ……あ



「はは……」

「そんなに笑うことないでしょ……教えてくれる人なんて……いなかったし……」

「なら私が教えてあげる。ついてらっしゃい」

リサはレンの手を取ると、水の中へと引きずり込む。

「わ、ちよ！ リサ!？」

「いいからいいから。そんな泳げないままだと皆に笑われちゃうよ?」

リサはレンの手をやさしく握ると、まずは腰の深さまでの場所で体を沈める。

「まずは水に浮いてみましょう。それくらいはできるわよね?」

「わからない……」

リサは小さくため息をつくが、諦めたような表情を浮かべてレンの足を払う。

「うわっ!？」

ぱっしゃーんという音を立てて頭から水に突っ込むレン。だが、その手はしっかりとリサが握っていたため、沈んでいくようなことはなかった。

「ほら、浮かべたわよ。あ、体に力を込めると沈むから、可能限り楽な姿勢でね」

「ぶくぶくぶくぶく……」

「え、何? ぶくぶく言ってるだけじゃ聞こえないわよ?」

レンはなんとか足をつけようとしますが、そのたびにリサが足を払うので、いつまで経っても顔を上げることができなかった。やがてぶくぶくも止まり、レンの抵抗もストップする。

「やっと諦めたのね。じゃあまずはバタ足からしてみましょう」

リサはそう言うが反応が返ってこない。確かに上手に力は抜けているが、いくらなんでも抜きすぎているようにリサは感じた。試しに手を離してみると川の流れに従って流されていく。

「まさか……!」

リサは急いでレンを抱き起こす。彼女の予想通り、レンは酸欠を起こして意識が吹き飛ぶ直前だった。がつくんがつくんと肩を掴んで揺らしながらリサは叫ぶ。

「レン！ 起きなさい！ 寝たら死ぬわよ！ あ、これは雪山ね。ともかく起きてーっ！」

しばらく河原に体を横たえていたレンだったが、ようやく意識が戻ってきたのか、目をゆっくりと開いた。

「あれ……リサ？」

レンはゆっくりと体を起こそうとするが、それをリサに止められる。「もう少しゆっくりしてなさい」

「え、でも……」

「いいからいいから」

リサはレンの額に手を置く。そこはちょうど今朝、思い切り頭をぶつけた場所でもあった。

「こんなに腫れちゃってるわね。まあ、お互い様だったけどね」

「その……リサ？」

「私のは大丈夫。もうあんまり痛くないから」

「そうじゃなくて……その、恥ずかしいんだけど」

レンの頭は硬い河原の石の上ではなく、柔らかな太ももの上にあつた。その太ももは細い肢体に繋がり、程よく発育した胸を通り抜け、そしてその上にリサのやや赤く染めた頬があつた。

「……何が？」

「……ひざ……まくら……」

リサは悪戯っぽい笑みを浮かべながら耳元で囁くように尋ねた。

「何よ、嬉しいの？ 嬉しいのかしら？」

「いや……そうじゃなくて……アランとか、すごいニヤニヤしながら見てるよ……？」

瞬間、硬い河原の石へと落下するレンの頭。リサは突然立ち上がり、

川の中で二人の様子を見ながらニヤニヤ笑いを浮かべるアランの方へと歩み寄る。

「ふごあッ!」

そのままみぞおちへと掌底を叩き込んで撃墜する。可愛らしい笑みを浮かべながら戻ってきて、レンの頭を膝の上に乗せる。

「嬉しい?」

「怖い」

再び河原の石へと頭をぶつけるレン。リサは口を尖らせて頬を膨らませる。

「ふん! せつかく人がサービスしてあげてるのに嬉しくない、なんて何様よ」

「いや……そんなサービスいらさないから」

「気分が悪いから一泳ぎしてくるわ」

そう言い残すとリサは川の方へと向かっていく。すでに川には数人の院生達が楽しそうにしていたが、その輪には入らずまっすぐに深い方へと泳いでいく。

「いたた……あー……あんな深いところまで行っちゃって……怖くないのかなあ」

「ま、あいつは泳ぎが上手いから大丈夫だろ?」

いつの間にか復活したのか、アランはレンの隣に腰を下す。

「俺でよければ膝枕するぞ?」

「いや……遠慮しておくよ……」

レンは河原に座り込むと、優雅に泳ぐリサを見つめる。

「あーあ、僕もあんな風に楽しく泳げたらいいんだけどねえ……」

「あんなんきつかけだよ。俺だって最初は泳げなかったけど、リサに海に叩き込まれて死に物狂いで何とかしたらいつの間にか泳げるようになった」

「それは……災難だったね……」

レンはその様子を想像して身震いする。運動神経のいいアランならまだしも、運動音痴で金槌なレンならばどうなっていただろうか。

レンはその先を想像するのが怖くなってやめた。

「しかもいきなり着衣泳だぜ？　かなりレベル高いよなあ……」

「……また何かしたの？」

「……昔、あいつがまだAカップだった頃、貧乳って言ったらジャイアントスイングで公園から柵超えて海まで投げ飛ばされた」

「それは……当然といえば当然かもね」

ちなみに今ではBカップとなり、本人もそこまで気にしているわけではないようだ。た。

「昔は異常なまでに気にしてたからな……」

「懐かしいよね。アリスが結構大きくて、リサは比較しちゃって……」

……

「今じゃどつちもいい感じだよな」

ニヤニヤ笑いを浮かべながら、女子陣が見たら即引くような表情で妄想を続ける二人。

「それは聞き捨てならないなッ！」

そのとき、どこからか一人の少年が颯爽と現れる！

素敵な笑顔をその顔にたたえ、淡い茶髪を揺らしながら現れたその少年は名をウイリアムといった！

ウイリアムは二人の前に陣取ると、至極真剣な表情で語り始める。

「ああ、聞き捨てならない。ダメだダメだ全ッ然ダメだ！」

「何がダメなんだよ」

アランがそう尋ねると、ウイリアムはびしりとアランの鼻先へ指を突き付ける。

「アリスと他を比較しようってこと自体が間違っているッ！」

キラーン、という効果音が鳴りそうなほど眩しい笑顔を浮かべるウイリアム。無駄に歯の白さが輝かしい。それを呆れながら見つめるレンとアラン。

「じゃあ……アリスがりサよりも優れてる点を挙げてみるよ。言っとくが、胸の話だからな」

「そんなことはわかっているッ！」

ウィルは指をぴつと一本立てる。

「その1、まずは大きさだ。アリスの胸のサイズはCカップ。正確な数値の方は控えるとして……この時点でリサよりも勝っている」  
「アリスってこだったのか!? いつの間にバストアップしてたん  
だ……」

アランは感心したように頷き、ウィルの話を身を乗り出して聞く。  
レンも顔こそ背けているものの、耳はしっかり意識を集中させて話を聞いていた。

流れを掴んだウィルはもう一本指を立て、びしつと二本の指を立てる。

「その2、形だ。リサの胸はやや垂れ気味で形も美しくない。つまり、少々崩れ気味というわけだ。その理由はいくつかあるが、その一つにブラの選択がある。ブラジャーは胸を保護すると同時に胸の形を正しく矯正するという役割も担う大変重要な下着なのだ。リサはブラを新調するのを面倒くさがって古いやや小さめのモノを使用している。それゆえに無理な力がかかって形が崩れてしまうのだ！ それに対し、アリスはブラジャーの着用を怠ることはない。しかも、使用しているブラジャーはきちんと体のサイズに合ったものだ。だからその形は綺麗に保たれ、崩れにくくなっているわけだ」

「なるほどな……いや、ブラにそんな機能があるとは知らなかったな……」

そして、トドメだと言わんばかりにウィルはもう一本指を立てる。

「その3、これはずばり一番大切な部分、乳首とにゅりぶっ！」  
がつ、という鈍い音とともにウィルが轟沈する。その後ろから、ひよっこりとアリスが現れる。

「ウィル、何をしてるんですか？」

花柄のワンピースタイプの水着に身を包んだアリスは、両手を後ろに組んで沈みゆくウィルを不思議そうに見下ろす。そんな可愛らしい水着に一瞬目を奪われたレンとアランだが、ささつと隠されたアリスの手に大きめの石が握られていたのを二人は見逃さなかった。

「レンさん、アランさん、何かウィルが申ししていましたか？」  
明らかにエフェクトがかかっているその声に、二人は生唾を飲み込む。

「う、ううん、何も言っていないよ」

「お、俺らはぼーっとしていただけだぜ？」

「ふーん……」

しばらくの間、彼女は冷ややかな目で二人を見つめていたが、やがて小さなため息をついて頷いた。

「そうですか……。それにしても、ウィルはどうしてまた突然寝ちやっただのでしょうか……。ちょっと起こしてきますね」

白目を剥いたウィルをずると川の方へと引きずっていくアリス。そのまま去っていく後ろ姿を見送りながら、二人は一気に冷や汗が噴き出すのを感じる。それと同時に、鼻血がつつーと流れ落ちる。

「女って怖いな……」

「うん、アリスもリサもすごく怖いよ……。僕はその、もし女の子と付き合うことになっても、静かでおしとやかな子を選ぶようにするよ」

「そうは言ってもな、アリスももとは静かでおしとやかなヤツだったろ？ やっぱり女って生き物は何かしら恐ろしいもんなんだよ」

アランが悟ったように言う。レンもその言葉に思わず頷く。

「もしかすると、男の方がまだマシかもな」

「僕はそういう趣味はないけどね。でも、今だけは肯定しておくよ」  
レンはため息をつきながら頷く。女の友達よりも、男の友達の方が思考を理解することができる分、行動や考えを読むことができ、仲良くできるのではないかと思ったレンだった。

「はあ……女はこええなあ……レン？」

「……」

その時、レンはただならぬ何かを感じた。

たとえるならば焦燥感のようなもの。虫の知らせとでもいうのだから

うか。冷たい汗がじわりと体を湿らせる。

「いやっ！ た、助け……！」

耳をつんざくような悲鳴。それを聞いた途端、レンは弾かれたように立ち上がる。

「リサ！？ なんで……！？」

「あ、足が……足が吊って……ごぼごぼ」

リサが川の中でもがきながら流されていた。それはどう見てもふざけているようには見えない。まさに彼女は溺れていたのだった。

「リサーッ！」

「おいレン！ お前待ッ！？」

アランが止めるよりも早く、レンは駆け出していた。

恐らくリサは足を吊ってしまったのだろう。そして、背が届かない深みへと流されてしまっていた。

レンは無我夢中で川へと飛び込む。そしてむちゃくちゃに水をかき分け、リサの元へと向かう。

頭の中を何かがガンガンと響く。それはリサが失われるかもしれないという恐れか、それとも泳げないことに対する悔悟の念か。

大好きな日常。それを作り出す大事な要素が目の前で失われようとしている。それが、レンにはどうしようもなく我慢できなかった。

「リサ！ リサ！」

「あ、アンタ……泳げなかったんじゃ……」

リサはなんとかレンに掴まる。むちゃくちゃに手足を動かしていたレンだったが、なんとか体を安定させるとリサの体をしっかり支える。

「泳げないけど……リサがいなくなるかもって一瞬考えたら我慢できなくて……」

彼は自身が泳げないことを忘れて川に飛び込んでいた。

だが、リサを無事に支え冷静になるにつれて、彼は大事なことを思い出していく。

そう、彼は“泳げない”。夢中でその事実を忘れていたとしても、

それは不変の事実。むちゃくちゃな泳ぎ方では一時を凌ぐことができても、長続きすることはない。

「あ……」

徐々に痺れ始める手足。むちゃくちゃに動かしていたため、すぐに限界がやってきたのだった。

「やばい……疲れてきた」

「え、ちよっと！ レン！」

リサはレンの体をぎゅっと抱きしめる。それはさらに悪い結果を招いた。リサによって制限されたレンの体は疲労が加速度的に蓄積していき、ついに限界を迎えた。

「もう……泳げない……」

「レン！ レン！」

やがて沈み始めるレンの体。リサは手だけでも動かして必死に泳ぐが、レンを助けることはできなかった。

「やだ、ちよっとレン！ ダメ、諦めないでよ！ ねえ、ねえったらー！」

必死に手を伸ばす。もはや吊ってしまった足も無理やり動かす。だが、それでも伸ばす手がレンに届くことはなかった。

「レン！ なんでよ！ ちよっと待ってよ！ 誰か、誰かレンを助けてよーッ！」

レンは目を開いて手を伸ばす。だが、彼の体は徐々に沈んでいく。なんとか体を動かして泳いでいるリサを見て、レンは安心した。

（なんだ、泳げてるじゃないか。心配し損だなあ……）

徐々に遠くなる意識。苦しいを超えて何も感じなくなる体。

最後の最後までレンはリサの姿を見つめた。やがて目を閉じて、そこで彼の意識は途切れた。

『だから言っただろう？ いつか終わる泡沫の夢だとね』



真っ白な部屋。二つの椅子と一つのテーブルだけが置かれた小さな部屋。

どこか心の温まるようで殺風景な情景。僕はこの部屋を見て、何か落ち着くものを感じた。

一つの椅子には僕が座り、もう一つの椅子には“僕”が座っていた。  
『君は僕がせっかく注意してあげたのに聞かなかったね』

「君が……僕にあの鐘の音を聞かせてくれたの？」

警鐘の音。どこからともなく響いてくる音は、“僕”が鳴らした音なのだろう。“僕”はにやりという笑いを浮かべて話し始める。

『まあ、君のことだから無駄だとは思ってたけどね』

「まあ、君は僕だからその辺り、よくわかってると思うけどね」

僕も“僕”に合わせて笑みを浮かべる。

『これからも君を助けてあげよう。できれば次回からはきちんと従ってほしいなあ。これでも君のためを思ってやっているんだからね』

「ありがとう」

“僕”は椅子から立ち上がると、窓の外の風景を眺める。

その窓からは何が見えるのだろうか。少し気になったが、僕は立ち上がることができなかった。

『君は毎日が楽しい？』

“僕”は突然僕に尋ねた。少しの間僕は考えた後、その問い掛けに答えた。

「楽しいよ。リサもアランもたくさん遊んでくれるし、それを見ているだけで僕までわくわくしてくるよ」

『そう、それはいいことだ』

“僕”はくるりとこちらに向き直ると、再び椅子に座った。

『でも、油断してはいけけない。近い将来、必ず君は厳しい現実  
に直面することになる』

「うん……それはわかってる」

僕は近い将来のことを思い浮かべる。いつまでも遊んではかりい  
わけにはいかない。

『きつと君が思っているよりも早くそれはやってくる。今のうちに覚悟しておくことをおすすめるよ』

「わかった。肝に命じておくよ」

『さて……そろそろ戻った方がいい。君のことを待っている友達がいるだろう』

“僕”は再び立ち上がると、僕の手を取って誘う。

『さあ、その扉を開くといい。君の世界に戻ることができる。早く戻って安心させてあげなよ』

僕はゆっくりと彼の導くままに扉の前まで歩みを進める。

「これを開ければいいんだね」

“僕は”こくこくと頷く。僕は扉に手をかけた。温かな感覚が手を通じて伝わってくる。

僕は手に力を込めると扉を押した。開いた扉の隙間から光が漏れ出してきた。

『また会うときまで。See you later』

「あはは。Thank you for your kindness  
ss」

僕は徐々に光に包まれていく。視界が全て光に覆われたとき、僕の意識は失われた。

彼は目を開く。

そこは見覚えのない白い部屋だった。

時計が時を刻む音だけが響いている。レンは体を起こそうともせず、そのままぼんやりと天井を見上げていた。

ふと、膝の辺りに優しい重みを感じる。レンは少し体を起き上がらせて、そして安心する。

終わってしまったと思った夢は未だ終わりを告げることはなかったのだった。

レンが眠るベッドに体を半分預けて、椅子に座ったまま眠りこける

リサ。二つ並べた椅子に体を寄せ合わせるようにして眠るウィルとアリス。そして、真剣な表情でレンを見つめていたアラン。

「起きたか……」

「アラン？ 何が起こって……」

瞬間、頬に熱が走る。ひりひりと痛む頬。振りぬかれた手のひら。

レンは痛む頬を押さえると、涙を目に溜めながらも真一文字に口を結ぶアランを見上げた。

「ばかやろう……待って言っただろ……？ 泳げもしないのに無茶するんじゃないよ……。めちゃくちゃ心配したじゃねえかよあ……」

……

ぐくぐくと目をこすりながらレンの肩をがっしりと掴むアラン。レンは目を白黒させながらも、自分が無茶をしてしまったということだけはわかった。

「ごめん……心配かけて……」

「いいんだよお……お前が無事なら……無事ならいいんだよお……」アランはひしとレンの体を抱きしめた。レンもアランの体をぎゅつと抱きしめる。

「ごめんね……アラン、心配かけて……」

「いや、俺も殴って悪かった……とにかくお前が無事なら……」

「ふわあ……」

そのとき、ベッドに体を預けるようにして眠っていたリサが目覚めます。そして、目の前で繰り広げられている惨状を見て思わず叫ぶ。「きゃあッ!? き、キモッ! アンタらキモ過ぎ! 男同士で抱き合うとか最悪だわッ!」

「り、リサ!? 別にこれは無事を確かめあう男の友情って言うか……」

なんとか弁解しようとするレンだったが、アランが身を乗り出して堂々と宣言する。

「男同士抱き合って何が悪い! 俺はレンさえよければ(自主規制)だってするぞ!」

「ギヤアアーツ!? 信じられないツ! 不潔よ不潔ツ! 死ぬ! アンタらなんて死ぬ! 死んでしまえツ! そんなでもって同じ墓に入って(自主規制)でも(自主規制)でも(自主規制)でもしてればいいわ!」

「ちょ、や、僕には男と(自主規制)なんてことする趣味は……」

「まったく……ボクには同性愛というものが理解できないね」

「私もです……。もちろん男同士も女同士も……」

いつの間にか目を覚ましていたウィルとアリスまでもが全力で引く揚げ句の果てにリサは椅子を振り上げ、そしてアランはそれに立ち向かう。レンはすでにベッドの下へと避難しており、血みどろの戦いを見ないように、聞かないように目と耳を塞いでいた。

あとからレンが聞いた話だったが、レンとリサを助けたのはウィルとアリスだった。

川で誰かが溺れたからといって、そこに飛び込んでいってはいけなのは救助において基本ともいえるルールである。可能な限り陸から助ける方法を試み、それでも駄目ならば命綱を身に結んで助けに行くくらいでなければいけないのだ。

ウィルとアリスは絶妙なコンビネーションでレンを引き上げ、リサを陸に連れ戻した。そして迅速に救命措置を施し、レンはようやく息を吹き返したのだった。その間慌てに慌てて何もできなかったアランにミシエルを呼びに走らせ、そして他の院生を動員して担架まで作らせたというのだから、レンは二人の行動力に舌を巻くと同時に、感謝をしたのだった。

二人は笑ってこう答えたという。いくら愛する人ができたからといって、大事な友人を放っておく者がどこにいるだろうか。当然のことをしたまでである。レンは大事な仲間であり、もちろん愛する人が一番大事だが、だからといってレンを疎かにするわけがない。助けて当然のことであり、礼には及ばない、と。

レンはそれを聞いて、自分自身も彼らにとっての日常の一部だということに自覚した。それはレンにとってのリサと同じ、貴重でかけがえのない存在なのである。

レンは改めて二人に感謝をすると同時に、心配をかけてしまったりサヤアラン達に謝ったのだった。

「まあ……アクシデントがあつたが、ともかく無事にキャンプ最終日を迎えることができたわけだ」

体の至る所に包帯を巻いたアランが両腕を組みながら頷く。

「そうね。でも、私もレンも無事だからいいってことでね！」

一方、リサの方は頭に包帯を巻いている。結局あの後、リサは椅子による『脳天搗割殺し』によってアランを撲殺し、そしてアランは同時に繰り出した拳による『超弩級鉄拳制裁』によってリサを撃墜した。つまるところ、相打ちなわけである。お互い仲良く同時に沈み、仲良くレンの手当てを受けた二人を含む全員は何事もなかったかのようにプログラムを消化し、ついに最終日の最後の昼食を迎えることとなった。

例の事件の後、ウィルとアリスのチームワークのよさがレンの命を救ったということもあって、レン達は二人のことも少し認めることにした。ウィルとアリスも三人が認めてくれたこともあって、少しは自重しようということになったようで、五人で楽しみ、絆を深めるといふ本来達成すべき目的を完遂しようとしていた。

「さて……今回もまた自炊だ。だが、今回は今まで以上に強力で、強固で、それでいて密なチームワークが求められる。まるでウィルとアリスのように呼吸のあった行動が五人全員に求められるのだッ！」

「これはうまく連携をとって調理に当たらないと最悪の結末を迎える可能性すらあるわ。全員が協力して、素早く確実に仕事をこなさなければならぬのよッ！」

アランとリサは息のあつた任務発表を行う。今回五人に課せられた任務は、最後の食事ということもあつてとても盛り上がり、そして楽しいものにしたという共通の意識があつた。それを達成するためには、二人の言う通り息のあつた一致団結の行動が求められるのである。

「これは……乗っておかないと損だね」

「それには同意します」

ウィルとアリスも立ち上がり、同じように大きな声でその後が続く。「わ、私たちはこの二人だけでなく、皆とも結束して一つの完璧な最終課題を成し遂げなければならぬのです！」

「ボクらが作るべき、最後にして最高の料理はこれだっ！」

四人の視線がレンに集中する。これが意味することは、すなわち彼こそがトリをするべきであろうという四人共通の意思である。

「今回くらいはツツコミもなしで……」

いつもならば思わずツツコミを入れてしまうような状況にも、レンは頭をぼりぼりと掻いて照れ隠しをしながら宣言する。

「ぼ、僕達の最終課題は……そう、キャンプのメインディッシュともいえるカレーライスだよ！」

まさに決まった瞬間だった。五人全員表情がもはや全てが終わつた後のように清々しい。だが、真の戦いはこれからなのである。

「いよっしゃ、俺が火を起こす！」

「具材の仕込みは私達に任せてくださいね！」

「じゃあアリス、始めようか！」

「じゃ、残つた私とレンは……！」

「ご飯の準備だね！」

五人はあらかじめ決められていたかのように自らの仕事に就く。アランの手には薪の束、ウィルとアリスは包丁、レンとリサはザルと米の入れた袋が握られる。

大振りな動きで薪を窯へと投げ入れていくが、その配置はまるで慎重に組まれたかのように正確かつ迅速だった。

ウィルが野菜を洗い、皮を剥いていく。それを受け取ったアリスが最も食べやすい大きさに切り、ボウルへと分けられていく。

レンとリサも水道の蛇口を捻り、米を威勢よく研いでいく。真っ白な研ぎ汁が幾度も流され、そのたびに米が研がれていく。

「ねえ、最初はあんなにギスギスしてたのに……今じゃこんなに楽しくて……」

「僕もびつくりだよ。皆最後には団結して、こんなにも息があった行動が取れるんだもんね」

「びつくりよね。私達とアラン、ウィルとアリスの五人全員で一緒に何かをするなんて、“初めて”のこのハズなのにね！この先頑張れば、私でも人と仲良くやっていけるかもしれないわね！」

「……え？」

レンの手が一瞬止まる。リサの言葉に感じた微妙な違和感。何気ない至って普通の言葉のはずなのにもかかわらず、レンはどこかに不思議な何かを感じた。

「……リサ、もう一回言ってくれませんか？」

「……？」

リサも一旦手を止めて、先ほど自分が言った言葉を思い出すように喋り始める。

「えーと……この先頑張れば、私でも人と……」

「そ、その前！その前だよ！」

「その前……私達とアラン、ウィルとアリスの五人全員で一緒に何かをするなんて、“初めて”のことだよね、ってところ？」

「初め……って？」

レンの記憶がテーブルのうえに置かれた写真立てを思い起こす。

その写真は確かに五人が仲良く写った写真だったはずだ。もちろんその五人とは、レンとリサ、アラン、そしてウィルとアリスの五人である。

レンは写真を撮った出来事を思い出す。それは去年のキャンプのことだった。そのときも課外授業で五人は確かに同じ班で行動し……。

(え……?)

彼にはそこで具体的に何をするためにどのように力を合わせたのか、それを思い出すことができなかった。レンの記憶には確かに五人で何かをして、その達成記念に写真を撮ったという記憶が刻まれている。だが、どんなに思い出すとしても、肝心のその中身がなんだったのか、彼には思い出すことができなかった。

「……レン？ どうしたの？」

「……え、あ……ごめん、ちょっと考え事してた」

リサは一年前のキャンプのことを覚えてはいないのだろうか。五人で“何か”をして団結し、そして仲良く過ごした一年前のキャンプのことを……。

レンはそのことをリサに尋ねようかとも思った。だが、それで彼女が気分を悪くしないだろうか、とレンは思った。だから、彼は言い出すことができなかった。心の中を正直に話してしまいうりサである。彼女の言うことをむやみに否定しては、せつかくの団結に綻びが生じてしまうのではないかと思ったからである。

「体調悪いとか……？」

「ううん、大丈夫。なんでもないよ」

レンはにっこりと笑い、再び米を研ぐ手を動かし始める。

それを見て、リサはしばらく心配そうにしていたが、やがて彼女も米研ぎを再開した。

「おつかれさまあー！ 乾杯！」

水をなみなみと満たしたコップを持ち上げて乾杯をした五人は、あつあつのカレーライスを口に頬張る。

「あふっ！ へもふまひ！」

水を慌てて飲むアラン。そんな様子を見てリサ達は笑う。

「慌てて食べるからよ」

「だって美味そうだったからついな……。でも、マジで美味しい！」



「そりゃあ僕とアリスが調理したカレーで」

「私とレンが炊いたご飯だもんね！ ね、レン！」

リサはレンの背中を思い切りどつく。その突然のことにびっくりしたのか、レンはごほごほとむせる。

「ごほつごほつ！ り、リサ、びっくりするじゃないか！」

「あ、ごめん……。ちよつと盛り上がり過ぎちゃった……」

「だ、大丈夫だよ。ただちよつとびっくりしちゃったただけだから……。次からはもっと優しくしてね」

リサはこくこくと頷く。それを見てレンはとりあえず安心してカレーを口に運んだ。

レンはあの後モリサの言葉のことが気になってしまっていた。

もしかするとレンの記憶違いで、実は違うメンバーと去年のキャンプを過ごしたかもしれない。あるいはリサが忘れているだけかもしれない。そう思い込もうとしても、一度生じた違和感を簡単には取り去ることはできなかった。

写真を確認すれば、そのどちらかであることはわかるはずである。

写真にウィルとアリスが写っていればリサが忘れてるだけで、写真に別の人物が写っていればレンの記憶違いということになる。

全ては自室に戻れば解決する話である。そう考えると、さして大きな問題でもないように彼は思えてきた。

それによくよく考えれば、ウィル達と一緒に行動したことがあるか、それともないかなど考えてみれば些細なことである。なぜそんなことにこんなにも長い時間考え込んでしまっていたのか、レンはそのことの方が疑問に思えてきた。

（きつと杞憂に終わる。こんなことは小さな問題で、明日にもなれば忘れてしまうに違いない）

レンはスプーンでカレーをすくい上げ、口に運んだ。口の中に程よい辛味と甘味が広がり、カレー特有の香りが鼻孔を満たした。

だが、そんな美味しいカレーライスをもつてしても、彼の心配事はわずかたりとも失せはせず、ますます頭を悩ませることとなったの

だ  
っ  
た。

## 第2章 Discovery Story (後書き)

夢は真？

それともただの泡沫？

不思議な夢を見た彼はまだ日常が続いていることに安堵する。

今日はアリスの誕生日会。誕生日プレゼントをどうしようかと彼らは奔走する。

けれども空には暗雲が渦巻いていて……。

次章、第3章 Truth

### 第3章 Truth

#### 第3章 Truth

体はどんよりと重く、僕は冷たい何かに横たわっていた。

両腕はしっかりとベルトのようなもので固定され、わずかたりとも動かすことはできなかった。いや、それどころか動かさそうという気力すら起こりもしない。まるで深い眠りに陥っているかのように体は言うことを聞かず、どんな抵抗を試みようととも無駄であることがわかった。

徐々にどこかへと運ばれていく。固定された視線は常に上だけを見続け、何が起こっているのか、それを判断する材料となりえるものは何もなかった。

やがて、どこかで見覚えがある何かの下に到着する。それは大きな傘の中に小さなライトが六つセットされた大きな照明。それは漫画か何か……そう、手術室のシーンで見たことがある大きな照明のようには思った。

「ドナー、脳波安定、脈拍正常、主要な臓器の働きに異常はありません」

「“クランケ”が到着しました」

がらがらとキヤスターか何か転がるような音が響き、やがてその“クランケ”とやらが到着したようだ。

「脳波安定していますが、培養液中の神経興奮物質の濃度が時折危険値を示します。早急に手術を開始しなければ危険な状態に陥る可能性があります」

「予定通り手術を行う。まずはドナーのズガイをセツカイし、ノウをトリダス。この際にシンケイを可能な限り傷付けないように注意してサギヨウを行うように。そして、“クランケ”のノウを傷付けないようにズガイ内にオサメ、シンケイを一本ずつ合わせていく。一本でも間違えれば惨事となってしまう。各自慎重にサギヨウを行



人々が住む居住区。買い物をしたり娯楽を楽しむための商業区。オキシデリボ本社が入り、研究員以外は立ち入り禁止の研究区。ゴミ処理場や発電所、浄水場や下水場などがある施設区の四つに分割された島のエリア内を移動するためのリニアモーターカーは、島民であれば無料で利用することが可能で、院がある商業区と寮がある居住区間を移動する他に、商業区へと買い物に出かけたり、また研究区へと仕事に出かける人々が利用したりと、島民の生活には欠かせないものである。

そんなリニアモーターカーの中で突然叫ぶ者がいれば誰もが驚く。ましてや休日の昼間ともなれば、たとえ微妙な時間であっても乗客の数はそこそこのものとなる。

「あ……いや……ごめん、変な夢を見てた……」  
「驚かせないでよね。はあ、びっくりした……」

乗客達もそれがなんでもないことだと知ると、皆がそれぞれの興味の対象へと戻っていく。

レンの隣にはリサ、そして向かいにウィルが座っていた。二人は話に夢中になっていたようでレンが眠っていたことに気付いていなかったが、レンが眠っていたのならばもう少し静かにすればよかったと反省する。

「ごめんね。えっと、アリスへのプレゼントだよね」

「そうなんだよ……一週間前からずっと考えていたんだけど思いつかなくてね……」

「それで当日になって、私達に泣きついたってわけね」

今日はアリスの誕生日会である。院内でもその話で持ちきりで、皆が皆彼女にどのようなプレゼントを渡そうかと画策し、朝から誕生日会に使われるケーキや料理の準備やらで、院内も大忙しだった。そんな中、ウィルは一週間前から誕生日に渡すプレゼントをどうしようかと考えていたのだが、今日の今日まで思いつかなかったという。

それもそのはず、普段から何かにつけて様々なものをプレゼントし

ているのだから、既に渡したものを渡すわけにはいかないということとを考えると、プレゼントできるものは自然に限られてくる。

「それにしても、セントラルモールに来るのは久しぶりだね」

「必要なものは大体は院で渡されるからね」

レンは列車の窓から外を眺める。

居住区とは比較にならないほど高いビルが何本も何本も林立している。全面に鏡でも張り付けられたかのように滑らかな姿を持つビルかと思えば不思議な形をしたビル、それから古めかしいレンガ造りのビルからその形は千差万別である。

「これが全部オキシデリボの子会社だつてことを考えると、オキシデリボはとんでもない会社だつてことがよくわかるね」

「それに、ボク達が普通に不自由なく暮らせるほどのいろいろな種類の品数……。いや、それどころか街一つ立派に成り立つほどのいろいろな種類の種類の事業。本当にこの会社はびっくりだよ」

やがて列車は一つの大きな建物の中に滑りこんでいく。高さおよそ三百メートル、敷地面積三百メートル平方のほぼ立方体の形をした建物……。それこそがこの島内最大にして唯一のショッピングモール、セントラルモールである。全55階建て、収納店舗数500を超えているその巨大なショッピングモールはそれこそ一日で回り切れぬほど広大で、ある種の観光施設としての役割も果たしている。施設内は数十の高速エレベーターで行き来することができ、またエスカレーターも配置されているので広大な店舗もスムーズに回ることができ。そして似た品物を扱う店は一カ所に集中しているため、目的の品物を探しやすい作りとなっている。

レン達は列車から降りると改札へと歩いていく。駅が店内にあるので、アクセスもばっちりである。

カードを改札に通し、駅を抜けると一階に広がる広大なロビーへとたどり着く。ここは各階のインフォメーション、直行エレベーターなどが設置され、ショッピングモール内の案内施設となっている。

「贈るとしたらやっぱり服飾系かな？」

「今年の夏物の服とかどうかしら？ 新作の服なら今までと被らないでしょうし、いいんじゃない？」

レンもそれを聞いてうんうんと頷く。だが、ウィルはどんよりとした表情を浮かべたまま答える。

「それがなあ……俺にはアリスがどんな服を着ようとも可愛く見えてしまうんだよ。だからどんな服を買えばいいかわからないんだ」

「あばたもえくぼ、ってやつね」

リサがうんうんと頷く。レンはリサがそんな言葉を知っていることにやや驚きながらも後に続く。

「僕達ならウィルみたいに色眼鏡を通さなくても見えるから、きつと今日こそ決まるよ」

ウィルはそれを聞いてぱあっと明るい笑顔を浮かべる。

「本当に君達……頼りにしているぞ……？」

「任せなさい！」

「任せてよ！」

レンとリサは笑顔でウィルにそう答えたのだった。

「この水色のワンピースなんて可愛いんじゃない？」

「ねえねえ、このオレンジ色のブラウスはどうか？」

「ちょっと派手ね……でも可愛いと思うわ」

ここはセントラルモールの中でも比較的高級品を扱う店舗である。

一流のデザイナーがデザインを担当しており、それらはどれも素晴らしいデザインで、海外でもとても人気が高い。中には1000ドルを超えるような品もあり、ちょっと服装にうるさい人でも十分に満足のいく品揃えである。

二人はたくさん並ぶ服の中からよさそうな逸品を選び出す。それは薄い水色のブラウスだった。

「アリスのイメージにはぴったりのカラーリングね」

「なるほど……」



縁はレースで彩られ、胸には白い薔薇の刺繍が施されている。生地も軽やかな布地が使われており、見るだけで涼しげな気分になると間違いないのである。

「これからの季節にはぴったりの涼しげな感じだもんね」

「さ、レジに持っていきましよう」

リサはブラウスをウイルに手渡した。滑らかな肌触りの生地にウイルはやや驚く。自分ではこんなものを選び出すことができないだろうと彼は思い、二人に感謝した。

「ありがとう……ボクにはとてもじゃにけど選べないな」

ウイルはブラウスを持ってレジへと向かう。レジの店員はここにことした笑みを浮かべながらウイルからブラウスを受け取ると、レジスターでバーコードを読み取る。

「498ドルになります」

ここでウイルは愕然としながら硬直した。

「ぶ！？」

あまりの価格にレンは思わず嘖き出した。相変わらず店員はにこにことした表情を崩さない。

リサはレンの隣でニヤニヤ笑いを浮かべる。どうやら彼女はそのブラウスがかなりの高値であることを知っているようであった。レンはそんなリサに尋ねた。

「リサ……もしかして、ここの服って……」

「高級ブランド品をメインに扱うお店よ。いや、今までウイルがブレゼントしてきたものの中にここまで高ランクのものはないだろうと思ってね。それに……ウイルが愛のためにどこまで頑張れるから見てみたいじゃない」

リサは意地の悪そうな表情を浮かべると、そのままウイルを見つめる。レンはそんなウイルを気の毒に思いつつも、やはりちよつとドキキしながらウイルの背中を見つめた。

当のウイルはというと、ブラウスを手にぶるぶると震えていた。おそらく、必死に心の中で葛藤しているのだろう。しばらくの間心の

中で戦いを繰り広げていたようだったが、やがて戦いに決着がついたのか、絞り出すような声で彼は言った。

「すみません、やっぱり結構です……」

「あら、諦めちゃった」

ついに諦めたウィルにリサは意外そうな表情を浮かべる。アリスを溺愛しているウィルならば、この程度の金額ぱつと出せるだろうと思っただけあって、その対応に驚いていたのだった。

ウィルが戻ってくる。その表情にはわずかばかりの怒りと、壮絶なまでの失意がはつきりと刻み込まれていた。

「き、君達……あの値段だって知ってて買わせたのかい？」

「いや、僕はまさかあんな高いものだなんて……」

「そうよ。高級ブランド品だって知ってたわよ」

ウィルの表情にうつすらと青筋が浮かび上がる。それを見てリサはニヤニヤとした表情を浮かべたまま言ったのける。

「だって、アンタが恋する女性のためにどこまでできるか見てみたいじゃない」

ウィルは呆れるような表情を浮かべてため息をつく。

「ぼ、ボクの口座には……今380ドルしか入っていないんだよ……」

……

「あら、思ったより入ってないのね」

「う、うるさいな……どうせボクはデートばかりしてバイトをクビになった愚か者だよ」

ウィルはすねたような表情を浮かべて答える。リサはそれを聞いてくすくすと笑う。レンは苦笑いを浮かべた。

「一応はバイトしてたのね。でもデートのし過ぎでクビって……」  
相当ツボにハマったのか、腹を抱えてうずくまる彼女の口から時折笑い声が漏れる。

「う、うるさい！ とにかく次に行こう、次に！」

ウィルは大きな声でそう言うと、一人で店を出ていってしまった。

三人は次に宝飾店へとやってきた。といっても今度は比較的値段の安い、いわば中級品を扱う店である。

「一応宝石も扱ってはいるもののその質は下の下であり、まともな者ならばそれをプレゼントしようなどという気にはならないだろう。」

「どんなものがいいかな」

「ペアリングを作ってそれをプレゼントするとかはどうかしら？」

リサは指輪が並ぶショーケースを見る。そこには様々な宝石に飾られた指輪が並んでいた。

「7月の誕生石はなんだい？」

「7月は……ルビーね。情熱や深い愛情に恵まれる宝石だったわね」「それならウィルにはぴったりだね」

リサはしばらくの間ショーケースを眺めていたが、やがてその中からルビーらしきもので飾られた指輪を見つけて出す。

「あつたわ。でも、この値段じゃペアリングは無理ね。それに宝石の質も粗悪だし……」

320ドルという値札が付けられたその指輪には、本当に欠片のように小さなルビーが飾られていた。ショーケースを照らす蛍光灯の光が反射して申し訳程度に光ってはいるものの、とても「ルビーの指輪」とは言いがたい品物だった。

「小さいね……」

「普通のルビーの指輪なら数千ドルとかするわ。まあ仕方ないといえは仕方ないわね……」

ウィルは壁に掛けられたネックレスの方を物色する。

「この辺は安いな」

「その代わり宝石はないわね。アイアンか、いいところシルバーじゃないかしら」

十字架、ハート、クローバーなど、チェーンも普通の鎖型からボールが多数繋がられたもの、他にも様々な形のネックレスが多数ぶら下げられていた。ウィルは時折壁に掛けられたチェーンを手を取ら

がら小さな声で呟く。

「アンタたちなんだから、ハートマークでいいんじゃない？」

顎の辺りに手を当ててしばらく考えていたウィルだったが、やがて唸るような声を出しながら答える。

「ハートマークは以前に送ったんだよ……」

「じゃあもうネックレスはいいんじゃないかしら」

そんなウィルの様子に呆れたようにリサは言った。ウィルは意気消沈したのか、情けない表情を浮かべる。

「だよなあ……」

リサはさっさとネックレス売り場から離れていく。

そのとき、ずっとブレスレット売り場を見ていたレンが声をあげる。

「ねえウィル、これとかどう？」

ウィルとリサがブレスレットのショー消すへと近づいていく。レンが指差すブレスレットは何の変哲もない、至って普通のブレスレットだった。

「これじゃあちよつとつまらなくない？」

「これだよ、これ」

レンは近くに掲げられていた看板を指差す。

「あなたの名前、ブレスレットに刻みます、か……」

「これでアリスとウィルの名前を刻んでもらってペアリングってのはダメかな……？」

名前を刻まれた二つの腕輪。一緒に何か刻印でも入れてもらえば、世界に二組とないカツプルリングの出来上がりである。

「でも、どれもこれも地味ねえ……」

純度の低い金や銀で作られたブレスレットが並べられているが、どれもこれも派手やかな装飾はない。レンらしい選択といえばレンらしいといえる。

「名前を彫り込む関係上、あんまり派手なのはダメなんじゃない？」

「そうなんでしょうね……」

三人はしばらくの間、ショーケースとショーケースの間を行ったり

来たりしていたが、ついに何も買わずに店を出た。リサは残念そうな表情を浮かべながらとぼとぼ歩く。

「あんまりいいものはなかったわね」

「やっぱり中級品だからだろう。愛するアリスにそんなものは贈れないよ」

レンはセントラルモールのパンフレットを取り出す。全ての店の位置がわかる詳細な地図と、各店の一言メモが記載された便利な一冊である。

「あとは……ぬいぐるみとか、さっきのお店よりも安い服とか……？」

「なんだかなあ……ぬいぐるみって随分と子供っぽいと思わないかい？」

ウィルは唸りながらレンの言葉に反論する。リサも一緒に頷き、やがて苦渋の表情で呟いた。

「じゃあ……服を見に行きましょうか」

「いらつしゃいませ」

店内に入ると、元気な声で女性店員が挨拶をする。

ここは比較的中級品が揃えられた店である。値段は50ドル以上くらいといったところだろうか。

ちよつと大人になりたい年頃の子がおしゃれ着を揃えるにはちょうどいい店である。

「どんなものをお探しでしょうか」

「えーっと……女性の誕生日に贈るプレゼントを探していて……その、どんなものをプレゼントすればいいかボクにもわからなくて……」

「かしこまりました。ではこちらへ」

女性店員は三人を店の奥へと案内する。そこはたくさん女の物の服が並べられたゾーンだった。

「今の季節ですと、涼しげなイメージの水色、青がオススメでございます」

店員はたくさん服の中から青いワンピースを選び出すとウィルの前に掲げる。

「これなどいかがでしょうか？」

それは比較的飾り気のない濃い青の生地が使われたワンピースだった。簡素で素朴、そして清楚なイメージを見る者に与える品ではあったが、やや子供っぽいデザインであった。

「ワンピースよりもブラウスの方が……」

「はい、では……」

女性店員は次に青のブラウスを選び出す。たくさんフリルとレースで飾られ、それでいて派手さを感じさせないデザインだった。先ほどのワンピースと比べても、いくらか大人っぽい印象を与える。

「ねえウィル、これはちょっとやめた方がいいわ」

「え……？」

リサがウィルの耳元で囁く。

「可愛らしいといえば可愛らしいんだけど、フリルとレースが多い服は扱いが大変なのよ。洗濯すると痛むし……それに地が薄い青だから、色移りが怖いわ」

「なるほど……」

店員は次から次へと服を見せていくが、どれも何かしら欠点があったり、いまいちぱつとしないものばかりでなかなかこれという商品が決まらなかった。

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしています」

三人はついに誕生日プレゼントが決まることもなく店を出る。レンは残念そうな表情を浮かべ、リサはため息をつき、ウィルは苦しい表情を浮かべる。

一度昼食を食べようということになり、三人は手近な蕎麦屋に入った。

「はぁ……なかなかいいものが決まらないな……」

ウィルは頬杖をつきながら蕎麦をすする。リサも何ともやるせない表情を浮かべながら蕎麦を飲み込む。レンもいまいちしゃっきりとしないまま箸で蕎麦をつつく。

「アリスって、可愛いけどあんまり飾りっ気が多いのは似合わないからね。言い方はあれだけど……地味って言うか……あ、清楚って言えばいいかしら。ともかくそんな感じのものがいいと思うのよねえ」

元から胸元を強調したり、丈の短いスカートを好まないアリスは普段からゆったりとしたデザインの服を好んで着ていた。そういうこともあってか、派手なデザインの服やアクセサリを彼女が身に付けるということも三人はなかなか想像できなかった。

「そう言われてみると、確かに派手な感じっていうより静かな感じの方が似合うような気がしてくるね」

木陰で読書でも嗜みながら静かに時を過ごすイメージとでもいえばよいのだろうか。三人はそんなアリスに服飾系の品物を贈ることすら間違っているのではないかと思ってしまう。

一同は大きなため息をつきながら蕎麦を食べる。

マップを大きく広げ、蕎麦を噛み砕きながら三人はいい店がないかと探す。

「僕達もプレゼントを贈らないといけないし……今日は大変だね」

「ウィルと被っちゃダメよね……。一人分のプレゼントを選ぶのでさえ大変なのに、私達は三人分のプレゼントを選ばないといけないのよねえ……」

三人はマップを眺めながら、もう一度大きなため息をついた。

昼食を終えた三人は当てもなくぶらぶらと店内を歩き回る。

様々な店がどこまでも並んでいるその様子はもはや、ショッピングモールというより商店街とさえ言えそうである。

「あれ、ユイさん？」

そんなとき、レンは無数の雑踏の中から白衣を見つけ出す。桃色の金髪、そしてくたびれた白衣は先日会った人物に酷似していた。

「れ、レンさんですか？」

その女性は手になにやら見覚えのあるファーストフードのマークが刻印された袋を両手に、雑踏の中を苦しそうに歩いていた。

「こんにちは」

「あ、はい。こんにちは」

二人は律義に頭を下げる。二人は以前に出会った後も何度となく公園で会ってはちよこちよこ話をしたりしていた。

「ユイさんは買い物？」

「お昼ご飯を買いに来たんですよ。私の部署の全員分だから大変ですよ」

そう言つて重そうな袋を掲げる。確かに一人で食べるには多すぎる量だった。

「ねえレン。どちらさま？」

「あ、紹介が忘れていたね。この人はサクラギユイさん。研究所で働いてる人で、たまに公園で散歩しているときに話したりするんだよ」

「えと、その、レンさんとよくお話をさせてもらっています！ あの、その！ よろしくお願ひします！」

「ふーん……“お話”ねえ……」

やや怪訝そうな表情でリサは彼女を見つめる。ユイは慌ててメガネをかけ直しながらレンの方へと向き直る。

「れ、レンさん達は一体どういったご用件で？」

「友達の誕生日プレゼントを探しに来たんだよ」

「誕生日……プレゼントですか？」

「いろんな店に行ってみただけど、なかなかいい店が見つからなくてね……」

しばらくの間彼女は考え込んでいたが、やがて何かを思いついたのかレンに言葉をかける。



「あの、お役に立てるかはわかりませんが、ちょっと付いてきてもらってもいいですか？」

「どこかいい店を知ってるの？」

「アンティークショップって看板出してるんですけど、いわゆる古物商なんですね。いろいろな人が使っていた古い品物を取り扱っているんですけど、まだまだ使えるものばかりでいいお店ですよ」

四人はしばらくの間ショッピングモール内を歩き続ける。しばらく歩くと、やがてそれらしい看板が掲げられた店が見えてくる。

「なんていうか……ポロツちいわね」

「でも！ 便利な品物ばかりなんですよ！」

ウィルは埃の積もった何かが並んだショーウィンドウを食い入るように見つめる。

「何となく惹かれるな……」

見るからに骨董品と思えるような書物や道具が並べられたウィンドウ。そして、あなたの欲しいものがきつと見つかります、と掲げられた看板。

「ちょっと見てきてもいいかな？」

そう言つてウィルは扉に手をかけると、ゆっくりと引いた。途端に埃っぽい、けれども温かな空気が流れ出てくる。そんな店の雰囲気にはしばらく静止していた三人だったが、やがてユイの声ではっきりとす

る。

「じゃあ、私はこれで。レンさん、またお話ししましょうね」

「あ、うん。じゃあまたね」

ユイはやや急ぎ足で駆けていく。転ばないかとはしばらく不安だったが、どうやらそんなことはないようでレンは安心する。

「なんだか怪しげだけど……でもまあ入ってみましょ」

三人は店の中に入っていく。

「これは……」

まず店に入って感じたのは、とてつもなく長い時間だった。

へヴンが完成したのがおよそ30年前。その頃からずっと存在して

いるとすればそのまま30年。だが、レンたちが感じたのは人間にとっての長い時間でなく、本当に人類史の観点からの長い時であった。

言うなれば歴史であろうか。並べられた品々は確かに人の温もりを残しながら、けれどもとつもなく長い年月がしつかりと刻み込まれている。それはレン達にとっては長すぎる時間。人の一生では測りきれない長い歴史。

「いらっしやい」

何の言語で書かれているかわからないような書物を積み上げて作られた通路の先に、体の小さな老人が見え隠れする。三人は書物の山を崩さないようにゆっくりと老人の元へと進む。

「私一人ではなにぶん整理ができないからねえ……。口が裂けても居心地がいいとは言えないけど、ゆっくりしていきなさい」

レン達は天井付近まで物が積み上げられた店内を見上げる。そこには得体の知れない書物や道具だけでなく、ちらほらと身近な物も並んでいた。

「これ……私達の院で使ってる教科書じゃない？」

厚い埃を手で払い除けると、そこには普段見慣れている数学の教科書が発掘される。ページを開くと新品同様で、汚いのは表紙だけであつた。

「ほほ、ここには本当にいろんなものがあるんじゃないよ。服だつて見つかるし、家具だつてたくさんある。宝飾、書物、それから様々な用途の道具……。どれもこれももとは持ち主がいて、不幸にも離別することとなつてしまったモノ達がここには眠っているのじゃ」

老人は一言一言区切つてはつきりと言葉を発する。そこにはただの言葉とは思えぬほどに深い、そして重い思いが込められていた。

「持ち主と離別したモノ達……？」

「今こそ持ち主はいないが、今もずっと新しい持ち主を待っている。私にはそう思えるのじゃよ」

レンは手近な本を手に取り、ページをめくってみる。そこに書かれ

ている言語こそ理解することができなかつたが、手垢の染みついた書物からは、確かに温かさを感じ取ることができる。

「ここにあるモノは……呪われたりしませんか？」

唐突にウィルが尋ねる。老人はやや意外そうな表情を浮かべたが、やがてにつこりと笑いを浮かべて頷く。

「ここにあるモノ達はいずれも持ち主にとても可愛がられたモノじや。そういつたモノには穏やかな魂が宿っておる。そんなモノが誰かを守ることはあつても、誰かを傷付けたりするわけがないじやろ」

その言葉を聞いてウィルは安心したような表情を浮かべる。

「そうですか……。じゃあ、ここでなら安心して探せます」

ほほ、と笑いながら老人は歩み寄る。

「何をお求めかな？」

老人は傍に置いてあつたメガネをかけると、優しげな表情でウィルを見つめる。

「恋人に贈る誕生日プレゼントです。彼女のことを守ってくれる、そんなモノがあれば……」

「ほう、そのお嬢さんは7月生まれかね？」

「あ、はい、そうです」

老人は少しの間待つように促すと、店の奥へと姿を消した。

リサはウィルの背後に回り、耳元でこつそり囁いた。

「アンタ、お化けとか呪いとか信じてるの？」

「アリスが信じているんだよ。アリスはすごく怖がりだから……」

ボクも少しはそういうの信じてるね。モノを乱雑に扱えば、必ず持ち主に何か返ってくると思ってる」

「ふふ、それは大変ね。じゃあ私は流し雑でもしないといけないわ」  
リサは笑いながら何かを払うような仕草をする。

「僕はある程度信じてないけど……でもさ、愛着があるモノって乱雑に扱えないよね。そういうものが壊れたら、僕は一応は感謝の気持ちを示してからゴミに出してるよ」

レンは目を閉じて自分が壊してしまったモノ達を想いながら感慨深げに呟いた。

「リサはモノを壊しまくってるからな。ありがとうより、ごめんなさいを連呼することになりそうだよ。ふふ、ごめんなさい、ごめんなさいって何かの怪談みたいだ」

「うるさいわね！ 私だって大切にしているモノくらいあるんだから！」

リサは口を尖らせて反論する。レンとウィルはそんなリサを見て笑い合う。

「一度見てみたいものだね。リサが大切にしているモノとやらを」

「僕も気になるなあ……。だって週に一度は皿かコップを割るリサだよ？ とてもじゃないけど信じられないよ」

「はは、ボクもレンと同じ意見だね。キャンプの時、鉄の鍋に穴を開けたときは本当に驚いたね」

「あれは……鍋底が薄すぎるのよっ！」

「仲がよろしいことで」

老人が笑いながら戻ってくる。その手には小さな宝石箱があった。何の装飾もない不格好な箱は他の品々同様深い重みを感じさせる。

「これは遙か昔、とある村の祭祀長が身に付けていたといわれているルビーのネックレスじゃ。確か7月の誕生石はルビーじゃったな」

老人はゆっくりと小箱を開ける。その中には足の指ほどの大きさの不格好な赤い石が飾られたネックレスが入っていた。

「といっても、遙か昔の技術で作られたネックレスじゃから、石は原石のまま加工されてはoirん。それを純度の低い銀で飾ったものじゃ」

老人は赤く輝くネックレスを持ち上げる。

「チエーンは後にきちんとしたものに交換されておる。純度100%の銀じゃな」

ルビーの原石は薄暗い光を受けて鈍く輝く。それは室の悪いものではあったが、だからといって見劣りするようなものではなかった。

「こんな粗悪な石をカットイングしたら0.1カラットも残らん。だから、そのままネックレスとして使われておる。じゃが、かといつてそんなに悪い見た目ではないじゃろう」

老人の言う通りそれは形こそ不揃いなものではあったが、きらきらと赤い光を放つその様子はとても美しかった。

「本当は120ドルの品じゃが……おぬしら、孤児院の子供じゃろう?」

「え、まあ、はい、そうです」

老人はそう尋ねると、何か意味のある視線を送ってくる。だが、その意味がなんなのか、三人はわからなかった。

「なら、50ドルにまけてやろう。いつも院には世話になっているんじゃよ」

70ドル以上の値引きに目を開くウイル。半額以上の値引きにさすがの三人も驚いてしまう。

「い、いいんですか!??」

「もちろんじゃとも。実質タダで手に入れたようなものじゃしな」

ウイルは財布からカードを出し、老人に手渡した。どうやらこんな古風な店でもきちんとしたレジスターはあるようだった。

「また来なさい。いろいろといい品もあるからの。ここで宝探しとこのもまた一興じゃろう」

ウイルはカードとネックレスを受け取り、レン達の方へと振り返る。

「もう少し見ていってもいいかな」

「私達も誕生日プレゼント、手に入れないといけないしね」

ウイルは笑顔のまま頷いた。

「わかった。じゃあボクは先に帰らせてもらおうよ。今日は君達、付き合ってくれてありがとう」

そのまま見るからに嬉しそうな足取りで店から出ていくウイル。そんなウイルの様子を見てリサが呟く。

「本当に幸せそうね」

「一週間悩み続けていたからね……」

「うつん、そういうことじゃなくて恋人にプレゼントを贈ること、そのものがとても嬉しそうだった」

リサは目を瞑ってウィルの姿を思い起こす。

「私、あんな風に誰かのために何かをすることが喜びとなる毎日がとても羨しい。それって、やっぱり生きてるって実感できると思うわ。毎日になにかしら意味があつて、毎日に何かしらの楽しみがある。今の私には……そんな風に輝くものはないわ」

「そんなことないんじゃないかな」

レンは下を向いたまま呟く。その言葉にリサは振り向いた。

「だって、僕達がいるじゃないか」

「……え？」

「僕達じゃ不満かなあ。僕は今日、ウィルのためにプレゼント選びに同行して楽しかったもん。ウィルが頼りにしてるって言うってくれなとき、凄く嬉しかった。結局大したことはできなかったけど……でも、最後にありがとうって言うてもらえてとても気分がよかったですよ」

リサは沈んだ表情を浮かべてうつむく。

「結局私は何もできなかったわ。それに、私はウィルとそこまで親しいわけじゃないし……。私はレンみたいに誰とでも仲良く、ってのはやっぱり難しいわよ……」

「じゃあさ、僕だったらどう？」

「レン……だったら？」

リサは疑問の表情を浮かべながらレンに尋ねる。

「リサは僕とも親しくない、なんて言うの？ そうだったら僕、悲しいよ」

レンは近くにあった小さなオルゴールを手に取り、ゼンマイを巻いてみる。

「リサは一番の友達だと思ってるんだよ？ 僕が行くところにはいつもリサがいて、いつもリサが遊んでくれるもん。それはやっぱり嬉しいことだし、とっても毎日が充実してるように感じさせてく

れる」

「私はただ……皆、私を避けるから……私が皆を傷付けてしまうから……私を避けないレンと一緒にいるだけで……」

「僕といて楽しくない？ あ、僕はそんなにいつも話題を持っていくわけじゃないから楽しくないよね……」

「そ、そんなことないわ！ アンタと一緒にいると退屈しなくていいし、アイスだっておごってくれるし……それに……」

レンはほどよくゼンマイを巻くと、ゆっくりと箱の蓋に手をかける。「僕、もつと頑張るよ。リサをもつと楽しませて、毎日を充実したものにさせるよ。そうすれば、リサは何かに憧れる必要なんてなくなるでしょ？」

「レン……」

レンがオルゴールの蓋を開くと、店内に澄んだ音色が満ちていく。

「ありがとう……」

レンは小箱に入っていたカードを取り出す。それはオルゴールが奏でるメロディーの歌詞が書かれたカードだった。

あなたは毎日が楽しいかと、共に過ごす人がいるかと、歌は尋ねる。縦に首を振れるあなたはすでに宝物を見つけている。それを大事にしなさいと、歌は云う。

横に首を振るあなたは少し寂しい。貴重な宝物を見逃しているのだからと、歌は嘆く。

だから宝物を見つけないさい。それは必ずどこかで眠っているだけで、まだ見つけていないだけだと歌は励ます。

レンは歌を歌い終わり、リサの目を見つめた。

「リサも宝物、見つけようよ」

「うん……」

リサは少しだけ頬を染めて頷く。

彼女は思う。すでにリサは宝物を見つけている。ただ、それをまだ

手にとつていないだけだった。なぜなら、その宝物は砂の城のように脆くて、今にも崩れてしまいそうなほど危ういものだった。リサはそれを自らの手で壊してしまうことをとても恐れていた。できることならその宝物を抱きしめてしまいたいと思う。だが、壊れてしまつのを恐れ、手を伸ばすことができないでいた。

（私の宝物……。壊してしまうのが……。怖い）

リサはちらりとレンの表情を伺う。レンは小さな声でその歌を口ずさんでいた。

（でも、放っておいたらいつかは壊れてしまう。私が一歩踏み出さない……。）

だが、リサは首を横に振る。

（今である必要はないわ。だって、まだ私達の生活は終わらない。少なくともあと数カ月は……。今年が終わるまではレンと一緒にいられるんだから……。）

しかし、リサはこのときまだ気付いてなかった。いや、気付いていないのはリサだけではない。レンもウィルもアリスもアランも、未だ誰一人として気付いている者はいなかった。

平和な日常というものは突然終わりを告げてることを……。ちょっとしたこと、砂の城は波にさらわれ崩れてしまつたということ……。

レンとリサが孤児院前の駅のホームから出ると、外は酷い雨に包まれていた。

「うわ……。傘持ってきてないよ」

轟々と音を立てながら雨粒は降り落ちる。天気予報では雨が降るなどということはいっていなかった。当然ながら二人は傘を持っていない。

時刻は18時。あと30分でアリスの誕生パーティが始まってしまふ。のんびりと雨宿りをしている余裕はないようだった。



「でも、早く帰らないと間に合わないわ。走りましょう」

二人は鞆を頭の上に乗せると一気に駆け抜ける。幸い長い距離ではなかったため二人はほとんど濡れることなく孤児院に到着した。

「この雨じゃあ花火はできないね……」

レンは憎らしげに暗い空を見上げる。帰る直前にレン達はおもちゃ屋に寄って花火を購入した。しかし、これではせっかく用意した花火も打ち上げることはできないだろう。

「残念だけど、またの機会にしましょう。きっと明日には晴れるわ」「そうだね。じゃあ、とりあえず中に入ろうか」

レンとリサは孤児院の扉に手をかけ、押し開いた。

「レン！ リサ！ 早く早く！」

院の教師のミシエルが手を振る。どうやら飾りつけに相当てこずっているようである。

「アランが帰ってこないから、今ウィルしかないのよ！ アリスに手伝わせるわけにはいかないし……」

「あ、はい！ 今行きます！」

レンとリサは邪魔にならない場所に鞆を置くと、大きく手を振っているミシエルの元へと走り寄る。

「これを壁に貼ってちょうだい。それからテーブルの位置をこうして……あと椅子はこうね。それが全部終わったら料理を運ぶのを手伝いなさい」

「わかりました」

二人はミシエルの指示に従って仕事をこなしていく。こうなると時間というもののは矢のように過ぎていく。テーブルと椅子の配置が終わった頃、時刻は18時30分となっていた。

「早くしないと時間になっちゃうわよ！ アリスにあと15分遅く来るように言っておいたから、45分までに料理を並べなさい！」レンとリサは飾りつけが終わった部屋へと料理の大皿を運び込んでいく。どれもこれも院生やミシエル達が丹精込めて作った料理である。間違っても床にぶちまけるような失敗は許されない。

「ウィル！ ローストビーフの皿をもう少し横にどけて！」

「リサ、ジュースの用意はできた？」

「はい、あとはクラッカーを皆に配って……」

料理のセットが無事終わり、院生たちはそれぞれクラッカーを手に持つ。そして、玄関へと集合した。

「42分……ギリギリってとこね」

「さ、あとはアリスを祝ってあげようね」

院生たちは黙ったまま長いようで短い時間を過ごす。全員の視線はドアの一点へと向けられていた。

……やがてドアのノブがゆっくりと動き、ポニーテールの少女がやや緊張した面持ちで入ってきた。

「さ、皆！」

「お誕生日おめでとう！！」

一斉に弾けるクラッカー。玄関のあちこちから紙テープが飛び出し、紙吹雪が宙を舞う。

最初は緊張した表情を浮かべていたアリスも、少しずつ笑顔を浮かべるようになる。

「ありがとう、皆さん！」

そして食事が始まる。

立食形式のバイキングである。食べられる分量だけ皿に取り、好きな順番で食べることができる。

レンはバランスよく、リサは肉多め、ウィルは野菜山盛り、そしてアリスはデザートフルコースだった。

四人は集まると、楽しそうに会話をしながら夕食を味わう。

「皆さん、ありがとうございます」

「僕達だって盛大に祝ってもらったんだもん。アリスもしっかり祝わないとね」

ちなみにアランを含めた五人の中で最も誕生日が遅いのがアリスである。

ウィルは笑いながらアリスの頬をつつく。

「アリス、本当におめでとう！」

「ありがとう、ウィル。夏の日差しよりも熱いあなたの言葉は本当に私の心を溶かしてしまいそうだわ」

うつとりとした表情を浮かべるアリス。そんなおアツい様子に思わずレンとリサは顔を背ける。

「ま、多少は許すけどさ……」

「見てるこつちが恥ずかしくなってきたわ……」

二人は一時食事に熱中する。メニューの種類が豊富で何から食べるか迷ってしまいそうだった。

「ねえリサ……。アランはどうしたのかな？」

しばらくは気にしていなかったが、時計の針が進むにつれて、レンはアランのことが心配になってきたのだった。

「アイツには放浪癖があるからね……。またどこかうろついでるんじゃないかしら？」

「アランは仲間のことを大事に思うヤツだよ？ まさかこんな日に限って……」

リサはスパゲッティミートソースを口の端につけたまま答える。

「いいんじゃない？ アランってしょっちゅういなくなるじゃないで、いつの間にか戻ってるって感じ？ とにかく、アイツのことだから心配いらないわよ」

「そうだといいんだけど……」

レンは窓から雨が降りしきる外を眺める。月の見えない空は不気味で、どんよりとした空気を渦巻きながら横たわっていた。時折空の一端がきらめく。どうやら雷まで降っているようだった。

その様子を見て、より不安になるレン。そんなレンの隣にアリスがやってくる。

「アランさん……ですか？」

「うん。やっぱり心配だよ。こんな日のこんな時間まで帰ってこないなんて……」

再び空が輝く。数秒後に空を震わす低い音が聞こえてきた。

「外は雷まで降っていますし……できれば早く戻ってきて欲しいと思っっています」

アリスも窓から空を見上げる。星の見えない暗い空は何か不吉な予感を暗示しているように思えた。

「アリス、ケーキが出てくるよ!」

「あ、はい、今行きますね! ではレンさん、プレゼント楽しみにしていますね」

そう笑顔で言うアリスは輪の方へと飛び込んでいく。レンはしばらくの間空を眺めていたが、やがてレンもケーキに集まる皆の元へと歩いていった。

部屋は照明を落とされ、その巨大な部屋には見合わないような小さい十八の火の明かりだけがお互いの顔を明るく照らす。そして、ポニーテールの少女はそがかがり火を本当に嬉しそうな表情で見つめる。

「はっぴばーすデーとうーゆー」

歌の第一節が始まる。誕生日に定番のバースデーソングだった。

一節一節に祝福を込めた歌。それは彼女が生まれてきたことを本当に嬉しく思い、そして喜ばしく思う歌だ。

アリスの中で今年一年のことが思い起こされる。

ウィルと一緒に行った海、花見、それから二人で過ごしたクリスマス、そして初めて他の人と力を合わせたキャンプ。

どれもこれも楽しいイベントであった……はずである。

……アリスはそこで微妙な違和感を感じる。海、という単語だけは頭に浮かぶも、その情景は浮かんでこない。

(海……? 私は海で何をしていたのでしたっけ……?)

海といえば泳いだり、散歩を楽しんだり、釣りをしたりするのが普通である。けれども、アリスは海へ行って何をしたのか、それどころか海がどんな姿をしていたのかすら思い出すことができなかつ

た。

（花見も……桜の木なんてどこにあったでしょう……？ それにクリスマス……寮は離れていて男女別室だから二人で過ごすことなんてできません。門限を超えようものなら……ううん、でもそんなはずは……）

アリスが思い出そうとすればするほど記憶はぼやけ、にじみ、霞んで消えていく。本当に海に行ったのか、花見に出かけたのか、クリスマスを二人で過ごしたのか、それらが本当に起こった事実だと思いつくことができなかった。

考えれば考えるほどにアリスの胸中で不安が渦巻く。幸せな気持ちに散り逝く桜のように消えていき、後には不安という幹だけが姿を残す。アリスはわずかに残る桜の花を必死に掴もうとするも、それは手の中からこぼれ落ち、そして見えぬ闇へと消えていく。

「はっぴばーすでーいあアリスー はっぴばーすでーとうーゆー」

気付くと歌は終わりを迎えていた。

しかし、アリスは十八の口ウソクを吹き消すことができなかった。いや、正確には自身が祝福されているということを忘れてしまっている、といった方がよいのだろうか。ともかくアリスは呼吸をすることも忘れて不安に囚われる。波紋のように広がりゆくその感覚は、今や彼女を捕えて離さなかった。

「アリス……？」

ウィルがアリスにそつと声をかける。しかし、アリスはぼーっとしたまま焦点の合わない瞳で何かを見つめていた。

「アリス？」

そつとアリスの肩に触れるウィル。その瞬間、アリスは驚いたような表情を浮かべ、ウィルの目を見つめる。

「歌……終わったよ？」

しばらくの間、呆けた表情を浮かべていたアリスだったが、すぐに普段の表情に戻って謝る。

「あ……えつと……ごめんなさい。少し考え事をしていて……」  
アリスはふーっと息を吹きかけ、巨大なケーキに立てられた口ウソクを吹き消した。ぱらぱらと部屋の中から響く拍手の音。それに歓声を合わせる者は一人もいない。  
アリスは申し訳のないような表情を浮かべながらゆっくりと椅子に座った。

やがてミシエルが部屋の明かりを付ける。すると、心配そうな表情を浮かべた院生達の表情が映し出された。

「アリス、体調悪いのかしら？」

ミシエルが一番にアリスへ尋ねた。アリスは首を横に振って答える。

「いえ……ちよつと考え事をしていて……」

「そう……ちゃんと歌が終わったらすぐに吹き消さないと、皆不安になるでしょう？ こうやって祝ってもらっているのだから、変に何かを考えたりせず、喜びで心をいっぱいにしないとね？」

ミシエルはアリスを慰めるように優しく言う。だが、憂鬱な表情を浮かべるアリスは小さく頷くだけだった。

「早めに寮に戻って休む？」

「いえ……大丈夫です！ こんな暗い顔してたら申し訳ないですね！」

自分で頬を何度かぴしゃりと叩き、やがてしゃっきりしたような表情を浮かべるアリス。それを見て何人かの院生が安堵する。

「無理しなくていいのよ？」

「大丈夫です。もう自分の中で解決しましたから」

そう言うと、近くに置いてあったナイフを取り上げて、ケーキをさつそくカットし始める。

「早くしないと大きいのが、私が食べちゃいますよ？」

「アリスさんずるーい！」

「僕が一番大きいの！」

「ダメえー！ 私が一番大きいのを食べるんだからあー！」

あっという間に小さな院生達に囲まれるアリス。それを見て、よう

やくアリスは笑顔を浮かべる。

「はい、一列に並んで！」

アリスはそう言うと、子供達を並ばせてケーキを配り始めた。しかし、アリスのことをよく知るウィルやレン、リサにはその表情が無理やり仮面のように張り付けたものにはしか見えなかった。

巨大なケーキもあらかた片付き、プレゼント贈呈も済ませた院生やアリス達は、それぞれ方々に散って仲のいい友達とゆっくりのんびり話をしていた。レン達もアリスを中心に集まり、のんびりと残ったケーキを食べながら談話を弾ませていた。

しかし、未だアランの姿は院内のどこにもなかった。

「アラン、どうしちゃったんだろう……」

「いつの間にかいなくなつて、いつの間にか現れるヤツだったけど……こんな日に約束をすつぽかすヤツじゃないな」

すでに時刻は8時を回っている。門限は10時までなのでありえないということはないものの、不思議であることには変わりがない。

「ところでアリス、プレゼントの包装は開け終わったかい？」

「いえ……数が尋常じゃないので……」

単純にプレゼントを用意できるほどの財力がある者が12歳以上の者に限られたとしても、30人近い院生がいる。もちろん、12歳未満の院生も折り紙で何かを作ったり、クッキーを焼いたりと実に様々なことができる。結果としてプレゼントの箱が山積みとなり、もはやどうしようもないという状態になっていたのだった。

それでも几帳面なアリスはそれらを放つたりはしない。一つ一つ包装を丁寧に開き、中のプレゼントを見て、感謝の気持ちを表してから次の包装を開く。現時点で20個以上は開けているが、その大半が菓子や折り紙、絵、手紙などだった。

「これは……」

アリスは小さな包みを手にとる。やや乱暴ではあったが、きっちり

と美しい包装紙で包まれたそれは、細長いペンケースほどの大きさであった。

「あ、それ私のだ！」

リサが小さな細長い箱を指差して言う。アリスはゆっくりと包み紙を解いていく。

「綺麗……」

それは茶と金色に輝く琥珀に飾られた小さな髪飾りだった。

アリスはそれを光にかざしてみる。それは電灯の光を受けて、辺りにまばゆい光を放っていた。

「ありがとうございます、リサさん」

「えへへ、どういたしまして」

彼女はさっそく髪飾りで髪をまとめる。今まで髪を留めていたゴムを腕に留め、同じように髪を留める。流れるような栗色の髪によく似合っていた。

「綺麗だよ、アリス。似合ってる」

「ウィル……ありがとうございます」

アリスは頬を赤く染めてうつむいた。ウィルはそんな彼女を笑いながら見つめる。

「それ、あのお店で買ったんだよ」

「あの店って……ボクがアリスのプレゼントを買ったアンティークショップ？」

ウィルが尋ねるとリサはこくこくと頷く。レンも同じようにリサと一緒に買ったのだと言う。

「レン、君はまさか……」

「あはは、大丈夫だよ。ウィルが買ったモノに被るようなモノは買ってないし、それどころかウィルのプレゼントがより輝くと思うよ」

「もしかして……これですか？」

アリスはやや大きい箱を取り上げる。10センチ四方ほどの大きさのその箱は、ちょっととした重量感を感じさせる。

一枚ずつ紙を取り払っていくうちに、徐々にその姿が現れる。それ



は古めかしい作りではあるが、丈夫さと温かさを感じさせてくれる木製の宝石箱だった。

「これは……」

「開けてみて」

レンの言葉を聞いてアリスは箱の蓋に手をかける。蓋が開くと同時に流れ出すメロディー。

「……心の宝箱？」

「大正解！」

びしつと親指を立ててレンが笑う。それは比較的有名な童謡である心の宝箱という曲だった。

「……懐かしいです」

「小さい頃によく聞いたよね」

懐かしい調べが徐々に部屋の中を満たしていく。それはとても心地がよく、穏やかな気分にならせてくれる音色だった。

あなたは毎日が楽しいですか

どんな人と触れ合っていますか

一緒にいて楽しい人がいますか

首を縦に振れるあなたはとっても立派

幸せな毎日を送れるでしょう

首を横に振るあなたはちょっと寂しい

だって、貴重な宝物を逃しているのだから

見つけましょう、あなたの宝物

きつとどこかに眠っているわ

あなたの傍に眠っているわ

さあさあ見つけてちょうだい

私もあなたの宝物を見たいのだから

アリスの口から自然に歌の歌詞が流れ出る。

宝物、それはまさに今のような時間だと、アリスは思った。

アリスだけではない。レンやリサ、ウィルもアリスと同じ気持ちだった。仲間とゆっくり過ごせる時間ほど尊いものはない。

アリスはゆっくりと箱を閉じる。

「レンさん……ありがとうございます。とても心が温まりました」

「あはは、そんなに凄いものじゃないよ」

レンも照れるような表情を浮かべて答える。

「じゃあ……最後に……」

今か今かと待ちわびていたウィルの表情に緊張が走る。最後に残った包み……すなわちそれはウィルがアリスへプレゼントした包みだった。

アリスは仲間達からの祝福という幸せを噛みしめながら、一枚一枚包装紙を剥がしていく。

やがて、古ぼけたような箱が現れる。見た目は実に貧相ではあるが、それとは対象的に重く、そしてこすれるような金属音が聞こえてくる。

レン達が見守る中、アリスはゆっくりと箱を開いていく。そして、その美しい贈り物に思わず息を飲む。

「これは……」

アリスの手の中で見事なルビーのネックレスが輝く。その美しさに、アリスの表情がみるみる恍惚としたものへと変化していく。

「ウィルからの……プレゼント……」

ルビーに込められた言葉は『情熱・愛情』である。二人の仲をさらに深い絆で結ぶであろうその宝石は、アリスへのプレゼントとしてこれ以上に相応しいものがあるだろうか。

「気に入ってくれたかい？」

「はい……。こんな……こんな素敵なプレゼントを頂いて……私は本当に幸せ……で……ひつく……ぐすつ」

アリスの目から一筋の水滴がこぼれ落ちる。それは徐々に溢れていき、やがて止まることを知らない洪水となる。その様子を見てウィルは驚いたような表情を浮かべる。

「ウィル……アリス泣かしたあー」

レンとリサがニヤニヤしながらウィルを見つめる。

「な、なんで泣いてるんだい!？」

アリスは涙を流しながらにつこりと笑いを浮かべる。

「だって……嬉しくて……凄く嬉しくて……」

そして、アリスはそのままウィルを抱きしめる。そして、そっと顔を上げて小さな声で呟いた。

「私……本当に幸せです」

「アリス……」

温かな抱擁。思わず見ている者すらも気恥ずかしくなってしまう。

レンとリサはこっそり背中を向けてぼりぼりと頬を搔く。

だが、そんな幸せな時間も唐突に終わってしまうものである。

「アランさん戻ったよー!」

その声を聞いて、思わず二人は抱擁を解く。そしてやや恥ずかしそうに頬や頭を搔いた。

レン達は苦笑いを浮かべながら玄関の方へと駆け寄る。

「アラン!」

「悪いな、遅くなっちゃって……」

アランは上から下までぐっしょりと濡れ、服の端からぽたぽたと滴をこぼしていた。ミシエルは急いでタオルを用意する。アランはそのタオルを受け取ると、小さな声で礼を言っ頭を拭いた。

「こんな遅くまでどうしてたの?」

「ちよつとプレゼントの用意に手間取っつてな」

アランは懐から小箱を取り出し、アリスに放り投げた。

「誕生日おめでとう」

「あ、ありがとうございます……」

がしがしとタオルで頭を拭いたアランはそのまま院の奥へと進んでいく。

「ミシエル先生、風呂借りますね」

「え、ええ……」

通常風呂は寮の地下にある大浴場を使用するのが原則となっているが、事情によっては孤児院の中にある風呂を使用することも許される。服も予備のものをいくつか院に預けてあるので、万が一のときでも入浴することは可能となっているのだった。

アランが風呂へと向かうとやや騒然としていた玄関は徐々に閑散としていく。

レン達も一時元の部屋に戻った。そして、アランが帰ってきたことに安心しつつも、こんな遅くまで何をしていたのだろうかということに気がなってくる。

「アラン……こんな時間までどうしてたんだろう……」

「誕生日プレゼント選びに時間がかかったんじゃないかしら？」

「アランは準備がいいから……前日までには揃えるんじゃないかな

……」

レンがよく知るアランならばそんなへまはしない。こういうことは要領よくこなすアランである。アランの性格を考えれば、何か事情があると考えるのが至極もつともであった。

「ところでアランは何を君にプレゼントしたんだい？」

ウィルはふとアリスに尋ねる。ウィルとしてはアランが遅くなった理由よりも、そちらの方が気になるようだった。

「じゃあ開けますね」

アリスは丁寧に包装を剥がしていく。その小さな箱にどんなプレゼントが入っているのか四人は興味津々だった。

「これは……ディスクですよね？」

円盤状の物体……何らかのデータが記録されているであろうメモリだった。どんなデータが詰め込まれているかはコンピュータに入れてみなければわからない。

アリスは何も書かれていないディスクを電灯にかざしてみたり、しげしげと見つめてみたりするが、どこにもラベルのようなものはなく、何が中に入っているのかはまったくわからなかった。

「彼が作ったゲームかなにかかい？」

「どつだろつ……。アランはそういうの、あんまり得意じゃないから違うと思っけどな……」

メモリーである以上、コンピュータで開いてみなければその正体はわからない。

しばらくの間、無記名のディスクと格闘していた四人だったが、やがて諦めてディスクを小箱へ戻す。

「僕の部屋にノートパソコンがあるけど……それを談話室で使う？」  
談話室とは男女が両方とも入ることができる寮内唯一の部屋だった。もつとも、談話室にはコンピュータがないので持ち込まなければならぬ。

「僕、一旦取りに帰るよ。皆はアランが戻ってきたら談話室に集合ね」

「私も行く！」

リサが手を挙げて身を乗り出してきた。レンはやれやれというような表情を浮かべる。

「リサ、君は男子寮に……」

「大丈夫よ。中は繋がっているんだし、見回りがあるわけでもないもの。バレやしないわ」

レンはしばらく考え込んでいたが、やがて頷く。

「わかったよ。じゃあそういうことで僕はリサと一緒にパソコンを取りに戻ってるね」

「わかりました。それでは気を付けてくださいね。相変わらず雨が酷いようです……」

レンとリサは院で傘を借り、駅へと向かう。雨は更に激しさを増し、相変わらず雷の音も響いていた。

「急ぎましょ。冠水でもしたら困るわ」

二人はリニアに飛び乗ると、ようやく一息ついて座席に座る。休日とはいえ、時間が遅いのと雨の酷さゆえか乗客はほとんどいなかった。

「ふう……本当に酷い天気だね」

レンはぐっしょりと濡れた傘をたたみ、座席に体重を預ける。列車は音もなく動き始めた。

雨は相変わらず窓を叩き続ける。傘から垂れ落ちる水滴は小さな水たまりを車内の床に作り出した。

「ほんと嫌ね。私、雨って大嫌いよ」

リサは雨の滴をまき散らしながら不快そうに文句を言う。

レンは肩をすくめて苦笑いを浮かべた。

「これがアンタの部屋なのね」

「ま、散らかってるけど上がってよ」

リサは物珍しそうにレンの部屋を見回す。彼女にとって男子の部屋というものは珍しいのだろう。

部屋の中にはほとんど私物はなかったが、それでもリサは少ない私物をさっそく漁り始める。

「思ったよりも綺麗ね」

「物も少ないからね」

リサは筆記用具や本などを摘まみ上げてははその辺に放り投げる。彼女にとってそれほど珍しい物は見つからなかったようだ。

「あんまり散らかさないでね」

レンは机の引き出しを引っ張り、中にあるノートパソコンを取り出した。

リサはレンの元へと歩いていくと、ひょっこりと首を出して覗きこむ。

「この写真は……？」

リサの目に止まったのは一枚の写真が収められた木のフォトスタンドだった。彼女はそれを手に取ると、しげしげと見つめる。

「懐かしいよね。去年のキャンプのときの写真だよ」

リサは両手でフォトスタンドを抱え上げると、それをじっくりと見つめる。

それはレンにとって数少ない宝物とも言えるものである。一年前に仲間達と……レン、リサ、アラン、ウィル、そしてアリスの五人と撮った一枚の写真。騒ぎ、はしゃぎ、時々喧嘩して、また仲直りして……そんな例年通りのキャンプを過ごした証だった。リサの表情は無表情だったが、レンはその表情の裏で懐かしんでいるに違いないと想像する。

今でもレンが見る度に懐かしさが込み上げてくる写真だ。リサだって感慨深いに違いないだろう。

……だが、彼女の答えはレンの思いもよらないものだった。

「知らない」

「……え？」

はじめは無表情だったリサの顔へ徐々に困惑や疑問が浮かんでくる。リサはゆっくりとフォトスタンドを机の上に戻すと、音を震わせながら背を向ける。

「リサ……？」

レンの頭の中はクエスチョンマークに満たされる。彼にはリサの言葉の意味を理解することができなかった。

彼女は背を向けたまま、小さな声でレンに言った。

「レン……私、去年のキャンプには参加してないよ？」

「……嘘でしょ？」

「覚えてない？ 私は風邪をひいて熱を出してしまったの。それでキャンプには行けなかったんだよ？」

「だって……この写真にはリサが……！」

レンはフォトスタンドを乱暴に掴むと、その写真を穴が空くほど見つめる。

「だって、ここにリサがいるじゃない！」

レンが指差す先には一人の少女がにっこりと笑って写っていた。……が、撮る直前にカメラを動かしてしまったのか、ぼんやりとぼけ

て薄れてしまっている。

「それ……私じゃない。私はそんなネックレス持っていないもの……」  
レンはもう一度写真の少女を見つめる。確かに彼女の胸元には赤い大きな宝石がはまったネックレスが輝いていた。

「赤い……宝石の……ネックレス……？」

彼の頭の中で今日見た風景の一部が蘇る。

ウィルが今日、アリスにプレゼントしたものはなんだっただろうか。

「赤い……宝石のネックレス……」

彼はそう自答する。

「そんな……なんで……？」

レンはぼそりと呟いた。そして、その写真立とノートパソコンを持って自室から飛び出した。

「レン！？」

リサは慌てて部屋の施錠もせずにレンの後を追った。

彼の姿はエレベーターの前にはなかった。おそらく階段を駆け降りたのだろう。リサは急いで彼の後を追う。

「レン、待って！」

やつのことでリサはレンの後へと追いつく。そして、その肩をつかんで無理矢理引きとめる。

「レン！ 待ちなさい！」

リサの大きな声が階段室にこだまする。その音でようやく正気に戻ったのか、レンは真っ青な表情で振り向き、リサのことを見つめた。

「リサ……僕、なんだか悪い予感がするんだ」

「そんなの私だって同じよ！ 気持ち悪いっいたらありやしないわ！」

「アランだ。アランに尋ねよう！」

リサは頷くと、レンと一緒に階段を駆け降りる。一気に地下一階まで降りると、まっすぐに談話室へと向かう。

「遅かったね」

ウィルが手を挙げて二人を迎える。談話室にはウィルとアリス、そしてアランの他には誰もいなかった。



レンはしばらくの間息を整えていたが、写真を突き出して三人を見つめる。

ウィルとアリスは不思議そうな表情を浮かべたが、アランだけはレンが言わんとしていることを理解できたのか、目を瞑って頷いた。

「レンも……気付いたのか」

「アラン！ 君は一体何を知っているの！」

アランは黙ってレンからノートパソコンを受け取ると、アリスに預けていたデータディスクを挿入し、中のデータをロードする。

やがて、モニターには次々と文字や数字、グラフなどが映し出され、画面を満たしていく。

「これは……僕？」

アランの真後ろに張り付いて食い入るようにモニターを見つめていたレンが呟いた。

彼の視線の先には……レンと同じ顔をした老人の写真と、その人物に関するデータが事細かに記載されていた。

「なんでこんなに老けてるのよ！ というか、このデータはなんなのよ！」

アランは大きく息を吐くと、ゆっくりと深呼吸してから話し始める。

「これは……俺達のオリジナルとなった人間のデータだ。いいか、落ち着いてよく聞けよ？ 俺達院の子供は全員！ どこの誰とも知らない誰かをベースにコピーされた人間なんだよ！」

四人はぼかんとした表情をしながらアランを見つめていた。アランはやや早口で吐き出すように話し続ける。

「クローン。人間のコピー。禁じられた、人の手による人を“生産”する技術を用いて創られた人造人間。それが俺達だ」

レンは彼の言葉に茫然とする。彼の言葉が正しいとすると……レンという人間は確立した存在ではなく、誰かの射影に過ぎないということである。

アランは次々とデータを開いていく。そこには見知った人物によく似た別人の顔が何十枚も映し出されていた。

「ちょっと……冗談でしょ？ あはは……これが私のオリジナル？ 馬鹿言わないで。私は私よ。私はリサイア！ リサなのよ！」

「アラン！ これは冗談にしてはつまらないぞ！ もっと面白いことを言いたまえ！」

「私だつてアリシアです！ いきなりよく似た誰かを見せられたつて、はいそうですか？ 納得できるわけないじゃないですか！ この根拠はどうなんですか！ 何か根拠になるものはないんですか！？」

そのとき、レンの脳裏に一つの言葉が甦ってきた。  
『私達の研究には禁じられていることが三つあります。それはお金を創ること、不幸を創ること、それから人を創ることです。けれども……最近はどうも雲行きが怪しいんです。噂にすぎないのですが……この禁忌の一つが冒されているとか……まあ噂にすぎませんけどね』

ほんの数日前、レンがユイに会ったときの会話である。お金持ちになるならドル札を作ればいいじゃないか、という話しになったときに彼女がまじめな表情で言った言葉だった。

「僕……ユイさんに聞いたことがある。最近、お金を創ったり、または不幸を創ったり、もしくは人を創ったりされてるっていう噂があるって……。そのときは信じられなかったけど……これは僕達のことを言ってたんじゃないのかな？」

「そんなのは噂に過ぎない！ 第一、ボク達みたいな人間を作ったって、どんな利益があるっていうんだ！ ただの無駄な浪費じゃないか！ こんな戦争の真つ只中、こんな無駄なことをする企業がどこにある！」

ウィルは大きな声で吠え猛る。だが、小さな声でアランが呟いた。

「……あるんだな。利益が……」

「なんだい！ 言ってみろよ！」

「部品交換技術……移植手術って知ってるか？ 人の細胞、組織、臓器などの体の壊れた一部を他人の正常な部分と交換し、治す技術。これは本来、免疫とか遺伝だとかで色々他人だと面倒な手術なんだ

が……実はある方法を用いれば、少ないリスクで手術をすることができる。しかも成功率は他の方法に比べればとてつもなく高い。この方法、なんだかわかるか？」  
背中を駆け上がる悪寒。四人は顔を青ざめて、まさか、そんなと否定する言葉を口に出す。

だが、そんなわずかな抵抗すらも、アランの言葉によって圧殺される。

「同じ遺伝配列を持つ人間……クローンから体の部品をもらえばいいんだ。原料はその人の体の一部。それで新しく部品を作れば他の人間がドナーとなって体の一部を提供する必要がない。しかも免疫的な問題、遺伝的な問題共にクリアできてしまうんだ」

「う、嘘だろ……？　だ、第一、ボク達は18歳だ。こつやつて、一人前の人間に成長するまでにどれだけの時間がかかると思ってるんだ？　18年も待つていたら、先に本人の方が死んでしまう可能性だつてあるじゃないか！」

「……時々、人と会話が噛み合わないことがなかったか？　たとえば、俺は昔リサに投げ飛ばされたはずなんだが、リサ、覚えてるか？」

「な、投げ飛ばしたつて何よ！？　馬ッ鹿じゃないの！？　私の細腕のどこにそんな力があるつていうのよ！？」

「こついうことだ。俺の記憶には、確かに3年前、リサに公園から海に投げ飛ばされて死にかけたつて記憶がある。だが、リサの方はそんな記憶はないと言い張る。こんなことがお前らの身の回りになかったか？」

しばらくの間一人黙っていたアリスだったが、突然はっとしたような表情を浮かべて呟いた。

「そついえば……私、ウィルと少し喧嘩したことがあります。この前のキャンプのときのことなんですけど、私は今年水着を新調したんです。でも、ウィルは去年と同じものを着てると言い張つて……」

「そ、それがなんだって言うんだ！　そういう記憶違いくらい、誰だってあるだろう！」

ウィルの問いにアランは首を横に振る。そして、ゆっくりと口を開いた。

「俺らの生年月日は去年の数日前、つまり一年とちよつと前だ。つまり、俺達の本当の年齢はほぼ満一歳。生まれてから一年しか経過していない赤ん坊と同じだ。生きてた日数はな」

「はあ！？　君は頭湧いてるんじゃないか！？　一歳の赤ん坊がボクら？　どうしてこんなに体が大きく、言葉を喋り、物事を考えるんだ！」

「元々ある程度成長した細胞……もつとも、依頼人にとっては子供時代の細胞だろうが……それをベースに人間を創ると、体細胞はその時の年齢の時の細胞と同じ物になる。もつとも、俺達ほどまで成長するには時間はかかるだろうが……そこでオキシデリボ製薬の一番だ。成長促進剤つう薬で俺達はさらに数倍の速度で成長する。もし、6歳の時の細胞を使っているとしたら、十二倍の成長速度で成長させれば一年間で18歳になる。3歳なら十五倍だ。記憶の方は研究所の奴らが時々調整しているみたいだ。なんせ20日に1歳くらいの計算になるはずだからな。そんな風に何度も何度も記憶を改竄していればおかしくもなるさ。だから、人によつて一つの事実に対する記憶が異なるわけだ」

今まで静かに聞いていたレンがふと口を開く。それはとても細かい声だったが、なんとか言葉となつて紡ぎ出される。

「なんで……なんでアランはこんなこと知ってるの……？」

アランは両腕を組んで大きなため息をついた。しばらくの間、そうしてうつむいたまま黙っていたが、やがて心を決めたのか、静かに語り始めた。

「最初はちよつとした好奇心……それとアリスへのプレゼントのもりだったんだ。研究所の方なら俺らが拾われた場所がわかると思つてな。そうすれば親にだって会えるかもしれないし、同じ人種の

人の中で暮らすことができる。来年から戦争で荒れた世界に放り出されるなら、せめて異民族の中ではなく、同じ仲間の中で生活するほうが安心できると思ったんだ」

「つまり……アランさんは私の故郷を探しに行ってくれたんですね」アリスの問いかけにアランは頷く。その表情は苦渋に満ちていて、こんなにも恐ろしい真実を知ってしまったことに対する後悔の念がありありと浮かんでいた。

「故郷を知ることができた。親もわかった。だが、こんなのもつてアリかよ……。いつそのこと、知らなければどれだけ幸せな気持ちで最期を迎えることができたろうかとすら思った」

「それがわかつているなら、どうしてボク達に知らせたんだい？」  
ウィルがアランの胸倉を掴んで迫る。それは脅しや見かけ倒しではない。彼の表情には強い怒りと憎しみがしつかりと刻み込まれていた。

「そんな知らない方がよかつたと思ったことを、どうしてボク達に知らせたんだ！ 自分一人がそんな恐怖の中に置き去りにされるのが不公平だと思ったのかい！？ 君って奴はなんて自己中心的な奴なんだ」

右手が振り上げられる。それはまっすぐにアランを殴り飛ばすかと思われたが、その拳にレンが飛びついた。

「やめてよッ！」

レンは大きな声で叫ぶ。ウィルの腕にがっしりと腕を絡めながら、大きな涙の粒をぼろぼろとこぼしながら、彼はもう一度言った。

「やめてよ……。そんな風に争わないでよ……」

「そうですね、ウィル。こんな意味のないことで争っても仕方ありません。それよりもこの事実を知ることができたのを幸運に思いましょう」

「そうよ！ そうとわかれば殺される前に逃げればいいのよ！」  
ウィルは一度腕を下すと、淡泊な表情でリサに尋ねた。

「リサ、君はどうやって逃げるつもりだい？ 数日に一度しか来な

い物資運搬船に乗るためには多額のお金が必要だ。これはおそらく、俺達がこの島を出られないようにするためだろう。となると、奴らはボク達を逃がす気がないというわけだ。つまり、この島から逃げ出す方法は限りなく少ないということの意味する。仮に船にうまく隠れて乗ることができたとしても、数日かかる航路だったはずだ。その間五人もの人間が見つからずに大陸まで出ることができると思っかい？ それに、こっちの島でボク達がいないとわかれば大騒ぎになるはずだ。一番怪しい船はまっすぐこの島へと戻ってくるだろう」

「じゃあ、私達が船を見つけてそれに乗れば……」  
だが、それをアランが遮るように言った。

「この島から半径数百キロには島がないと聞く。そんな距離、何の技能も持たないただの子供の俺達が遭難もせず航行することができると思っのか？」

「じゃあどうしろっていうのよ！ この島にはヘリコプターとか、飛行機みたいなものは一切ないのよ！？ 海路以外の方法でどうやって島の外に出るのよ！」

「だから知らなければいいと言っただよ……。俺達は生きてこの島を出ることはできない。それどころか、もう数年、いや数力月や数日、もしかすると今夜にも殺されるかもしれないんだ……」

アランの言葉に全員は絶句する。

免れることが出来ない悲惨な未来。限られたわずかな余命。いつ死ぬかわからない恐怖。

それらはぐるぐると渦を巻きながら、五人の心を闇の中へと引きずり込む。

部品としての命。それ以外に五人の未来は……ない。

『諦めるのかい？』

“僕”が僕に尋ねてくる。気付くと、僕はいつの間にかいつかの白い部屋の椅子に座っていた。

あの時は明るく見えた白い壁も、今日はなんだか薄汚れているように見える。これはおそらく僕の心をそのまま映し出した部屋なのだろう。

僕は立ち上がることもせず、静かな声で“僕”に尋ねる。

「何か方法があるの？ 海はダメ、空もダメ。まさか穴でも掘って行けって言うんじゃないだろうね？」

“僕”はククク、とおかしそうに笑うと、指を数度横に振った。

『チツチツチ、さすがの僕でもそんなことは言わないさ。ある意味一番現実を見ているのが僕なんだからね』

「じゃあ、現実を見てる僕に尋ねるよ。僕らが実行可能な方法で、安全に島の外に出る方法はあるの？」

“僕”は複雑な表情を浮かべながら窓のそばを歩く。何かを喋ろうとするが、まるで喋ってしまうのが惜しいかのように数度口をつぐむ。僕はそんな“僕”のじれったい様子に声を荒げた。

「なんにも意見を出せないなら黙っててよ。僕だって諦めたくないんだ。今もこうして必死に考えているというのに……君はそんな風によくわからないことばかり言ってはぐらかす。現実を見ているなら、きちんと口に出して無理だと言ってくれないかな。そうすれば、少しは諦める気にもなるからさ」

“僕”は惜しむように笑う。そんな様子に僕の神経はさらに苛立つ。

「口で言っただけわからないなら、力でわからせようか？」

僕は熱り立って勢いよく立ち上がる。椅子が吹き飛び、がたがたと部屋が揺れ始めた。

『ごめんごめん、怒らないですよ。君がそんな風に怒るとこの部屋だってムチャクチャになってしまっただ。整理する僕のことも考えてよ』

僕は一步一步足を踏みしめながら“僕”の方へと歩み寄る。謝っているにもかかわらず、彼は依然として茶目つ気を顔に浮かべたままへらへらと笑っていた。

……窓ガラスが砕け散る。“僕”の元へと粉々になった窓ガラスが

降り注ぐが、僕はもうそんなことは気にしない。いつの間にか手の中にあつた短剣を構え、彼の方へと振りかざす。

「これが最後の忠告。不愉快だ。笑うな」

だが、彼は最後まで嘲笑を顔に張り付けたまま動じることはなかった。

僕は駆けた。まっすぐに短剣を突き出し、その胸に深々と突き立てようと思ひ切り振りかぶる。

『まあ待て兄弟。僕と君の仲じゃあないかア？』

途端に“僕”の周りを見えない力が覆う。僕はその力に気圧されて、ぺたんと尻餅をついた。

『教えてやってもいいんだがア、ただ教えるだけではつまらないだらウ？ デッド・オア・アライブのボーダー、クリフのギリギリのトコまで押し出されて、そこでリバーサルを叩き込むっていうのがドラマってヤツだらウ？ もう少し人生楽しく生きようぜエ、レウオン？』

僕には“僕”が一体何を言っているのかわからなかった。

人が生きるか死ぬか、崖っぷちの状態で逆転の一手？ そんなのはドラマと小説の中だけだ。少なくとも、普通に生きていくのにそんなことは必要ない。もつとも確実にして、確然、確固たる方法で確定させることが最上である。だが、目の前の“僕”はまるで劇でも楽しむかのように狂喜している。僕と“僕”は一心同体で、その運命の先に待ち構えるものはまったく同じだというのに。

『人生、必ずどこかでバクチってヤツが必要だア。言ってる意味がわかるかア？ そのミニマム脳みそで考えてみるオ！ テメエの頭ん中には本当にもう、脱出手段が思いつかないのかア？ そこまで僕は腐っちゃいないはずだぜエ？』

だが、彼の言い分も理解できないことはなかった。

僕に代わることが出来ない“僕”はさぞかし退屈だらう。たまには香辛料も欲しくなる。彼にとって絶好の機会なのだ。そんなとき、手を出して問題を易しくしてしまつては面白みも欠けてしまふ。



要は物事に対する受け方だ。一つの事実に対する認識が人によって異なるように、一つの事実が人に与える影響は人によって異なる。僕と“僕”が違うのは当たり前だ。

彼のように前衛的にして斬新、そして多少の遊びを交えた考え方で思考する。そうすれば、自ずと答えは見えてくる。

「……わかった。わかったよ」

僕は短剣を放り投げた。それはどこへともなく消えていく。あれだけ震えていた部屋は静かなたたずまいを取り戻し、吹き飛んだはずの椅子は戻り、窓ガラスは元のようにはまっていた。

「ありがとう、“僕”。君のおかげでわかったよ」

「……それでいいんだよ。そんな風に君が怯えると、“僕”の心まで脅かされるんだ。こう見えてもガラスのハートの持ち主でね。もらい泣きをしやすいんだよ」

「ははっ、さっきのを見たら嘘にしか思えないけどね」

さっきまであんなにまで狂うように笑っていた“僕”はいつの間にか静かな姿に戻っていた。顔に嘲笑の仮面はなく、それどころか清々しいまでの表情だった。

『どうせ“僕”は薬が生み出した第二人格に過ぎない。ちよつと不思議な力を持つてはいるけど、君であることは確かなんだ。だからそんなに疑わなくてもいいね』

「ごめんごめん。さっきまでの僕は恐ろしい事実を心で震わせ、悲哀の情に支配されていた。だけど、もう迷わない。ちよつとおかしな“僕”のおかげで僕は僕を取り戻すことができた。ありがとう」  
僕は目の前に立つ“僕”へと手を差し出す。“僕”は何の抵抗もなく僕の手を握ってくれた。

『“僕”も君も未来は一緒。でも、“僕”は気まぐれだから、必ず君を助けるとは限らないよ？』

「少しでも助けられれば十分。君だって死にたくないんでしょ？」  
“僕”は無邪気な笑顔を浮かべた。そして、ぽりぽりと恥ずかしそうに頭を掻く。

『バレてたか』

まるで小さな悪戯でも見つかったときのように僕は笑った。僕も“僕”につられるように笑う。

「決められた未来なんてものはない。君がどんなに恐ろしい未来を視たとしても、僕はそれに真つ向から立ち向かい、粉碎する。だから安心して僕という劇を見ていてよ。君がちよろつと視た『部品としての僕』だなんて台本は舞台上で引きちぎってあげるからさ」

“僕”はしばらくの間僕の言葉を聞いていたが、うんうんと頷き、信頼をたたえた笑顔で僕のことを見つめる。

『それを聞いて安心したよ。“僕”は安心してポップコーンを片手に観劇できるといっわけだ』

「す、少しは手伝ってほしいかな……」

『キーポイントのヒントは与えたでしょ？ 大体は流れに身を任せれば問題ないよ。注意すべき点は“僕”がヒントを与えた一カ所。それから、心を強く持つこと。この二つを頭に入れておくといいよ』

「わかったよ」

僕は諦めと、けれども少しの希望を交えた表情で笑う。

「Fortune knocks at least once at every man's gate. もちろん僕にもね」  
『I wish you good luck. 頑張つてね』

僕の姿は徐々に光に包まれていく。

もう、僕は決めた。皆と一緒にこの島を脱出する、と。

残念なことに確率は100%ではないが、けれども唯一とも言える方法である。

だが、僕はためらわない。限られた可能性を手に突き進むだけだ。ミシエル先生も言っていたではないか。夢に向かつてまっすぐ邁進しなさい、と。夢とはちよつと違うな、とは思ったが気にしないことにする。

僕は消えゆく意識をその流れに任せ、ゆっくりと意識を閉ざしていった。

「ねえ、アラン……」

ふと、レンは小さな声で友の名を呼ぶ。相変わらず落ち込んでいるアランは答えることもせず、ただ耳だけを傾ける。

「僕に考えがあるんだ」

耳元でそつと囁く。皆の前で言うのははばかられたが、彼になら言ってもいい気がした。

「……お前……まさか……アレを使うつもりか？」

「100%の確率じゃないことは確かだよ。でも、僕はこれが一番確率が高いと思うんだ」

「いや、待て……でも……」

しばらくの間、彼は考え込んでいた。レンは推すように続けて言う。「やらない後悔より、やる後悔だよ。死ぬ直前になってあるとき試していればよかった、なんて思うより遙かにマシだよ」

その言葉を聞いてしばらくの間黙っていたアランだったが、やがて小さな声でレンに尋ねる。

「研究区画最下層は警備が厳重だと聞いている。俺が今日忍び込んだときも上の上層は大したことがなかったが、下層への階段の扉の前にはぎっしりと人がいたぞ？ ましてや最下層だ。どうやって降りるんだ？」

「夜が遅くなれば少しは警備も緩くなるんじゃないかな？ それにこの島の人で研究区画に忍び込もうなんて人はほとんどいないでしょ？ だから警備してる人達も油断してると思うよ」

彼がしゃべっている間、アランは黙ってレンの言葉を聞いていたが、やがて観念したかのように懐から紙の束を取り出す。

「つたく、さすが俺が見込んだ男だよ。お前がそこまで言うなら……俺は協力してやるよ」

アランは紙の束を開いて机の上に広げる。それは研究区画内の詳細な地図と、警備員の配置、それから監視カメラの位置、警備員の交代時間とその名簿だった。

「アラン……これは……」

「今日忍び込んだときにちよーっと借りたまま返すの忘れた。まあそれはさておき、いくら警備が薄いといっても少しは監視カメラとかもあるからな」

レンとアランはその地図をじっと見つめていたが、やがて顔を上げて振り向いた。その視線の先には三人の仲間の姿があった。

「何よ。なんか方法でも思いついたの？」

「さすがレン、俺の男だ。グレート脳みそがワンダフルでデンジャラスなプランを考えついちまった。それはな……」

アランは三人の前でその方法を公表する。三人は開いた口が塞がらない、といった様子でその計画を聞いていたが、やがて我慢できないというような様子でウィルが文句を言う。

「そ、そんな危険な方法取れるわけじゃないか!? ボクは断固反対だ!」

「じゃあ何よ。アンタはいつ死ぬかわからない生活にビクビクしながら怯えて暮らすっていうの?」

リサは立ち上がるとレンの隣に並び、その腕を取った。

「ここで今生の別れつてのでも私はいいわよ。命賭けのミッションじゃん。ぶつちゃけ、臆病者は来んなって感じだけどね」

「お、臆病なんかじゃない。それにそんな急ぐことないじゃないか。まだ考える時間はある。そんな計画を実行するのは……」

「残念ながら、今日じゃないとキツそうだぜ?」

ウィルが不思議そうな表情を浮かべる。アランはそのまま説明を続けた。

「今日は大雨が降っている。紛れ込むにはぴったりの天気だ。それに、しばらくは晴れが続く。一週間ほどな。今日ほどの大雨つてのはなかなか降らねえぞ?」

「だが……だからといって……」

ウィルは最後までくだくだと何かを述べながら三人を止めようとする。だが、ついに言葉が考えつかなくなったのか、そっぽを向いた。

「き、君達は君達で勝手にするがいい！ ボク達は別の手段を考える。そんな危険なバクチに乗るくらいだったら、まだ運搬船に忍び込んだ方がマシだ！」

「そうか、それは残念だな……」

アランは本当に残念そうな表情を浮かべてうつむく。だが、すぐに表情を切り替えると、さつと手を差し出した。

「いままでありがとな。短い間だったが……偽りの記憶だとしても、楽しかったぜ」

「フン！ 偽りの記憶で悪かったな」

ウィルも一応手を差し出し、一瞬だけ握手した。だが、すぐに振り返ると、アリスを連れてどこかへと歩いていく。

「やるからには成功しろよ？ 無駄死にだったらただじゃおかないからな！」

「わかつてるよ」

「皆さん……お気をつけて……」

二人はさつさと談話室を出てどこかへと向かう。後には三人だけが残された。

「アイツらチクつたりしないわよね……」

「俺の記憶にあるアイツらはそんなヤツじゃない。静かに見守っているくらいはできる奴らだと認識している。さて、準備しないと俺は紙の束をカバンに突っ込むと、レンにノートパソコンを返却してどこかへと走っていく。」

「どこ行くの？」

「準備だ準備。今日は歩くぞ？ 俺はほとんど飯食ってないからな。集合は十時、談話室だ。トイレの窓から外に出る。真正面には寮母のおばちゃんがいるからな」

「わかった。じゃあまた後で」

アランはさつさとエレベーターに乗って上へと上がっていく。後にはレンとリサの二人だけが残された。

リサは固い表情を浮かべながら、ひしりとレンの腕に抱きついた。

「レンは……レンは怖くないの？」

「……怖いよ」

「じゃあなんで……なんでレンは行けるの？ 私はレンがいるから行けるけど、怖くて怖くてたまらないのよ……！」

レンはリサの体を思い切り抱きしめる。突然の抱擁にリサは目を白黒させながらなされるがままにしていた。

「リサは……明日が消えるとか考えたら怖くないの？」

「……え？」

「今まで幾度となく繰り返されてきた日常が突然なくなる。今までいたはずの人がいなくなる。そんなことにリサは我慢できるの？ 怖くないの？」

レンはリサを抱擁する腕により一層力を込める。

「僕は怖いよ。それは今感じている怖さなんかよりも全然怖い。もしリサがいなくなったら、アランがいなくなったら……僕は耐えられない」

「レン……」

「僕はそんな日常を守るために戦うんだよ。ウィル達は付いて来てくれないみたいだけど、少なくともリサとアランは付いて来てくれる。僕達三人と一緒に脱出することができれば、また新しい日常が始まる。そこにウィルとアリスの姿はないかもしれない。でも、僕はリサとアランがいてくれるだけで十分だよ」

「私も……レンだけがいてくれれば……それだけで……」

二人は顔を見合わせる。先ほどまで厳しい表情を浮かべていたリサが、今は朗らかな表情でレンを見つめていた。

「だから戦おう。日常を守るため……新しい日常を創造するためにね」

「……うん」

リサはぽーっとした表情を浮かべながら頬を赤らめていた。視線の定まらない顔でレンのことをじーっと見つめる。

「ねえレン……」

「なに？」

「き、き、きすしても……いい？」

「え、ええ！？」

レンは驚いたような表情を浮かべる。そんなレンにリサは大笑いする。

「あはははは！ さっきまですつごくレンがカッコよかったのに、いきなり元に戻っちゃったあ！ あはは、おつかしい！」

しばらくの間そうして笑っていたリサだったが、やがてレンの正面に立つと、背筋を伸ばして背伸びする。

「目え瞑って！」

その言葉が言い終わるか終わらないか、そのような刹那的瞬間、彼女は届かない背を必死に伸ばして唇を重ねた。

「！？！？」

突然のことに目を白黒させていたレンだったが、彼が状況を理解する前にリサはレンから離れた。

「あははは！ もらわれちゃったあもらわれちゃったあ！ わたしのファーストもらわれちゃったあ！」

「ちよつとりサ！？」

「あははは！ また後でね！ ばいびー！」

そう言つてリサは女子寮の方へと駆けて行く。あまりにも突然のことのためにうまく対応できなかったレンだったが、もう一人の自分の言葉を思い出してうんうんと頷く。

「こ、心を強く持たなきゃね！」

やや意味が外れているように彼は一瞬思ったが、首をぶるぶると振つてその考えに修正を叩き込む。

「ふー……いくぞー！」

ぺしぺしと頬を叩いて活を入れると、まっすぐ前を向いて歩き始める。

レンはノートパソコンを手にとると、元気な足取りでエレベーターホールの方へと歩いていった。

### 第3章 Truth（後書き）

ついに真実を知ったレン達。

大雨降りしきる中、ウィルやアリスと選択を違えたレン達は研究区に忍び込む。

そこで待っているのは未知との遭遇か、それとも……。

彼らは明日への扉を開くことができるのか。

row  
次章、第四章 The door bound to Tomorrow



## 第4章 The door bound to Tomorrow

第4章 The door bound to Tomorrow  
未だ雨は酷く、1メートル先すら見通すことができなかつた。言うならば一寸先は闇といったところだろうか。道は水浸しとなり、側溝を轟々と音を立てて水が流れていく。

雷鳴が轟き、稲光は空を覆う。その一瞬、三人の不安げな表情が明るく照らし出された。

三人はレインコートを身にまとい、降りしきる豪雨の中、少しずつ足を進めていた。

リニアを利用すると、駅出口のカメラにばつちり姿が写ってしまう。そもそも、研究区画は一般市民立ち入り禁止が原則となっており、彼らのカードでは駅のゲートをくぐることができない。

そうなると、唯一研究区画に立ち入ることができる方法は徒歩のみとなる。途中にフェンスこそあるものの、幸いなことに地続きになっているので潜入することができる。

「レン、大丈夫か？」

「ん……なんとか……」

格子状のフェンスに足をかけ、三人は苦勞しながらフェンスを上っていく。高さは3メートルほどであり、乗り越えること自体はそう難しくない。

水を跳ね散らして三人は着地する。そこはもう、研究区画の一部であつた。至るところに建物が立ち並び、闇の中ではほのかに電灯の明かりを振りまいていた。

「目指すは中央棟だ。歩いて五分くらいってどこか？」

「まだそんなにあるのね。ずいぶん行き来しにくいじゃない」

「本来は地下部分……下層のリニアシューターを利用して建物間を移動するんだよ。俺達はそれを利用するわけにはいかないから、徒歩で行ったり来たりするんだよ。実際のところはそんなに不便じゃ

ないみたいだぜ？」

文句を言うリサを黙らせながら、アランは中央棟へと向かう。レンとリサもその後をゆっくりと、けれども確実に歩みを進めていく。やがて『中央棟』と書かれたプレートが豪雨の中を見え隠れする。それを見てレンとリサはようやく安堵する。

「気を緩めるなよ？ 真正面から入るわけにはいかないから、迂回して食堂側の入り口から入る」

二人は不服そうな表情を浮かべる。アランは呆れたような表情を浮かべて文句を言った。

「お前らな……俺はカメラ対策に窓から入ったんだぞ？ それに比べれば扉から入れる分、まだマシだと思えよな」

さらに歩くこと数分、ようやく食堂の入り口へと到着する。三人はそこでレインコートを脱ぎ捨て、軽く体をタオルで拭くとゆっくり足を進める。

アランは近くにあった倉庫と書かれた扉を開き、中に入った。

彼は懐から地図を取り出すと、台の上に大きく広げた。そして、地図上の道を指でなぞって示す。

「今俺達がいるのはここだ。ここから中央のエレベーターの方へとまっすぐ進むとその隣に下層行きの扉がある。本当はエレベーターを使えば最下層まで直行なんだが……そのエレベーターは研究員、警備員の使用頻度が高い。だから、使うのは無理だろうな……。下層に降りたらまっすぐ進み、荷物用のエレベーターを使って最下層に降りる。そこから正面に進み、二つ目の角で右、次の角を左、そしてまっすぐ進んで三つ目の扉が目的の部屋だ」

「で、その下層に行く扉の前にはカメラはないの？」

アランは黙ってその扉付近の一点を指さす。そこには確かにカメラのマークが描かれていた。

「方法は二通り。無理やり強硬突破か、映画なんかみたく監視室を制圧するか、だ」

レンは箱の上にとどざりと体重を預けてうなり始める。

「どっちも非現実的よね。映画の主人公なら、並外れた身体能力だとか、凄い道具だとかがあるけれど、私達にはそんなものはないもの」

「……もし、それがあるとしたら？」

アランは意味ありげにニヤリとを笑みを浮かべ、肩から下げている鞆の中から様々なモノを取り出した。

「もしかしてこれって……！？」

「んー、そこまで強力なもんじゃないが……。こいつは防犯ショットで買った催涙スプレーなんだが、射程は1メートル程度、顔面を狙わないと効果が薄くなり、しかも一回限りの使い捨て品っていう、何とも言えないモンだ。こっちはスタンガン。一撃で昏倒させるような威力はないが、相手を一時的に無力化できる。スプレーと違って体の表面、あるいは薄手の服の上からならどこでも効果があるけど、無力化させられる時間はそう長くない。せいぜい十数秒ってところか。それからこっちは……」

最後に彼が取り出したのは……映画の世界でならば幾度となく目にしてきたが、まさかこの島に存在するとは思っていなかったモノ……拳銃だった。

「アラン！？ これは一体なんなのよ！？」

「そう騒ぐなよ。ほれ」

アランはリサの方へと銃口を向け、かちりと引き金を引く。その瞬間、銃の先から一筋の炎が噴き出した。

「はぁ……びつくりさせないでよ……。いきなり銃口向けられて心臓止まるかと思っただわよ」

「悪いな。ま、この通り見かけ倒しのライターなわけだが、脅しくらいには使えるだろう」

アランはそれを腰のベルトに挟む。その上からシャツをかければ外見からは何もわからない。

「こいつはかなり重いから、いざってときは鈍器として使える。ヤケクソで投げつけたっていいだろう」

そう言つてアランはからからと笑つ。だが、レンは笑うことができなかった。

「どうした、レン？ なんつつか、すつごい表情が固いぞ？」

「そりやそうだよ……。こんなこと初めてだし、僕は皆みたいに度胸があるわけじゃないし……」

「……そ、そんなことないわよ！」

今まで黙りこんでいたリサが突然声を上げる。そのただならぬ様子に二人は視線を向ける。

「アンタは……ウィルとアランが争っているとき、割り込めたじゃない！ 私、あのとき凄く怖かった……。クローンとかそう言う話を全部抜きにして、ただ二人が争っていることが怖かった……」  
リサはしばらくの間胸を押さえていたが、やがてレンと向かい合つて言った。

「アンタは……アンタが思っているほど弱くない。十分強いわよ」

「リサ……」

「じゃなきゃ……私が惚れるなんて……ないんだから……」

突然の告白に思わず息を止めるレン。リサはリンゴのように頬を真っ赤に染めながら言葉を続ける。

「記憶がどーとかそんなの関係ないわ。だって、今日の出来事は間違いなく起こっているもの。あの状況で割り込めたアンタが凄い。だから惚れたのよ……」

リサは語尾を濁らせながらもそう言い切る。

もちろん、彼女がレンに惚れた理由はそれだけではない。だが、彼女は本当のことを確かめることが怖かった。

今まで誰からも見捨てられた彼女を唯一認め、そして共に過ごしてくれた唯一の友達、それがレンだった。

彼と過ごした思い出が、色鮮やかとは言えぬものの淡いすりガラス越しに見ているかのように流れていく。そのどれが本当で、どれが嘘かはわからない。けれども、それは彼女にとってレンの全てで、そして彼女を今まで支えてくれた大切な思い出であることだけ

は確かだった。

「リサ……」

「こんなときになんだけど……手を繋いでくれる？」

リサは恐る恐る小さな声で尋ねる。レンは笑って頷くと、右の手を差し出した。

彼女は怖がるように怯えながらもその手を握る。レンの手が思いのほか温かく、柔らかいことに驚いたリサだったが、もう一度しっかりと力を込めて手を握った。

「あー……ごほん。そろそろ突っ込んでいいか？ いい加減俺を空気にするのはやめてほしいんだが……」

突如ムードを破壊するような発言が飛び出す。リサは苛立ちを表情に露にしつつも、手を繋いだままアランの方を向いて座った。

「まったく……俺も混ぜろよ」

「何か言ったかしら？ お相手のいないアランさん？」

リサが精一杯の嫌味を込めてアランに言い放つ。アランは頬をピクピクと動かしたものの、そのまま話を続ける。

「いや、なんでもない。ともかく緊張すんなレン。俺がついてるからな……？」

カツコよくセリフを決めるアラン。だが、とうの昔にレンの緊張はリサの告白という荒技によって解消されている。リサはそんな不様なアランを鼻で笑う。額に青筋が浮かんだが、にこにここと笑みを浮かべてアランは喋り続ける。

「いざって時には通信教育で鍛えた我流柔道が火を吹くぜ！」

「通信って、それは妄想という名の電波じゃないの？」

けらけらと笑うリサ。いつも通り苦笑いを浮かべるレン。悔しそうにぶるぶると拳を震わせるアラン。

「そんなに自信があるのなら、いざってきときはアンタを敵の目の前に放り出して囷にしてもいいのかしら？」

「ごめんなさい、やめてください」

バック転土下座を決めるアラン。リサは呆れてため息をつきながら

もその微妙に高い運動能力をもつたいないと思う。レンは例の如く苦笑いを浮かべてなんとかその場をやり過ごそうとし。

『駅前ゲートより侵入者！ 駅前ゲートより侵入者！』

突如スピーカーから音声が流れてくる。いわゆる館内放送というやつである。その語調は慌ただしく、突然の事態に何が起こっているのか理解できていないという感情がひしひしと伝わってくる。

『侵入者は二名！ 性別は不明、両者共に武器を所持！ 繰り返し、侵入者は二名！ 性別は』

「ねえ、二人つてことは……」

「馬鹿なこと言わないでよ。ウイルスならともかく、あのアリスがそんなことできるわけないでしょ？」

その言葉を聞いて、うんうんと頷くアラン。だが、レンの胸中では不安がぐるぐると渦を巻いていた。

「誰だか知らないが……こいつはチャンスだ。騒ぎに乗じて下層に降りることができな」

アランはそう言うと、地図を畳んで武器の類を鞆にしまいこみ、慎重にドアを開いた。

「……私、レンの足手まといになるかもしれないけど……」

リサはレンの手を握る手に力を込めた。そして、囁くような小さい声でそつと呟いた。

「けれども……私だってできること、あるんだから……。なんでも一人で抱え込まないでね……？」

「……うん」

アランはゆっくりりと、それでいて慎重に辺りの様子を探りながら先へと進む。

侵入者を取り押さえるためか、ほとんどの警備員は本来の警備担当の位置にいなかった。おかげで警備員が警備している場所を避ける必要がなく、まっすぐに中心部へと向かうことができた。もっとも、

監視カメラだけはどうすることもできないため、死角である真下を通るなどしてカメラに写らないように進んでいく。

一番アランが恐れていたのは、定期的に一定のルートを通る警備員ではなく、まったくのアトランダムに出現する研究員の方だった。だが、その研究員も侵入者を恐れてか一人も現れることはなかった。順調過ぎると思えるほどまっすぐに進めた三人は、予想よりも遙かに短い時間で中央エレベーター前へと到着した。

「アラン、カメラどうするのよ……？」

リサはエレベーター前および、階段前を監視する防犯カメラを指差す。それは向きが固定されたもので、階段を通ろうとすれば間違いなく姿が写ってしまう。

「今は騒ぎが起こってるからな」

先ほどの拳銃型ライターを取り出すと、アランは思い切り振りかぶって放り投げる。くるくると美しい流曲線を描いてライターは飛んでいき、鋭い音を響かせてカメラを破壊する。アランは落下した力メラの残骸の中からライターを拾い上げると、腰のベルトの内側へと挿した。

「ねえアラン……。これって結構高いんじゃないの？」

「俺がやったことあるゲームでは銃で撃って監視カメラ壊してたな。あれでアライトが鳴らないのが不思議でしょうがなかったぜ」

そのまま落ち着いた様子で、それでいて慎重に扉の向こう側の気配を伺う。どうやら扉の向こう側には誰もいないようである。

誰も来ないかとレンとリサは扉のこちら側を見張っていたが、アランが扉の向こう側に体を滑らせて行ったのを確認して、二人はゆっくりと扉の向こう側へと足を運ぶ。

重い扉は低い音を立てて閉じた。

しばらくの間、ほの暗い階段が続いている。三人は急がず、それでいて遅すぎない速度で階段を下っていく。

ここはちょうど二つの世界を隔てるゲート。静寂と騒乱、サイレンとノイズが混じり合った世界。延々と下層へと続く階段室にコッ

コツという音の揃わない足音が響いていく。

「ここだ」

途切れの見えなかった階段にようやく終焉が訪れる。

プレートには下層と書かれており、その脇にはやはり重そうな扉があった。

アランはゆつくりと力を入れて扉を押し開ける。ぎい、という濁った音を立てながら少しずつ扉が開いていく。

上層とは異なり、下層はまったくの別世界だった。

先ほどの侵入者の件もあつてか、出入りが激しく騒がしい上層とは対照的に、下層は肅然とした雰囲気か辺りを支配していた。

声を出すことすら憚られる世界。アランはやや声色を落として二人に告げる。

「ここから先はカメラによる監視がほとんどで、警備員はほとんどいないはずだ。さっきの地図が正しければ、だけどな」

アランは壁際に走り寄ると、壁に背をつけながら緩慢とした様子で進んでいく。彼の頭上では監視カメラが回転しながら侵入者を探していた。しかし、そんなカメラも直下までは監視していないようで、真下を潜りぬければ通ることができそうだった。

しばらく進んでアランが手招きする。レンとリサは頷き、カメラが反対側を向いているタイミングを図って真下へと飛び込む。しばらくの間カメラが回るのを待ってから先に進み、アランの待つ場所へと静かに進む。

「ここからまっすぐ進んだところに扉が見えるか？ あの脇に荷物搬送用のエレベーターがある。制限重量は80キロまでの荷物専用だ。だが、一人ずつならなんとか乗れるはずだ」

数十メートルほど正面に進んだところにはまた一つのエレベーターが目に入る。おそらくそれが人間用のエレベーターであろう。目的のものはその隣にあるのだろう。

三人は同様の方法でまっすぐ進んでいく。だが、それは三つの目の十字路を超えたところで起きた。



「離れたまえ！ アリスに手荒なことをしたら許さないぞ！？」

「痛いです！ も、もう少し優しく扱ってください……」  
「黙ってる、クソ餓鬼どもが！」

三人は慌てて通路に身を隠す。先ほど三人が降りてきた階段の隣のエレベーターから現れたのは数名の警備兵、そしてよく見知った友人達の姿だった。

武器として振り回していたであろうバールを取り上げられ、それで殴られながら二人は引きずられていく。

（やっぱりウィルとアリスじゃないか！）

（ってかなんでアイツらがここにいるんだよ！？）

（そんなこと、僕に聞かれたって……）

しばらく二人の様子を遠くから見つめていたが、もう一度体を引っ込めて話し合う。

（どうするのよ！？ あのまま放っておくわけにはいかないでしょ！？）

（だからって俺達にできることはなんだ！？ まさかアイツらを助けるだけでも！？ そんなにいくらなんでも無理だぞ！？）

（でも、リサの言う通り放っておけないよ……。元はと言えば僕達が忍び込んだから、気になって後を追いかけてきたんだろうし……）  
しばらくひそひそと声を低めて話し合っていたが、突如ウィル達の方から騒ぎ声上がる。

「ダメ！？ 返してください！」

「チツ、いつちよ前にネックレスなんかぶらさげやがって……」

警備員の一人がアリスのネックレスに興味を示したのか、それを指で摘まんて持ち上げていた。それはまさしくウィルがアリスへとプレゼントしたルビーのネックレス。アリスがとても大事にしている、愛しく想う大切な品である。

「おい！ それに触るな！」

「うるせえ！ 黙ってるって言ってるだろッ！」

警備員の一人がウィルを激しく殴打する。声にならない悲鳴を上げ

ながらウィルは壁へと叩きつけられた。

「ウィルっ！」

「ばっ、リサ！」

思わず身を乗り出して叫ぼうとしたリサの口を塞ぎ、体を引き寄せ  
るレンとアラン。あまりの惨状にリサは我慢することができなかつ  
た。

「……………ん？」

警備員の一人が三人のいる方へと視線を向ける。

「どうした？」

「いや……………向こうの方に誰かいたような気がしてな……………」

「なら俺が見てこよう」

そう言つて、警備員の一人が二人から離れて歩き始める。靴音は静  
かな廊下で反響し、実際よりも大きな音となつてレン達の元へと届  
く。

（馬鹿！ 何やってんだよ！）

（ごめんなさい……………。ついカツとなつて……………）

（そんな衝動殺人みたいな言い訳聞きたくねえよ！ とにかく隠れ  
る！）

三人は急いで手近なドアを押してみる。幸いなことに、そのドアに  
は鍵がかかっていないようだった。

アランはそのままドアを押し開け、雪崩込むように三人はその部屋  
へと飛び込んだ。

事実、彼も何か声を聞いたように感じたのだった。仲間もその声を  
聞いたというだけあつて、その疑惑は確実なものとなりつつあつた。  
彼がその角まで到着して、それは確信へと変化した。

徐々に閉じゆく扉。人の姿こそ見えないものの、誰かがそこを通つ  
たということは明らかだった。

彼は手を伸ばし、扉の取っ手をつかむ。力を込めると思いのほかド

アは簡単に開いた。彼は腰に挿した警棒を手に、そのままドアを押し開いた。

「誰だっ！」

そのまま体を中へと滑りこませ、彼は警棒を構える。そこはその建物内では珍しくもない、普通の研究室のようだった。

「はははは、はいいッ!？」

彼が警棒を向けている相手……白衣をまとった女性は緊張した面持ちで両手を挙げる。その手には何か液体が入ったプラスチックがあり、その前にはいくつかのシャーレとビーカーが並んでいた。

「あ、いや失礼。誰かがここに入っていくのを見たような気がして……」

「あ、えと……すす、すみません！ そそ、外が騒がしかったので……あの、えつと……気になったもので……その、ちょっと……だけ……」

「そうか。いや、上層の方で侵入者がいたんだよ。さっきの二人が侵入者で、すでにもう我々が取り押さえた。所長には既に連絡してあって、所長が来るまではA7倉庫でおとなしくしてもらおうってことになったんだ」

「A7っていいいますと……そその、えつと……いい今は使ってないからつぼの？」

警備員の男は頷いた。それを見て、彼女は心底安心したような表情を浮かべる。

「じじじじゃあ、べべ別に今ここが危ないってわけじゃ……ないんですよ……ね？」

「そうだな。下層の方では何も異常がないようだからそのまま続けてもらって構わない。いや、邪魔したな」

そういつて警備員の男性は部屋を出ていく。それと同時に安堵のため息が室内に漏れる。

「悪いねおねーさん。ちょーっとワケありの身で忍び込んでいるけど、おねーさんに危害を加えようとか思っていないから安心していい

ぜ？」

「おおおおお願いですから、そその銃をなんとかしてください！ ととというかレンさん助けてください！」

女性……ユイは震えながらアランが構える拳銃を指さし、今にも泣き出してしまいそうな声音で懇願する。

「なあレン。俺、今最高に楽しい気分なんだが……」

「可哀想だから下してあげなよ……。彼女、僕のお友達でさ。こういうの、とつても苦手なはずなんだよね……」

「お、レンに年上のおねーさんをナンパするなんていう、素敵な趣味があるとは思ってなかったぜ。というか、男としてこのシチュエーションは萌えるぜ？ 楽しまないわけには……おぶっ！」

瞬間、見事なハイキックがアランのこめかみに突き刺さる。くるくると三回転半のひねりを加えながら残像を残して崩れ落ちるアラン。それを冷たい視線でリサは見下ろす。否、見下す<sup>みくだ</sup>。

「私的にはウイル達を助ける囿にしていると思うんだけど……。幸い妄想流柔道も使えるらしいし、なんとかなるでしょ？」

「ぼ、僕はあんまり賛成できないかな……。ここまで来れたのも偏にアランのおかげだし、それとプラマイゼロってことでどうかな？」  
リサは盛大なため息をつく。それも仕方がない、というレベルではなくまさに始末に終えない、というような感じだった。

「……ふう、仕方がないわね。ここはレンに免じて許してあげるわなにやら事情をよく飲み込めないユイだったが、ともかく自分が助かったことだけは理解できたようで、本当に安心したような表情を浮かべる。

「ユイ、迷惑かけて悪かったわね」

「あああ、いえその、そんな……」

目尻に涙をいっばいに溜めたまま、ユイは頷いた。そんなユイの様子をじーっと見つめる。

「ユイ……？」

「ああ、はい、なんででしょうか……？」

そのままユイの正面へと歩いて行って、まじまじと顔を見つめる。

「あなた、歳は？」

「えっとその……じゅう……ろくです……」

「ええ！？ ユイさんって16歳!？」

レンはそれを聞いて驚く。16歳といえば、レン達のみかけの年齢よりも若いこととなる。

それを聞いてレンも彼女の顔をじいっと見つめた。確かに彼女は幼い顔つきをしていたが、その分厚いメガネと薄汚れた白衣がそれを感ぜさせないのだろう。少女は慌ててメガネをかけ直す。

「え、どどうしてこんな場所で働いてるの!？」

「えっと、その……アメリカの大学を飛び級で卒業して……それでその……遣伝子工学で有名なオキシデリボに……」

「なるほどね……つまり、超優等生ってわけなのね」

「そそそんな!? わわ私なんてそのどこにでもいるような平凡な子供と何も変わりありません!」

ユイは慌てながらも強くそう言い切る。そんな様子を見て、リサはニヤリとした笑いを浮かべて彼女の胸に手を置く。

「そうね……確かに胸も……」

すーっとリサはユイの胸を撫でる。ほとんど膨らみもない平らなまな板。だがしかし、よく目を凝らせば、そこにはわずかながらも微妙な膨らみがある。それをリサはぷにぷにと指先で摘まむ。その瞬間、ユイの頭が蒸気を出して爆発する。

「ななななそんな胸なんてっ!? わわ私はそのこんなあわわわわ……」

リサはニヤニヤした笑みを崩さないままレンの方を見ると、心底楽しそうに言った。

「ヤバイわね。これ、本当に楽しいわ」

「リサ、それじゃあアランと同じだよ」

そう言われ、はっとした表情を浮かべるリサ。ぺちぺちと頬を叩き、ユイのことを見据える。

「ともかくユイ、私達はあなたに危害を加えに来たわけじゃないの。えっと……」

しばらく黙ったままユイの顔を見つめるリサ。何事かと身を固くしていたユイだったが、どうやら無駄な抵抗だったようだ。リサはひよいと手を伸ばすと、その分厚いメガネを取り上げる。瞬間、彼女の目の前には幼い美少女が現れる。

「ひゃうっ!? め、めめメガネ返してくださいよー!」

「すっごい可愛いわね。ほんと、その気はないつもりだったけど、こんな子なら食べちゃってもいいかも……」

危険な表情を浮かべてニヤニヤ笑いを崩さないリサ。その様子もはや危険人物と評するに値するオーラをまとっており、レンですら思わず一步身を引く。

「メガネはダメなんですー! めっめのめー!」

「か、可愛い……」

だが、可愛いのはそこまでだった。彼女はどこからかメスシリンダーを取り出すと、思い切り振りかぶって本塁打級の一撃を繰り出す。ガラスが碎ける音とともに崩れるリサ。ユイは慌ててその骸からメガネを奪い取り、元のようにかけ直す。

「ごめんね、二人とも大がつくほどの馬鹿だから」

「れれれレンさんー! 怖かったですー!」

ユイはレンに思い切り抱きついた。そんなユイの頭をレンはよしよしと撫でた。

「ところでユイさん」

「ユイさんだなんて……ユイでいいですよ」

「わかった。ユイ、一つ聞いてもいい?」

ユイはこくこくと頷いた。レンは後を続ける。

「クローンを作って、そのクローンを依頼人の移植手術用のスペアパーツにするっていうプロジェクトがあるらしいんだけど……ユイは知ってる?」

「ええ!? な、ななななんでもそれをれれれレンさんがし、しし知っ

てるんですか!？」

ユイは心底驚いたような様子で大声を挙げる。

「ユイは知ってるの!？」

「あの、その、えっと……お金と不幸、それと人は創っちゃいけないんですけど……むむ、昔はそういうことが試されていたみたいです。その！ むむ昔の話ですよ！ 今は人道的によくないってことでやめちゃったらしいですけど……そんなことが行われていたなんて信じられないです……」

ユイは本当にその研究が恐ろしい、というような表情を浮かべて話す。レンは首を横に振った。

「残念ながら事実はそうじゃない。噂のように感じられるけど、実は……僕達はそのクローンなんだよ」

口はぱくぱくと開き、一気に顔から血の気が失せる。彼女は驚きのあまり衝撃を隠すことができなかつたようだった。彼女にとつてバィブルとも言える存在が崩れたのである。ショックが大きいのは当然のことだといえよう。

「え、じゃあ、そそその……みみ、皆さんは皆さんを生み出した人に復讐を……」

「あ、え、ええ!？ そそそんな物騒なことは考えてないよ!？ 僕達はただ生きたいだけ。この島を生きて出たいだけなんだ」

ユイはほっとしたような表情を浮かべる。自分の知っている人がそんなことをしないとわかつて安心したのだろう。

「あの……その……レンさん……?」

「……ん?」

ユイは何かを伺うようにレンの表情を見る。

「えっと……その……わ、私も手伝ってもいいですか!？」

「え……!？」

「わ、私、これでも研究者の端くれです！ 人を幸せにするための科学がそんなことに使われていたなんて……ゆ、許せません！ こんな命を物みたいに扱うなんて……ご、言語道断です!」

レンは黙って彼女の言葉を聞いていたが、やがて静かな声で尋ねた。  
「ユイは……それが自分の会社に背を向ける行為だってわかってる？」

「あう……それは……その……」  
少女はうつむいて言葉を濁らせる。一心に思ってた言葉だったが、それが自身の身にどれだけの危険を及ぼすかまでは考えていなかったようだ。

「もしかすると、君の人生を台無しにしてしまうかもしれない。それでも……いいの？」

ユイはしばらくの間心の中で葛藤していたが、やがて決意を固めたのか、強い意識を秘めた表情を浮かべ、レンのことを見つめる。

「わわわ、私！ まだここに来て日が浅いですけど、入社のお金ももらったアイデアで……その、特許料とかそういうのものお金をもらったんです！ まだまだ何年かかっても使いきれないくらいいっぱい……。だ、だからってわけじゃないですけど、路頭に迷ってもしかばらくは暮らしていけます！ それにもし、その……人のクローンを創るなんてことがこの会社で行われているんだから……私はこの会社を辞めたい……です……」

最後の一言こそ小さな声だったが、確かな意思の元言い切ったという思いがレンの胸まで伝わってきた。そんな少女の頑張りに思わずレンは顔を綻ばせた。

その小さな頭に手を乗せると、少女の頭を優しく撫でた。

「ふ、ふえ！？」

「まだ16歳なのに……無理やり18歳にさせられた僕達よりもずっと強いんだね。ユイ、それはとっても凄いことだと思うよ」

「あう……その……えっと……ありがとうございます」

「レン、お前も男になったな……。年下とはいえ、女をナンパしてしかも口説き落とすとは……。あれ、年上？ この場合は……？」  
「知らないわよ。ともかくレン、お手柄ね」

いつの間にか復活していたのか、アランとリサがうんうんと頷く。



「ふ、二人とも!? いつの間に……!」

「俺は抱きついた辺りから」

「私はユイが手伝ってくれる辺りから。……って、抱きついたって何よレン」

リサはレンの耳を摘まむと、部屋の中を引きずって歩く。

「い、いた痛い!? り、リサ!?!」

「へえー、レンがナンパねえ……。しかも口説き落とすう? 随分成長したじゃないレエン? おねーさんは嬉しいわよお、おほほほ」

そのままレンにマウントし、笑いながらレンのことを見下ろす。

「り、リサ……怖いよ……」

「うふふふ、怖いことなんてなあんもないのよお?」

明らかに額へ青筋を浮かべながら、にっこりと笑ってレンのあごに手をかける。それを凍った笑顔で見上げるレン。

「あー、お前ら体張ったそんな夫婦漫才はいいから行く……ぶごあッ!」

マウントポジションからの弾丸のようなドロップキックがアランの腹部を貫く。同時にカタパルトにされたレンも非常に痛そうである。

「あはは、皆さんとても面白いですね」

ユイは一人笑いながら着々と準備を進める。カモフラージュに白衣を用意し、それと赤十字のマークがプリントされた大きな箱を用意する。

「これを着てれば部外者だって簡単にはわからないはずですよ。同じことを研究する仲間同士の顔は知っていますけど、関係ないところの人の顔は全然覚ええない世界ですから……。それと、一応念のために傷薬とかを用意しました。その、あんまり使う必要がないと助かるんですけど……」

「ありがとう、ユイ」

リサはユイから白衣を受け取ると、さっそく身にまとった。真面目な表情をすると意外と似合うものである。

「リサ……手加減してよ……ありがとね」

腰をさすりながらレンは立ち上がり、ユイから白衣を受け取った。

「はい、レンさん！」

ユイは嬉しそうな表情を浮かべて頷いた。すっかりレンになつてしまつたようだった。

「ま、待つてくれ……一番最初に治療が必要なのは俺だぞ……」

「打撲でしょ？ そんなんさすつときゃ治るわよ」

「か、可愛い幼女がさすらないと治ら……ぐぼあッ！」

倒れ伏すアランへとかかと落としがめり込む。それは見事に脳天を貫き、床へと叩き込む。

「リサ……そろそろやめてあげないとアラン死んじゃうよ……？」

「ないない。この程度で死ぬようだったらすでに十回は死んでるわよ」

「あの……その……本当にさすつた方が」

「いららない」

ユイの問いかけにはほぼ同タイミングで答えるレンとリサ。ぴったり息が合っている辺りがアランに夫婦漫才と言われてしまう所以だろう。

「お前ら……後で覚えてるよお……がく」

三人はユイの案内で倉庫の間の通路を歩いていく。

倉庫は他の場所同様静かで、騒がしいのは四人の周りだけのようだ。

「あそこです」

ユイの指さす先には二人の警備兵が立っている倉庫があつた。中に閉じ込められている二人の見張り役、といったところだろう。

「どうする？ 強行突破といくか？」

アランが鞆から取り出したスタンガンをバチバチと唸らせる。ユイはとんでもないというような表情を浮かべて首を横に振った。

「ただだめですよ！ そんなことしちゃいけません！ 怪我したら

痛いじゃないですか！」

「……じゃあどうするんだ？ まさかいきなり行って入れてくださ  
いってわけにもいかないだろ？」

「あの……その……一応、一応ですけど……考えがあります」

ユイは三人を率いて近くの別の倉庫へと入る。入り口にはA5倉庫  
と書かれていた。

「ここは違うだろ？」

「あの、その……ちよつと準備ができるまで待つてください」

ユイは腰のポーチから数本のドライバーを取り出すと、左手の指の  
間に挟んだ。

そして、頬を赤く染めながら恐々とレンに尋ねる。

「あの、その……えつと……レンさん……？ 一つ、お願いしても  
いいですか……？」

レンは快く首を縦に振る。ユイはもじもじとしていたが、やがて意  
を決めたのか、目を瞑って一気に言った。

「肩車してください！」

「肩車……？ それならお易い御用だけ……」

レンはしゃがんでユイに背を向ける。ユイはなんとか苦労しながら  
レンの両肩に足をかけ、バランスを整えた。

「はい、いいですよ」

……しかし、レンはなかなか立ち上がることができなかった。それ  
は決してユイが重かったため、などというわけではない。

研究員といえど、白衣の下は基本的に好きな服装をとる。一般的に  
は活動のしやすい服となるだろう。丈夫さを求めてジーンズにする  
もよし、動きやすさを求めてジャージにするも自由である。

だが、彼女の場合……それはももの上までのショートパンツであつ  
た。つまり、肩車をしている現在、レンの頭はユイの生の太ももに  
サンドされているということである。

一年で成長したとはいえ、レンも立派な18歳相当の少年である。  
つまり、女子の（自主規制）や（自主規制）には興味津々のお年頃

なのだ。表面上では平静を取り繕っているものの、ユイは確かに美少女に分類されるタイプの女の子である。ましてやその太ももとなれば、それほど艶めかしいものはそう存在しないだろう。

「……レンさん？」

「……あ！ ごめんごめん！」

なんとか返事をする、レンは少しふらふらしながら立ち上がる。

「大丈夫か？」

「多分……」

アランも心配そうに声をかける。それほどまでにレンは安定していないのだろう。

ユイは両手を上に伸ばしてダクトの辺りを弄っていたが、もはやそんなことを気にかける余裕は彼にはなかった。

「あ、その……えっと……」

レンの頭上から困ったような、それでいて悩ましげな声が聞こえてくる。

「あの……息が当たって……えっと……その……くすぐったい……です……」

「あ……わ、ご、ごめん!？」

それを聞いてレンは大きく息を吸って止める。だが、心臓はバクバクと高鳴り、体の芯は加熱し、そして顔を挟む柔らかな感触が彼の脳髓を刺激する。そんな状態で息を止めたのだからひとたまりもない。

徐々に視界はぼやけ、やがて白に塗りつぶされていく。だからといって、ユイが頭上で作業しているので、しゃがんだり倒れたりするわけにはいかない。

なんとか意識を保ち、立っていることだけに集中しようとするが、それももはや限界だった。

「ひゃあっ！」

やがて轟音とともにレンは倒れた。それと同時にユイも降ってくる。大きな音を立てて二人の頭が激突する。

真っ白だった視界が徐々にぼやけ、レンは気を取り戻す。強すぎる衝撃ゆえに、一瞬だが気を失ってしまったようだ。両目をこすり、起き上がると徐々に視界がクリアになっていく。

彼が体を起こすと、頬をイチゴよりも赤く染めてうつむくユイ、そして怒りと苦悩と悲哀に表情を歪めるリサ、どういっわけか機能停止して耳から煙を噴き出しているアランの姿が目飛び込んできた。「あれ……皆、どうしたの？」

一言発する度にユイが体を震わせる。目を凝らすと、彼女が指を当てがっているユイの唇が何か言葉を形作っているように思えたが、何と喋っているかはわからなかった。

リサはというと目の前で起こった出来事に、不可抗力だったかゆえの様々な思いが渦巻いては消えるという、延々とも思えるようなループに苦しい表情を浮かべている。

アランはショックのあまり、完全に電源が落ちていた。出来事のあまりの衝撃の大きさにブレーカーが飛んだのだろう。

レンは目の前の状況に意味がわからず、ただ茫然としているしかなかった。

ただ、なんとなく柔らかい感触があったのを彼は覚えていた。それを感じていたのはどの部位だったかということをしばらく考えていたが、そんな考えはリサのミドルキックによって叩き割られ、吹き飛ばされる。

頭から見事に転がっていた段ボールへと突っ込むレン。慌てて駆け寄り、体を揺らすユイ。そんなユイの様子を見て、苛立ちが晴れるどころか更なる苛立ちを募らせたことに頭を抱えるリサ。シャットダウンしたままのアラン。

「れ、レンさん！？　ただ大丈夫ですか！？」

「いたたた……。まあ、慣れてるけどね……」

そう言いながらレンはなんとか体を起こし、ユイの顔を見つめる。その瞬間、口元を押さえてユイは蒸気爆発する。頬を核融合炉のように真っ赤に染め、その頭上からは白い蒸気が噴き出していた。完

全にメルトダウン状態なのだろう。

ともかく納得のいかなかったリサは手近なところにあつたアランをローキックで打ち上げ、掌底を叩き込む。見事なエリアルコンボにようやくスイッチが入ったのか、やはり悲鳴を上げながら段ボールへと突っ込んでいく。残念ながら彼の元へと駆け寄る美少女はいない。

「あの……その……一体何があつた……の？」

「レンさんが初めて……初めて……初めて……初めて……」

「最悪……見たくなかつた……」

「……なぜ吹き飛ばされたのか納得がいか……ん……がく」

その瞬間、ダクトにはまつていた鉄格子が外れ、レンの頭上へと落下する。ユイがネジを緩めて不安定になっていたが、リサがアランを吹き飛ばした衝撃で噛み合わせが外れたのだろう。それはもう一度、そして完全なる眠りの世界へと引きずり込む。次の瞬間、彼の体は白目を向いたまま冷たい倉庫の床に横たわっていた。

レンが目を覚ますと、そこには花畑が広がっていた。

柔らかな日差しと温かい風が頬を撫でる。目の前を色とりどりの蝶々が舞つていく。時折美しい花に降りては羽を休め、命を貪るように蜜を吸う。

「あれ、僕、なんでこんなところに……？」

そのとき、一陣の風が花びらを散らす。巻き上げられた花弁は天高く昇つていき、天空へと吸い込まれていく。

美しい舞踊の影で一人の少女が笑う。黒い装束を身に包み、そして腰まで届く長い黒髪の少女。背には一對の漆黒の翼を抱き、手には長い水棹。その姿をどこかで見たことがあるなとレンは思う。

少女は微笑を浮かべ、小さくレンに手を振る。そんな不思議な光景に、レンは思わず足を踏み出す。

やがてレンは彼女の傍に立つ。彼女は優雅に一礼すると、彼をそば

の席へと勧める。否、それは椅子ではなく、一艘の質素な作りの舟だった。

「貴方が出会ってきた人の数は少ない。けれども、誰もが貴方のことを大切に思い、そして今も思い続けているようですね。だから……貴方の懐にはわずかな枚数だけでも、金にも劣らぬ輝きを持つ貨幣があるはずですよ」

レンは少女の言うままに自信の懐を探ってみる……が、それらしいものは見つからない。

「……あら？」

その様子に少女は戸惑うような、慌てるような表情を浮かべた。

「まったく……迎えの死神はいつもこうなんですから……。あれほど間違った人の魂を刈るな、と日頃から言いつけていますのに……。申し訳ありません、こちら側の手違いのようでした。こちらの方から中有の道に戻ることができません」

「え、ちゅ、ちゅうつの……みち？ それは一体……」

「知る必要はありませんよ。それと、覚えていく必要もありません。このことは一切忘却してくださいと助かります」

彼女が手に持っていた水棹はいつの間にか漆黒の刃を湛える大鎌となり、その凶刃を輝かせる。

「痛くはありません。一瞬ですから」

「え、ちよ、一体な……」

彼の言葉が終わる前に彼女は動いた。周囲の花々を刈り取りながら、一気に鎌を振りぬいた。それは魂を刈り取る刃。現世と黄泉を繋ぎ、一本の道を作り出すよもつの途。

描かれた軌跡が残像となって消える頃には、彼の姿はそこにはなかった。

「まったく……帳簿にない者の魂を刈るとは……死神の腕も落ちたものです」

レンが目を覚ますと、そこには冷たい床が広がっていた。

凍えるような空気と鋭い視線が頬を撫でる。目の前を赤いものが水溜りを作っている。時折段ボールに吸い込まれ、そして徐々に紅色に染めている。

「あれ、僕、何をしていたっけ……？」

そのとき、寂しげな一言がレンの胸に突き刺さる。発せられた言葉は波紋のように散っていき、そして平穏に包まれる。

消え逝く言葉の影で、一人の少女が悲しげな表情を浮かべる。薄汚れた白衣に身を包み、栗毛のポニーテールを下げた少女。肩からは雨で染みを作った鞆を提げ、手には黒ずんだバール。その姿をどこかで見たことがあるなとレンは思う。

少女は悲嘆を浮かべ、レンを見つめる。そんな不思議な光景に、レンは思わず足を踏み出す。

やがてレンは彼女の傍に立つ。彼女は小さく悲鳴を上げると、彼を傍の段ボールへ座るよう促す。うん、それは椅子ではなく、一個の質素な作りの箱だった。

「座りなさい、レン」

非難するような、それでいて厳しい声が響く。レンはワケもわからずに座らされ、次なる指示を待つ。

「レンさん……信じていたのに……」

「アリス……？ それに皆……？」

「うるうる……レンさんが……私と……」

未だ頬を赤く染めたままぼーっとしているユイ。そして冷たい眼差しでレンを見つめる四人。

「ふう……ほんと信じられないわ。レンに口　コン趣味があったなんて……」

「いや、この場合はロリンというより年上趣味かもしれないだろう？？」

「まったく、俺達ってのはややこしいな……」

「でも、どっちにしろレンさんが……した事実には変わりありません



ん……。はあ……。そんな人だったなんて……」

レンは五人の言葉の意味を理解できないまま、ウィル達に尋ねる。  
「えっと……ところでどうしてここに？」

ウィルは恥ずかしそうに頬を掻きながらレンの言葉に答える。

「いやな、君らが出て行った後、やっぱり気になったんだよ。アリスと一緒にもう一度よく話し合ったんだが……やっぱり、ボクとアリスの正体が知りたくなっただ」

「それで……私達はレンさんが向かったと思われる研究区画へ向かいました。といっても、駅ホームを強行突破した時点で見つかってしまい、それでもなんとか奥の方まで進んだんですが、捕まってしまうて……」

「そこで俺らの出番だ。レンとユイが……はあ……」

そこで一回い意味ありげにため息を吐くアラン。耳まで染めるアラン。呆れるリサ。悲しむウィル。嘆くアリス。

「な、なんでそこで一回切るの！？ いいから話を続けてよ！」

「お、おう、悪かったな。えっと、ともかく二人が格子を外したダクトを通って、A7倉庫まで行って二人を助け出したわけだ」

レンが辺りを見回すと、そこは最初に四人と入ったA5倉庫と変わりはなかった。どうやらレンが気を失っていた時間はそう長くないようだった。

「レンも起きたし、行くとするか」

気付くとウィルとアリスも白衣に着替え終わっていた。物騒な武器の類は服の裏側に隠したようである。

「アラン、この後どうするの？」

「さっきそのことを相談していたんだが……念のため、二つに組を分けようと思う。ユイによると、六人も人間が一緒に行動するなんてことはほとんどないらしい。それに、最下層には倉庫ばかりで六人がかりでするようなこともないそうだ。だから、まずは三人が正面エレベーターを使って降りる。安全を確認したら、もう三人がエレベーターに乗って下に降りるって寸法だ。上に安全を知らせる

方法はまた後で説明する」

アランは一気に説明すると、質問する間も与えずに倉庫から出て行く。一度に大勢が動く、それだけ騒がしくなってしまう。彼の意図は他の皆にも伝わったようで、一人か二人ずつ倉庫を後にする。

「レン、私達も行きましょう」

「うん……」

やや痛む頭を押さえながらレンは立ち上がる。だが、予想以上に痛みは酷く、レンはもう一度座り込んでしまう。

「レンさん、大丈夫ですか？」

「ちよつと辛いかも……」

誰かが手当てしたのか、頭には包帯が巻かれていた。落下したダクトの格子が頭に当たったのだろう。わずかに切れて包帯にも血がにじんでいた。

「ちよつと待つててくださいね」

ユイはそう言うと、一人倉庫から飛び出していく。後にはレンとリサだけが残っていた。

「さっきは言い過ぎたわね。ごめん……」

リサらしくもなく、彼女はそう言って頭を下げる。レンは気にしていないという風に手をぱたぱた振ると、につこりと笑った。

「さすがに皆にああ責められるとちよつとは傷付いたけど……もう大丈夫だよ」

レンは大きく一息ついてから天井を見上げる。無機質な壁や天井は磨き上げられたように輝き、わずかの染みや傷すらも見当たらない。つた。

リサもレンの隣に腰を下ろすと、おどおどとした様子で口を開いた。

「レンはさ、どう思ってる……？」

突然の質問に、レンは戸惑ったように尋ねる。

「いきなりどうしたの？」

「私達ってまだ生まれてから一年しか経ってないんだよね？ それなのに、こんな風に言葉を話して、頭で考えて、行動している。こ

れって、普通の人の感覚からしたらおかしいんだよね」

「それは……僕達が普通じゃないってこと？」

リサはゆっくりと頷く。レンは自信が普通の人間ではないことについて、自分なりの決着をつけたつもりだった。だがよくよく考えてみると、それは誰かと話し合って考えたことではなく、自分一人で考えてたどり着いた答えだった。

彼女がなぜこのことを尋ねてきたか理由を考える。それは簡単なことだ。彼女の中ではまだ、答えを見つけていないのだ。

普通に考えれば、自分がクローンだなんてことを誰が信じようとするだろうか。もしそれが事実だとしても、目を背けて否定したくなるに違いない。それはレンも同じつもりだった。

だが、アランに真実を告げられ、心の中で気付かずに呟いていた言葉があつたことを思い出す。

『やっぱりそうだった』

そう、僕は知っている。それはリサの中には存在しない“僕”がいたからこそ、僕は信じる事ができたのだ。

『“僕”達は普通の人間じゃないさ。キャンプの時に教えてあげたじゃないか。“僕”らに思い出なんでものはほとんどない。思い出が形作られても“人”の手によって加工され、“人”にとって都合がいいように作り変えられてしまうんだよ』

「本当に“僕”は色々なことを知っているね。本当に僕なのか、疑ってしまいたくなるほどに……ね」

“僕”はしばらくの間黙っていたが、やがてそつと口を開く。

『“僕”は“僕”さ。それ以上でも未満でもない。君の中に存在するたくさんの僕の内の一人だよ。君は何かを考えると、色々な観点から一つのことを考えるでしょ？ 慎重な僕、大胆な僕、臆病な僕……数えだせばキリがない。そんな無限に存在する僕の内の一人なんだよ』

「そんなことはわかっている。君の思考によって助けられたことは何度もある。でも……どうして僕の中には“僕”がいて、リサの中

にはいないの？」

『居るはずがない僕、それが“僕”だよ。オリジナルが持たない贋造の僕。それはちよつとした些細な事故から生まれた、在ってはならない存在。この22世紀を行く最先端の科学者すらもが存在を想定しなかった存在さ。“僕”は無数に存在する僕とは一線を隔した世界に存在し、君の持たない力を持っている』

「些細な……事故？」

『そう。君は特殊な成長過程にあった。それは人格形成にも、身体の成長にも様々な影響を与える。そんな複雑怪奇、摩訶不思議な偶然が組み合わさって“僕”が生まれた。彼女の中に“僕”のような存在がいないのも当然かもね』

“僕”はそう言つて、ふうとため息を吐く。

「……僕はどうすれば彼女に心の平静を与えてあげられるんだ……？」

『それは“僕”が考えることじゃない。君が手助けをし、彼女が自分で掴むものだ。これ以上は自分で考えてほしい。それに彼女が寂しそうだよ？』

そう言つて、真っ白な部屋は崩れていく。それに飲まれるように“僕”の姿も消えていく。

僕は意識を外の世界へと集中させる。彼女は“僕”の言つとおり、少し寂しそうな表情を浮かべていた。

「レン……聞いている？」

「ごめん、ちよつとぼーつとしてたかも……」

リサは呆れるような表情を浮かべた後、まあしょうがないかというような諦めにも近い表情を浮かべてもう一度話し始める。

「私ね、アランの話を聞いたとき、最初は全然信じられなかったの。あのデータを見えてもらつてもいまいちピンとこなかったし、何よりあの写真の人のことなんて、私達が知るわけがないものね。もし、親戚とか両親つて言われても、ああそうかもつて思つちゃうでしょ？ でも、あの場でレンだけはアランの言葉を信じていた。友達だ

からとか、そういうのを関係なしにして、まるで元から知っていたみたいに信じてたもん。あんまりレンが信じるものだから、私まで信じていいかななんて思えてきちゃったんだよ？ だから、ここにこうしているわけだしね」

レンは黙って彼女の話の話を聞く。最初は信じる事ができなかった。だが、彼が信じたから彼女も信じることにした。クローンがどうのこうのという話がまったくの嘘で、あのデータは僕らの両親のもので、これが全部アランの質の悪い悪戯だったとしたら大変なことになる。もっとも、アランに限ってそんなことはないだろうが。

「ぶっちゃけて言うと今でも本心からは信じてないわ。でも、私には本当はそんなことどうでもいいの。まだ1歳だとか、クローンがどうか、移植手術がどうかそんなの知らない。レンが行ってしまつから……だから私はついて来たのよ。だから……最後まで責任取りなさいよ」

リサはそう言うとうーんと背伸びをして体の凝りをほぐす。上層から下層までの間、緊張する場面が幾度もあったのだ。体中ががちがちに硬くなっているもおかしくなかった。

「レンさん！」  
しばらくそうしていると、やがてユイが戻ってくる。手にはいくつかの瓶があった。

「ちよつと強力ですけど、よく効く痛み止めがあるんです。使うような怪我をしてほしくないと思ってましたが……やっぱり使いますね」

ユイはそう言うと、救急箱からハサミを取り出し、レンの包帯をじよきじよきと切り開く。傷口は赤く染まっていたが、徐々に塞がりつつあった。

ユイは丁寧に傷口の周りを拭くと、手に持った瓶の口を開き、救急箱から注射器を取り出して瓶の中身を吸い上げる。

「痛み止めです。私も薬とかで酷い怪我をしたときとかに良く使います」

レンが止める間もなく、彼女は慣れた手付きで注射をする。思ったよりも痛みはなく、それどころか今までの痛みが嘘のように引いていく。

「痛覚を司る神経を一時的に麻痺させる薬です。麻酔と違って痛み  
の感覚のみを麻痺させるので、そんなに違和感とかも感じないと思  
います」

彼女の言う通り、傷口の裏を脈打つ血潮の熱さや、手で触れる触感  
などはいつもどおりで、傷の痛みだけは感じられない。

「ユイ、ありがとね」

「えへへへ、どういたしましてです」

ユイは礼を言われて嬉しそうに笑う。

「さて、準備もできたみたいだし、先に行かせた皆が待っているで  
しょうから行きましょう！」

リサは元気よく倉庫から飛び出す。レンとユイも後に続く。幸い、  
周囲に人影はなかった。

ユイの指示に従ってエレベーターの方へと向かう。彼女が言うには  
間もなくであるという。

やがてそれらしき扉の前に到着する。だが、そこには皆の姿はなか  
った。

「先に行っちゃったみたいですね」

扉の上の表示を見上げると、少しずつ光の点が線の上を横にスライ  
ドしていた。そして、線の端にはB20階（最下層）と書かれたプ  
レートが掲げられている。

「大丈夫ですよ。下まで行って安全だったらボタンを押してここに  
戻ってきてくれるようにしてくるって言ってましたから」

下まで降りて問題ないようであればボタンだけを押し、エレベータ  
ーを無人で上に上げる手筈となっている。このまましばらく待ち、  
誰も乗っていないエレベーターが戻ってくれば安全ということであ  
る。

光の点は最下層の位置でしばらくの間止まっていたが、やがて少し

ずつレン達がいる階層へと近付いてきた。

「大丈夫みたいですね」

やがて光の点はレン達がいる階で止まり、そして目の前の扉が開く。中には誰一人乗っておらず、無人のエレベーターが口を開いていた。

「……さ、乗りましょう」

リサが真っ先に歩き始める。その後をユイがついて歩く。だが、レンだけは足を踏み出すことができなかった。

「レン？」

「どうしました、レンさん？」

「……なんだか嫌な予感がするんだ」

背筋を駆け上がる悪寒のようなものがレンの体を襲う。それはまさに五感では表現し得ない奇妙な感覚。この先に進むなど、無意識のうちには体の中の何かが警告しているようにレンは感じられた。

「もしかすると、薬の副作用かもしれません。効果が強力な代わりに、体質によってはなんとなくぞわぞわしちゃう人がいるみたいです。免疫とかの関係なんですけど、しばらくすれば落ち着くから大丈夫ですよ」

ユイが心配そうに説明する。その説明を聞けば、なんとなくそんなようにも思えてきた。レンは薬の副作用だと思い込み、エレベーターへと乗り込んだ。

『ケイコクシタノニ』

エレベーターの閉まる瞬間、そんな言葉がどこからともなく聞こえてくる。

「……？ 誰か何か言った？」

音を立ててエレベーターが滑り出す。軽い振動とともに体が下へ落下していくようなエレベーター特有の感覚がこそばゆい。

「いえ、私は何も言ってません」

「私もよ。空耳か何かじゃない？」

しばらくの間耳を澄ませていたが、その声は二度と聞こえてくることはなかった。

だが、その声はつい最近、どこかで聞いたような感覚がするものだった。どこだろうかとレンは首を傾げながら記憶を辿る。

無機質な鉄の箱は順調に降下していたが、不意に動きを止める。表示された数字は13。最下層である20階ではない。

「おかしいですね……地下13階なんてボタン押したかな……？」  
かといって扉が開くわけでもなく、エレベーターは宙ぶらりの状態で停止する。

「じゅう……さん？」

警告の鐘の音が鳴る。

「13とか不吉ね……」

そんなオカルト的な意味ではない。

もつと確信めいた、それでいて直感的な感覚。

記憶の中を必死に漁り、“僕”が言っていた言葉を思い出す。

『キーポイントのヒントは与えたでしょ？』

キャンプの日にうたたねをしていた時の記憶が蘇る。

そのときの状況と、今の現状は酷似している。

「ッ！」

レンは扉を見た。ここは13階。彼の予測が正しければ、その準備は着々と行われているはずである。となれば、この扉から外へ出ることはできない。

「ユイ！ このエレベーターから外には出られないの！？」

「え、ええ！？ い、一体なんですか！？」

「いいから早く！ このままだと危ない！」

「扉をこじ開けるってのは……」

「それはダメ！ 他に……上か下に出る方法は……？」

「えっと……上の救出口か、点検用の下のハッチから……。でも、上の救出口は外からボルトで固定されていますし……」

「じゃあ下の点検用のハッチだ！」

レンはハッチにかじりついた。だが、それも外側から固定されているのか、どんなに力を込めても開く様子はなかった。



「これも点検用だから中からは……そもそも、エレベーターは緊急時でも、無理やり中から出ようとすると危険だから開かないようになってるんです」

「こ、このままじゃ危ない！ 説明はできないけど、とにかくヤバイいんだよ！」

リサはしばらく心配そうにレンを見ていたが、やがて口を開いた。

「レンには……何かわからないけど、とにかくわかるのよね。ねえユイ、何か方法は……」

二人の視線がユイへと集中する。ユイはしばらくの間考え込んでいたようだったが、やがて意を決したのか、うんと頷いて腰のポーチを探り始める。

「わかりました。では、二人とも下がっててください」

しばらくの間複数の種類の液体を混合していたが、やがて完成したのかそれを床の隙間に流し込む。すると煙がもうもつと上がり、視界が一瞬奪われた。

ユイはナイフを取り出すと、てこの原理で跳ね戸を開く。大きな音とともにぼつかりとした穴が口を開いた。覗き込んでも底の方は暗くて見ることはできない。

「まさかレン……本気でやるの？」

「僕だつて自分のことを正気かどうか疑いたくなるよ。でも、やらない後悔よりやってする後悔だよ」

レンはそう告げると穴から半身を出し、近くに下がるワイヤーを掴んでぶら下がった。

「早く来て！」

レンは下の階の扉に飛びつくと、力を込めて扉を開こうとする。

リサもワイヤーにしがみつくと、落ちないようにしっかりと握って壁に張り付いた。

「ユイも！」

しかし、ユイは顔を覗かせるだけで降りようとしなかった。

「わ、わわわわ私……ここ、高所恐怖症なんです……」

見るとその表情は真っ青だった。点検口から顔を覗かせるだけでもはや限界のようだった。

レンはともかく扉を開けることを先にする。鞆からペンを取り出すと、ペン先が碎けるほどの勢いで扉の間に差し込み、無理やり扉をこじ開ける。

みしみしという音が響き、次いでペンは真ん中でぽきりと折れてしまったが、わずかに扉が開く。レンはそこに指つつこむと、一気に開いた。

扉が開くと、リサはワイヤーにぶら下がりながら壁を蹴り、開いた扉の方へと飛び込んだ。

レンはユイの方へと手を伸ばすと、もう一度叫んだ。

「そこにいると……危ないんだ！」

「で、でも……」

今にも泣き出してしまいそうな表情を浮かべながらユイは首を横に振る。

「わかった。じゃあ僕が受け止めるよ」

そう言うと、レンは足にワイヤーを巻きつけると、両手を離して点検口の下にぶら下がる。

両手を大きく広げ、レンは見上げた。

「絶対に受け止める。安心して降りてきて」

「ちょっとレン！？ もし本当に落ちてきたらアンタ、下手すりゃ墜落するわよ！？」

しかし、レンはリサの言葉に耳を貸さず、ユイのこことを見つめる。

しばらくの間躊躇していたが、ようやく覚悟を決めたのかユイは足だけ下に下す。

レンはユイが降りやすいようにワイヤーを束ねる。そして、足場を組んでやる。

「ぜ、ぜ絶対を受け止めてくださいね！？」

ユイはそう言うと、ワイヤーに足をかけることもせず、両の手を離した。

瞬間、重力に捉われて落下するユイ。突然の衝撃に、レンは思わずバランスを崩す。

「うわっ!?!」

「レン!?!」

徐々に彼の体は傾き、そして180度回転する。

リサが扉の方へと駆け寄ったとき、すでにそこには彼の顔はなかった。

「レンーッ! わ、私はどうすれば……!?!」

「い、いやあああああああッ!! こ、怖い怖い怖いッ!」

「ゆ、ユイ!! 暴れないでっ! 無理かもしれないけど落ち着いて!」

レンの体は逆向きになってエレベーターの下方で揺れていた。

足だけが辛うじてワイヤーに絡まっていてなんとか落下を免れているものの、落下するのは時間の問題だった。

いや、それ以上に大きな問題がある。レンが宙吊りになってぶら下がっており、そしてその手にはユイの手がしっかりと握られていた。つまり、レンがワイヤーに絡まった状態でなんとかぶら下がり、そしてユイはその下方で手のみが掴まれた状態で宙吊り状態となり、遙か下方に暗闇がぼっかりと口を開いて待っている。

高所恐怖症の人間が、命綱もなしに手だけ掴まれた状態で宙吊りになって落ち着けと言われて落ち着くことができるだろうか。

ユイは泣き叫びながらぼろぼろと涙と鼻水をこぼし、生涯最大の恐怖と戦い続けていた。

「リサ! 近くに階段とかない!?!」

「うん、あるけど……」

「僕はこの通り動けないから、下の階の扉をこじ開けてほしいんだ!」

「わ、わかったわ!」

リサはすぐに近くの階段で下の階へと向かう。

こうした危機的状況にあっても、レンの中で鳴り響いていた警鐘は



レンもその場に崩れ落ち、そのまま壁に寄りかかった。

「はあ……はあ……まったく、死ぬかと思ったわよ」

「それは僕もだよ」

すでに魂が半分旅立ちかけているユイ。放心状態で、もはや反応はなく、白目を向いて倒れていた。

「ユイなんて半分死んでるわね。寿命が一年は縮まったんじゃないかしら」

「まあ死ぬよりかはマシだと思うけど……」

ようやく飛び出した魂が帰ってきたのか、再びぼろぼろと涙をこぼして泣き始める。

「れ、れんざんぐ……ご、ごわがっただですう……」

鼻水をすすりながらレンに抱きついて泣きじゃくるユイ。数秒間の間とはいえ宙に吊られ、数十センチの距離だが実際に落下したのだから怖いのは当たり前だろう。

レンはそんなユイの頭を優しく撫でる。

そんなレンの様子にむっとしながらも、リサは不思議そうに尋ねた。「ところで、なんでこんな命懸けの大脱出ゲームなんてしたのかしら？ スタントでもやりたかったの？ 言っとくけど、これはアクション映画でもなんでもなくて、ただ私達は安全に脱出できれば見せ場もなんにももらえないのよ？ 納得行く説明をしてもらえないんでしょうね……？」

恐ろしい剣幕で迫る利さにレンは困ったような表情を浮かべる。

「え、えつと……それは……」

「まさか、なんとなくとかじゃないわよ……」

そのとき、何か金属が跳ねるような音が鳴り響く。そして、上方から何か煙のようなものが降ってきた。

「けほつこほつ！ こ、これって……催涙スプレーとかってやつじゃ……」

「いないぞ！ どこに行った!？」

上方から大勢の大人達の声が響く。それはレンが視た通りだった。

「逃げよう！ 早く下の方に行くんだ！」

その声でリサは飛び起きる。しかし、ユイだけは未だ立ち上がることができなかつた。

「ユイ！ 早くしないと捕まるわよッ！」

「こ、腰が……腰が抜けちゃって……」

「ッ！」

レンは小さく舌打ちすると、ユイの体を抱き上げた。その突然の行為にユイは頬を真っ赤に染める。

「こ、これってお姫ひゃうッ!？」

「リサ！ 早く階段を降りて！」

レンはユイの体をだき抱えたまま走る。体格の小さい少女の体を抱えたまま走ることなど、火事場の馬鹿力を発揮している彼には造作もないことだった。

リサはしばらくぼーっとしていたが、やがて我に返ったのかレンの後を追って階段を駆け下りる。

エレベーターが停止したのが13階、リサが降りたのが14階、そしてレンとユイが降りたのが15階。つまり、あと5階分下に降りなければならぬ計算となる。

エレベーターの点検ハッチが開いていることに気付いたのか、上から沢山の足音が響く。大勢の人間が三人を追いかけて走っていた。

「な、なんで見つかったのよおーっ!？」

「わかんないよ！ もしかすると、ウィルとアリスが逃げ出しているのが見つかったのかもしれない！」

やがて20階と書かれたプレートがレンの目に飛び込んでくる。レンは20階の扉を蹴り開けて飛び込んだ。

そこには手持ち無沙汰にしていたアラン達の姿があった。

「な、お前らなんで階段から!? それにお姫様……」

「いいから走って！ 追いかけてらるる！」

アランは真剣な表情を浮かべて走り出す。その後には五人は続く。

高い天井の通路がどこまでも伸びる。通路内には沢山の荷物が積み

上げられ、天井付近まで積みあがっている山さえあった。

「止まれっ！」

火薬の爆ぜる音が後方から鳴り響く。おそらく、真正銘の銃器だろう。レン達は角を曲がったり、荷物を崩したりしながら追撃を交わしていた。

「まだ着かないの!？」

「うるせえ! もう少しだ!」

横に積み上げられた荷物を邪魔そうに避け、時には崩しながら逃げる。もつとも、それが後続に続く相手にも障害物となっているようで、それだけではなく射撃を遮る壁にもなってくれているようだった。

「頭を撃て! 所長命令だ! 体を傷付けるんじゃないぞ!」

後ろから射殺を命じる声が聞こえてくる。六人はもはや死に物狂いだった。

「アランッ!」

前方から二人の銃を持った男が迫る。おそらく先回りしていた者達だろう。アランは腰からライターを引き抜くと、彼らの眼前へ構えた。

「っ!？」

「クソ!? この餓、鬼銃を持って……」

逆の手でスタンガンを持つと、通路へと身を隠した二人に直接叩き込む。二人は手から武器を落としてその場に崩れ落ちた。ウィルは倒れた二人からめばしい武器などの装備を奪い取り、そのまま走る。

「ここだ! この部屋に 転移装置がある!」

未だ実験段階と言われている転移装置。この島から脱出できる唯一にして、最悪の手段だった。

アランは一つの扉の前で立ち止まると、スライド式のドアを引いた。だが、扉はがっちり鍵でロックされ、軋みもしなかった。

「クソ! 鍵がかかってやがる!」

「来たぞ!」

屈強な男達が銃器を抱えて追いかけてくる。ウィルは奪い取った銃器を構えると、遠慮することなく引き金を引いた。

銃口から火花が吹き出し、膺物ではない重い衝撃がウィルの腕の中で爆ぜる。ウィルが銃を持っていることがわかると、男達は通路や物陰に隠れ、銃口だけを出して応戦する。

「俺らはどこの映画の世界に迷い込んだわけ!?」

「知らないよ! それよりどうするの!？」

「あの……その……レンさん? そろそろ下ろしてもらっても……」  
レンはユイの体をそつと下ろす。まだあまり調子がよろしくないのか二、三步ふらついたが、さっそくポーチから薬品を取り出し、混合し始める。

「ここの鍵は耐食性の高い銀や硬度が高い鋼鉄で出来ています。だから開けるのに少々時間が……」

「具体的な時間は?」

「わかりませんが、一分以上はかかるかと……」

ウィルは少しでも相手の方に銃口が覗くと、そこへ向けてフルオートで引き金を引いた。だが、それでも相手からはやはり弾丸が飛んでくる。レンとアランは少しでも荷物をかき集め、バリケードを築いた。

「ウィル! 一丁貸してください!」

「え……?」

しばらくの間、ウィルが銃を扱う様子を見ていたアリスだったが、ウィルが肩にかけていたもう一丁の銃を奪い取ると、狙いを定めて引き金を引き絞った。

「ウィル、あなたは無駄が多すぎます! 弾がなくなったら私達、終わりですよ!？」

アリスは抱えていた二つの鞆のうち、一つをひっくり返す。中からはごろごろと弾丸が詰まった箱や、数種類の武器が転がり出てきた。

「アリス……いつの間に!？」

「さっきの人達から奪い取りました。レンさん達はバリケードを!



挟まれると厄介です！ 通路の反対側からは絶対に来れないように荷物の山を崩しておいてください！」

レンとアラン、リサはアリス達が応戦している側とは反対側の通路に積み上げられている荷物の山を思い切り崩した。これでこちら側からレン達のいる場所へ攻撃することはできない。

その瞬間、弾丸がレンのすぐ傍を掠めた。瞬間、彼の肩から鮮血が吹き出す。

「うっ！？」

「レン！？」

ベルトが切れて鞆が落下する。レンは肩を押さえてうずくまった。

「レンさん！？」

薬を調べていたユイも思わず手を止めて駆け寄った。だが、レンは鋭く叫ぶ。

「ユイは鍵をお願い！ 僕のことはいいいから！」

「で、でも……」

リサはユイから救急箱を引っ手繰ると、強く叱責した。

「アンタにはアンタにしかできないことがあるでしょう！ いいからアンタは早く鍵開けをしなさい！」

「は、はい！」

リサの凄むような剣幕に圧され、ユイは再び薬品の調合を再開する。救急箱の中には様々な薬品や、用途のわからない道具が詰まっていた。恐らく実験中の様々な事故に対応するための薬品や道具なのだろう。リサはそういうものを避けてともかく消毒液と包帯、それからハサミを取り出す。

「レン、傷口見せて」

レンの手をどけると、そこから血があふれ出す。傷を見る限り、えぐるように掠っただけのようである。どうやら鞆を肩から提げているために、ベルトに当たって弾が逸れたようだった。ともかく弾丸が直撃するようなことはなかったようで、リサは安堵する。

後から後から血があふれ出してくるため、ともかく傷口周りや肩を

強く圧迫する。もはや消毒などしている場合ではなかった。素早くガーゼを当てて包帯を巻きつける。みるみるうちにガーゼや包帯は赤く染まっていったが、それにもかかわらずリサは強く強く包帯を巻き、なんとか止血しようとする。

「アラン！ 押さえるの手伝って！」

リサはアランに助けを求める。アランはすぐに頷いてリサの傍にしゃがみこんだ。

「うわっ！？ た、弾が出ない!?!」

敵側の方で驚くような声上がる。

「ジャムっただけだ！ それくらいなんとかしろ！」

「な、なんとかって……」

どうやら相手は銃の扱いに手練れているというわけでもないようだ。つた。

もちろんウィルとアリスも慣れていないわけではない。もはや勘のみで銃を扱い、映画やゲームなどで知りえた知識だけで引き金を絞る。「弾が切れた!?!」

「ここは私に任せてください！」

ウィルが弾を込めている間、アリスはしっかりと銃を体に密着させ、壁に体を預けてフルオート斉射する。こうして威嚇することによって、相手に攻撃させる気力を削ぐ作戦だった。

「く、クソ!?! なんでガキどもがこんなことができるんだ!?!」

敵側からも驚きの声上がる。両者に銃火器に関する知識の深さにはほとんど変わりはなかった。数こそ違いはあれ、お互い経験も知識もない分、追い詰められている側は死に物狂いで普段は眠っている力を発揮する。

「アリス！ 弾込め終わったよ！」

「じゃあしばらくお願いします！」

ウィルが体を出して三点バースト射撃で威嚇する。その間アリスは物陰に隠れて弾丸を補給する。無論、きちんとやり方を習ったことがあるわけではない。ほとんど映画や漫画などで得た知識の流用で

ある。もちろん素早くとはいかない。

それでもなんとか弾を込めると、再び引き金を引いて応戦する。

「できました！」

ようやく薬品の調合が終了したのか、ユイが嬉しそうな声をあげる。フラスコの口を鍵穴につけると、それを少しずつ流し込む。

「よっしゃ！ あともう少しだ！」

「頑張りましょう！」

薬が完成した朗報に五人は喜ぶ。

リサはレンの肩を強く圧迫して止血を続けていた。そのおかげか、にじみ出る血の量は減っていた。

レンは肩の痛みで顔を歪めていたものの、薬が完成したと聞いて笑みを浮かべる。

ウィルは相手に撃たせまいと威嚇射撃を繰り返し、相手を傷つけることなく制圧しつつ、余裕を見せ始める。

アリスは的確な精密射撃とフルオートを使い分けて、状況に応じた攻撃を繰り返しながらも、扉の方を嬉しそうに見る。

しかし、薬の完成の報せは何もいいことだけを彼らに運んだわけではなかった。

喜びというものは、希望と同時にわずかな気の緩みを引き起こす。

そのせいで、遠距離の方で構えられたライフルの存在に気が付かなくとも誰が責められるだろうか。

レーザーサイトは少しずつ移動しながら狙いを定める。

その引き金が絞られる一瞬直前、アリスはその赤い光点の存在に気付いた。そして、自らの身も顧みずに飛び込んだ。

なぜなら……その標準は最愛の人物の眉間へぴったりと合わせられていたからだった。

数多くの銃声が響く中、一際大きな銃声が響く。

全てが雑音となる。



「行つて……くださ……い……」

「置いて行けるわけじゃないじゃない！」

「大丈夫……夫……ですか……ら」

「大丈夫なわけないよ！」

しかし、アリスはそれでも扉の向こうへ進むよう懇願する。

それを見かねたアランはレンとリサ、そしてユイへと叫ぶ。

「お前ら行け！ 後は……俺がどうにかする」

「アラン！？ 君まで何を……」

アランはアリスが持っていた銃を担ぎ、弾を込める。

「このままじゃウイルの銃が弾切れを起こした瞬間に突撃されて一

発でお陀仏だ！ 誰かがもう一人……やらないといけないんだよ！」

「僕はそんなの嫌だよ！」

「私だつて嫌よ！」

「うるせえッ！ アリスは何をした？ 何を頼んだ？ 行つてくれ

と言つただろ！？ お前らはその思いを無駄にするのかッ！？」

「だからつて僕が行くことないでしょ！？」

「私だつて……」

「てめえらが行かないで誰が行くんだよ！？ リサはレンと一緒にじ

やないと嫌なんじゃなかったのか！？ レンがここで逝つちまった

ら後悔しないのか！？ 何としてでも引きずつて行け！」

アランはリサに怒号する。

リサがここまで来た理由……それはただレンと一緒にいたかつたか

らだった。

その思いだけでここまで来たのだ。レンが残ると言えば残る以外の

選択肢があるだろうか。

「レン！ てめえが行かなきゃリサはてこでも動かねえんだよ！

お前の命はリサとセットなんだよ！ わかつてんのか！？」

「それは……」

レンはそこで口籠る。

レンが命を捨てて仲間を助けるといふのなら、リサも命を捨ててレ

ンに従うだろう。

それに、数分前に彼女が言っていたではないか。最後まで責任を取れ、と。

レンは奥歯が砕けるほど噛み絞めて、そしてアランの体を抱きしめた。

「絶対に……死んじゃダメだからね」

「おう」

アランもレンの背中に手を回す。

リサも今だけは茶化すことはしなかった。

二人の抱擁は一瞬で終わった。レンはリサの手を引いて扉の中へと飛び込む。

中には大掛かりなカプセルのような装置と、それにつながったコンピュータ端末でセットになった巨大な装置が設置されていた。

「ユイ、使い方わかる？」

「大丈夫です。学生時代に興味があつて、色々な実験に使ったことがあります」

ユイは装置の電源を入れると様々なデータを入力したり、起動のための準備を行う。

そのとき、その部屋にセットされていた電話がけたたましい音を立てて鳴り出した。突然の音にユイは少し体をすくませる。

「レン、どうする……？」

レンは黙って電話に近付くと、モニターをオンにした。回線が繋がり、カメラが起動する。マイクは周囲の音を拾い始め、そしてテレビ電話がスタートする。

「画面に映ったのはミシエルだった。」

「先生!？」

画面の中のミシエルは悲しそうにため息をつき、本当に残念そうな表情を浮かべる。

『レン、それにリサ。あとはアランとウィル、それからアリスもです。ね。本当に、あなた達には失望しました』

「先生は……先生は全部知っていたんですか……？」

『当然。私はこの研究所の所長であり、クローンプロジェクトを管理する人間ですから。クローンプロジェクトの子供達の成長を見守り、保護することが私の役目。このような事態になったのは私の落ち度でした。本当に、残念ですね』

ミシエルはハンカチで目元を拭い去る。そして、レン達が思いも寄らない人物の名を口に出した。

『それにユイ。あなたにも私は失望しました』

「しし、シスターヴァ局長……」

『五“体”もの商品が無駄にしようとするとは……どれだけの損失だと思っているのですか？ クローンプロジェクト、プロジェクトリーダーであるサクラギユイがこんな暴挙に出るとは思いませんでした』

彼女の肩書きにレンとリサは息を飲む。

ユイはデータの入力の手を止めて、まっすぐにカメラを見据える。

「わ……私はこんな……こんな人の命を商品として扱うようなプロジェクトを推し進める気はありません！ ただいまより、プロジェクトリーダーを辞退させていただきます！」

『言われなくてもそのつもりです。あなたには本当に失望しました。一ヶ月間の謹慎処分を言い渡します』

「その前に一つだけ尋ねてもいいですか、所長？」

しばらくの間彼女は考え込んでいたが、やがて顔を上げて言った。

『どうぞ、言って御覧なさい』

「どうしてレンさん達を殺そうとしたんですか？」

しばらくの間ミシエルはぼかんとしていたが、やがて大きな声で笑い始める。

『あはははは！ 当然でしょう？ 無駄にする位なら、せめて臓器だけでも抜いてお金にするべきじゃないの！』

ユイは失意を表情に浮かべてうつむく。だが、すぐに顔を上げてミシエルに言い放つ。

「プロジェクトから抜けることができず、本当によかったです」

そう言ったユイの表情は軽蔑を通り越して、ミシエルに対する強い憐れみの感情に満ちていた。

『その顔、気に入らないわね』

「あなたが哀れなんです。人間としての心を失い、物事をお金にしか換算できないあなたという人間が可哀想でしょうがないんです」  
ユイはそう言い放つと、ミシエルに背を向けた。そして、レン達の方へと振り返る。

「噂だなんて言っておめんなさい。あんな……綺麗な事を言っておめんなさい。私が……私がプロジェクトを押し進める……一番天辺の人間だったんです」

「なんでなのよ……？ どうしてアンタなのよ……！」

『彼女は優秀な遺伝子工学の研究者だったわ。大学で様々な発見と開発を行い、数多くの特許を取得し……まさに天才ね。私達はその実力を買って彼女を雇ったの。でも、まったくの無駄……いえ、それ以上ね』

ユイはぼろぼろと大粒の涙をこぼしながら心の底から恐れるように言った。

「こ、怖かったです……！ あなた達を生み出した私達を恨んでるんじゃないかって……常々恐れながら研究を続けていたんです……。毎日、毎日毎日の通勤のリニアでもいつか刺されるんじゃないかって恐れてたんです！ そして私が生み出したクローンの一人と出会った！ 彼はとても優しく、困っている私を助けてくれて……その優しさが怖かった！ あなた達を生み出してしまった私に対するその優しさが……途方もない憎しみの裏返しじゃないかって怖かった！ それでも、彼は優しく……お話しているうちに気付いたんです。いつも無機質な研究を続ける私に、彼は潤いを与えてくれているって……気付いたんです……」

自責の念、後悔の念。そうだったものが彼女の胸のうちからあふれ出ていく。それはダムが壊れた湖のように思いを吐き出し、感情の



洪水となって氾濫する。

「いつも優しくかった彼が怖かった……。私があなただを何のために生み出したかを知ったら、私はどうなってしまうのか……。その先を想像すると夜も眠れなかった！　そして今日、ついに真実を知ったあなたが私の研究室を訪れた！　もう、胸の中ははちきれそうになって、頭の中真っ白に……。！？」

次の瞬間、ユイの小さな体はレンの胸の中にあつた。

レンはユイの体を優しく抱きしめ、とても嬉しそうな表情を浮かべて囁いた。

「ありがとう」

ユイは恐ろしさで閉じていた目をゆっくり開く。彼女には目の前の少年が何を言っているのか、理解することができなかった。

「僕を生み出してくれて、僕はユイに感謝しているよ。一年間、その中でちゃんとした記憶が残っているのは数日間しかないかもしれない。でも、僕はその数日間、とても幸せだった。リサやアラン、ウィルにアリス、それにユイ。皆と過ごした毎日はとても貴重な宝物みたいだった。そんな宝物を享受する機会を与えてくれてありがとう」

そう言つて、レンはユイの体をぎゅっと抱きしめる。

ユイはしばらく騒然としていたが、やがて目を閉わせ、そして泣き出してしまつた。

「う……。ぐすつ。ひっく……。そんな……。そんな、かんじゃされるよ うなごじや……。」

「言うなれば、ユイは僕らにとってのお母さんなんだよ？　お母さんに感謝しない子供がどこにいると思つ？」

ユイは目の前の大きな息子の体を小さな両手で必死に包み込み、抱きしめた。

「ごんな……。ひっく……。ごんなおがーさんでもゆるじでくれませんが

……？」

レンはゆっくりと頷いた。

「う……ひっく……ぐず……う、うええええん！」

ユイはとても大きな声をあげて泣き崩れた。

『所詮はクローン、馬鹿馬鹿しいったら……』

「うるさいババア、とつとと失せる」

リサはテレビ電話の画面に向かって近くにあった椅子をぶん投げる。椅子はテレビ電話の画面を叩き割り、そのまま端末ごと破壊した。

ユイは最後のデータを入力し、転移装置を起動する。

「これで……アメリカのカリフォルニア州の都市跡に飛べるはずで  
す。元々は都市があつた場所なんですけど……機会兵の攻撃によつ  
て壊滅してしまつた都市です。住んでいた人達は別の場所に避難し  
てしまつて今では人は住んでいないんでしょうけど、地下シエルタ  
ーに非常用食料などが残っているでしょうし、通信装置も生きてい  
るかもしれません。本当はニューヨークとかの都心部に飛ばせたら  
いいんですけど……」

「失敗したとき、たとえば僕の体が爆弾みたいになつたりしたら大  
惨事になるってことでしょ？」

ユイは申し訳なさそうに頷く。そんなユイの頭をレンは撫でた。

「大丈夫、きつと大丈夫だよ」

レンは大丈夫と二度繰り返し返す。それはユイに対して言い聞かせると  
同時に、自分に対しても大丈夫と言いたかつたからかもしれない。

「……転移装置の成功率は今のところ50%くらいと言われていま  
す。25%くらいは変質あるいは位置ズレを起こし、残りの25%  
は転移の際に通る亜空間に取り残されます」

「知ってる。でも、きつと大丈夫さ。また……またユイとも会える  
よ」

ユイはやや頬を染めて恥ずかしそうに横を向く。

「それじゃあ……カプセルに入ってください」

レンとリサはカプセルの扉を開き、その中へと入る。

「あ、レンさん！」

レンはユイに呼び止められ、振り返った。

「なんだい？」

「ちょっとしゃがんでもらってもいいですか？」

レンは言われた通り、ユイの視線の高さまで腰を折る。

「失礼しますっ！」

ユイはレンの唇に自分のそれを重ねた。

接吻はほんの一瞬で終わり、ユイは耳まで赤く染めて入力端末の前まで駆ける。

レンはしばらくの間、その場で茫然としていた。だが、リサに赤く染まった耳を引っ張られてカプセルの中に引きずり込まれる。

「いた！ いたたたたた！ り、リサ！？」

「アンタが馬鹿なことやってるからでしょ！ まったくもうッ！」  
リサはそう文句を言いつつも、しっかりとレンの手を握る。

レンも、リサの手を握る手に力を込める。絶対に何があっても離さないように、と。

ユイは最後の実行ボタンを押した。

カプセル内に徐々に光が集まっていく。ユイはカプセルに向けて大きく手を振った。

レンもリサの手を握っている方とは逆の手で手を振り返そうとしたが、一気に視界が崩れていく。

まず重力から解放されて体が浮き上がり、次に五感が消失する。

そして、さらには自分自身の存在すら希薄になっていく、最後には意識すらも薄れていく。

亜空間へと引きずり込まれるにつれ、レンの感覚は徐々に消えていく。

カプセル内は最後、一際強い光に包まれると、わずかな光の粒子を残して空気すらも含む全てが消失した。



#### 第4章 The door bound to Tomorrow (後書き)

ついに島から脱出する転移装置を起動したレン達。

傷付いた仲間から託された二人の命。

果たしてその転移は成功するのか、はたまた失敗するのか……。

次章、最終章 Two shadows

## 最終章 Two shadows

最終章 Two shadows

視界は一面の白だった。

真っ白な白だった。

どこまでも続く白だった。

どこまでも、どこまでも穢れのない白だけが広がっていた。

僕はただ一人でそこに浮いていて、目を開けているのか閉じているのか、起きているのか眠っているのか、生きているのか死んでいるのか、それすらもわからない白の中をただ、どこかに向かって泳いでいた。

『君はよく台本を演じきつたね』

どこからか声が聞こえてくる。その、褒めるような口調の声は僕の耳に快く響く。

『君はよくやった。実によくやった。“僕”が言っただ、間違いないよ』

「君は……誰？」

僕は彼に問い掛ける。彼は残念そうに肩をすくめると、寂しげな口調で言った。

『僕は“僕”さ。それ以外の何者でもないよ。もう忘れちゃったのかい？』

「“僕”……？」

その声の主はゆっくりと首を縦に振った。

『ま、こんな世界にいるんだもの。普段から不安定な世界に住んでいる“僕”ならまだしも、君みたいに安定な世界に住んでいる人には辛いかもしれないね』

「安定した……世界？」

『でも安心していいよ。こんな旅はすぐに終わる。現実世界で言えば1秒にも満たないかな。まあ、君にはいくらか長く感じられるけ

ど、それも直に終わる』

彼は僕の向かう先をまぶしそうに見据える。

『ほら、君が帰るべき世界が見えてきた』

彼が言う先には、どこか見覚えのある懐かしい世界。恋しくて、恋しくて仕方がない懐かしい世界。

『さあ、行くんだ。君には帰るべき世界がある。そこはとても居心地が良くて、でもとても生き辛い場所。けれども君はそこで生きていかなきゃいけない。"僕"に"見える"台本がそうだからね』

始めは握りしめたこぶし程の大きさの窓が徐々に広がっていく。

それは徐々に広がっていき、やがては視界すべてを覆いつくし、白を塗りつぶしていく。

『頑張つてね、僕。まだまだ辛いことは山ほどあるけど、とりあえずは君は幸福を掴んだんだ。おめでとう』

レンは固い地面に叩きつけられる。

目を開くと、一面の砂と瓦礫が飛び込んでくる。

彼が起き上がった瞬間、胸をえぐり出したくなるような吐き気に襲われた。

「う、おええッ！」

口からは大量の胃液とわずかな夕食のかけらが吐き出される。

東の空にはちょうど太陽が顔を出した。つまり、朝である。

一通り胃液をまき散らし、やや気分がよくなったレンはふらふらと歩く。

……そこは、まさしく滅んでしまった都市だった。

斜めに傾いたビルの窓にガラスはなく、看板も砂埃で覆われて読むことができない。

あちこちに倒壊した建物や乗り捨てられた車が転がっている。レンは初めて自動車というものを目にした。

風が砂を巻き上げ、一瞬視界が覆われる。

再び視界が晴れたとき、彼はいつの間にか街路樹の下に立っていた。街は死しても植物だけは力強く生き残っていた。もともとマイル張りだったであろう歩道から何本かの背の高い木が生えていて、少しずつ、廃都を森へと変えようとしていた。

砂漠と森という正反対のものが同居しているこの奇妙な世界は、死と生という正反対のものをその中に混ぜこぜにして存在していた。歩いた距離はわずかだったが、レンは酷い疲れを感じて木によりかかる。

そのとき、彼には何かが物足りないということに気付いた。

手から伝わってきていたはずの温もりはいつの間にか砂にまみれ、冷たく乾いたものになっていた。

レンは立ち上がったが、同時に既視感を感じて再び座り込む。

「僕は……この世界を知っている」

何日前のことだろうか。時間感覚もめちやくちやになってしまった彼には、それがいつのことだったか思い出すことができなかった。だが、これは確実にどこかで見たことのある風景。デジャビュなんてものではない。これは、確実に彼の中に刻み込まれた世界。

「……リサ？」

自然に彼の口が一人の少女の名を紡ぐ。それは彼がとても大事にしていた存在。いついかなるときも共に過ごし、片時も離れることのない大切な人。辺りを見回すも、この乾いた大地の上にその姿を見つけたことは叶わなかった。

彼は知っていた。彼女がどうしたのか。彼の記憶がそれを証明していた。

乾いた世界に一滴の滴が降り落ちる。砂まみれの葉が跡を隠し、再び元の姿を取り戻す。

それでも、乾燥した大地に温かな水滴が降り注ぎ、やがて吸い込み切れなくなったそれは小さな水たまりを作り出す。

「そんな……う、嘘だ……」

声を震わせながら、這うようにして彼女の姿を探す。だが、全身の



酷い疲れが彼を一步の距離も動くことを許さなかった。

口からは疑問の音が漏れる。なぜ、どうして。そんな言葉が波紋のように広がっていき、答える者もないまま消えていく。

「ずっと……握っていたのに……？」

レンは自らの手のひらを見る。確かにしっかりと彼女の手を握っていたはずだった。だが、そこに彼女の手はなく、砂にまみれた汚い手しかなかった。

レンは再び木に寄りかかると、そこで初めて涙を拭う。

「なんで……どうして……」

拭っても拭っても溢れてくる涙。後悔とも怒りとも違う感情。言うなれば、無力感。

自分一人の力ではどうすることもできない。無力な自分に対する憤り。そして、運命に対する憤り。

どうすることもできないという事実に対する……強い憤り。

「そんなの……嫌だ……」

いなくなってから初めて気付く感情。レンは……彼女のことをどう思っていたのか。

恋愛？ それとも友情？ まさかの損得勘定？

「違う……」

そんな簡単な言葉では言い表せない、そういう感情。

両手を大地へと投げ出し、彼は崩れるように倒れ伏す。手の平を中心に、真っ赤な軌跡が描かれ、先ほどのものとは打って変わって大きな染みを作り出す。

「痛……」

手の平は真っ赤に濡れていた。どうやら、落ちていたガラスの破片で手を切ってしまったようだった。だが、それがどうしたのだろうか。彼は自身の体がどれだけ傷付こうと、もはやそんなことに興味はなかった。

ようやく血塗れのガラスの破片を見つけ出し、摘み上げてみる。乾いた光を受けて輝くそれは、鋭く尖っていて、肌を押し当てるだけ

でよく切れそうだった。

「どうせもう、一人じゃどうすることもできない。それに……僕は……」

しばらくの間、破片を指先で弄んでいたが、それももう飽きてしまった。

彼は首筋にそれを優しく押し当てる。体の内側では、力強く命の鼓動が鳴り響き、体中を生命のエネルギーが流れて巡っていた。

だが、いくら体が強く生きていても、もはや心が壊れてしまったのだ。壊れた心に体は必要ない。だから、そんな鼓動に意味はない。彼はゆつくりと目を閉じる。偽りの思い出もたくさんあるかもしれない。だが、少なくとも、“あの”思い出だけは正真正銘の思い出であることは間違いない。

「楽しかったなあ……あの頃は皆で馬鹿やって、ふざけあって、彼女ともたくさん笑い合ってた……」

駆け巡る思い出。一つ一つの映像が目の前で繰り広げられているように思い出され、そして流れるように消えていく。

最後に思い浮かんだのは彼女の顔。生まれたときから一緒に過ごしてきた彼女との関係は一言で言い表すことなどできるはずがない。だが……一つだけ確実に言えることがあった。

「僕はリサのことが……大好きだった……」

それだけは、地獄の閻魔様の前でも堂々と胸を張って言えるだろう。嘘を言うなら舌を引き抜くぞと脅されても、一字一句違わずに何度でも言ってみせられる言葉。レンにとってのリサはこの一言で言い表すことができる。

「誰が誰を好きだった？」

「……え？」

突如、樹上より落下してくる一人の少女。当然のごとく、レンは下敷きとなる。

「あいたたたた……」

「り……りサ……？」

彼を文字通り尻の下に敷いている少女。それは間違いなくリサだった。

「まったく、なんで木の上なんか飛ぶすのよ。髪が乱れちゃったじゃないの」

レンの上から降りると、髪の毛にまとわりついている木の葉を払いのけながら文句を言うリサ。それはまさしく、普段から見慣れている、レンが大好きな少女の姿だった。

「アンタも何ぼーとしちゃってるのよ。ちょっと髪についてる葉っぱを取ってくれな……」

「リサッ！」

レンはリサの体を力いっぱい抱きしめる。リサは突然の抱擁に戸惑いと恥ずかしさを覚える。

「ちょ、ちょっとレン!？」

「無事で……よかった……」

「……ん、アンタもね……」

短いようで長い抱擁からようやくリサは解放されると、レンの目許の涙を拭ってやる。

「うふふ、私が居なくて泣いちゃった？ 寂しくなって泣いちゃった？」

「な、泣いてなんか……」

「僕はリサのことが……大好きだった……」

レンの真似をして恥ずかしげなセリフを言うリサ。それを聞いてレンは頭から湯気が出るほど真っ赤になる。

「ぶぶ、アンタってホント可愛いヤツね。からがいがあって面白いわ」

「うっ……だって、リサが転移に失敗しちゃったのかと思って……」

「私がそんな簡単に死ぬと思う？ アンタが生きてる限り、地の果てまで追いかけて行って……」

そこでリサはレンの頭を抱いて口付けを交わす。突然の接吻にさら

に頬を赤く染めるレン。

「こうしてやるわよ」

リサもそう言いながら、頬を真っ赤に染める。その表情は恥ずかしさと嬉しさが入り混じったような笑顔。

レンも始めは慌てるような戸惑いの表情を浮かべていたが、やがてにっこりと笑顔を作る。

「おや……?」

「あれ……?」

「ん?」

「ここは?」

「あら?」

瞬間、レンの頭上から何かが降ってくる。その何かによって泥の像のように崩れていく。

「いたたた……」

「痛いです……」

「もう少し出る場所選んでほしいな……」

突如降ってきた三人はよろよろとしながら立ち上がる。

「あ、やべえ……吐き気が」

「私も……です……」

「こっちも……」

そのままどこかへと歩いて行ってしまふ三人。後には圧殺されたレンだけが残った。

「う……勝手に……殺さないで……よ」

そのままばかりと倒れるレン。リサは突然の事態に戸惑いつつも、慌ててレンの元へと駆け寄る。

「れ、レン!? アンタ、大丈夫!？」

「だい……じょう……ガク……」

「レニー! あーん、死なないでー!」

ゆさゆさとレンの骸を揺らすリサ。そんな大騒ぎに再び集まってくる三人。

「どうした？」

「どうしました？」

「何かあったの？」

「あ、アンタらがいきなり降ってくるから……レンが死んじゃっ……」

「だから勝手に殺さないでっっていつてるでしょー！」

突如復活するレン。黄泉の国にまで顔を出しに行っていたようだが、再び三途の川の渡し守に諭されて戻ってきたようだった。

「お、レン。よう」

「よっじゃないでしょ！？ いきなり上から降ってきて……」

レンはうつむいて、体を縮こませる。そして、がばつと身を乗り出した。

「馬鹿！ すごく心配したんだよ！」

「はは、悪いな。でも、約束は果たしたぞ」

レンの目からは涙がぼろぼろとこぼれ落ち、思わずアランをドキッとさせる。

「お、おい、泣くなよ」

「だって……嬉しいから……もう二度と会えないと思ってたのに……会えたから……」

不覚にもそんなレンを見てドキドキしているアランは、ドキドキしているのをレンに悟られないようにしながらなだめる。

「お、男なら泣じゃなくて笑顔で拳をぶつけあうもんだろ？」

アランは目許から流れるレンの涙を指で拭ってやる。

レンはぼろぼろと涙をこぼしながらも恥ずかしそうに笑顔を作り、アランと拳を合わせた。

「うお、お前なんで手が血だらけなんだよ！？」

「ちよつと切っちゃって……でもそんなこと関係ないよ！」

レンはズボンで手を拭う。傷が浅かったのか、血でぐっしょりと濡れていた手はいつの間にか傷が塞がりつつあった。

「それにしても、アンタらよく平気だったわね」

「レンが買った花火のおかげさ」

そう言つて、ウィルは燃えかけの花火を取り出す。

「ねずみ花火と連発式の打ち上げ花火をありつたけぶつ放したつてわけさ。あれは銃より効果あるぜ？ それに、火い付けて置いとくだけで自動的にぶつ放してくれるしな」

「ユイさんが転移装置を起動してる間はアランさんとウィルが応戦して、私は花火の準備。ユイさんの準備が終わり次第、火をつけて大急ぎでカプセルに駆け込みました」

「あとは自動的に花火がどうにかしてくれたわけさ。僕たちが転移される間際に見たあの顔。ホント見物だったよ」

三人はにこにこしながらレンとリサに説明する。その面々を見ていて、突然思い出したようにリサは大声をあげる。

「あーッ！ そういえばアリス！ アンタ撃たれたわよね！」

「それは……ウィルのおかげで助かりました」

アリスは服の内側に手を入れてそれを取り出す。

アリスがウィルからもらった誕生日プレゼントは、弾丸が直撃したのか、ネックレスは完全に變形してしまっていた。歪んでしまった銀のフレームには、わずかな赤い石がこびりついているのみだった。けれども、このネックレスがアリスの命を助けたのだった。

「ちよつと怪我しちゃいましたが、でもほとんどこれが私を助けてくれました。ユイさんが手当てしたら痛みもすぐに引きましたしね」

「まったく……心配させないでよね」

アリスはすみませんといいながらにっこり笑う。リサはしょうがないわねというような呆れた表情を浮かべる。

「そうだ。ユイは？ 彼女はどくなつたの？」

「彼女は大丈夫。奴らには俺達に無理やり従わさせられていたつていう情報が与えられていたみたいで、俺たちが飛ぶ直前に保護されたよ」

「そっか……よかつ……いてててて！」

リサがレンの耳を引っ張り上げる。レンは悲鳴をあげながら引きずられていった。

「ちよつと、リサ!？」

「アンタが馬鹿なことを口走るからよ！」

アランとアリス、ウイルの三人は笑いながらその様子を見守る。

ひとまず、彼ら五人に平和が訪れたようだった。徐々に高く上っていく太陽がそのことを祝福しているかのように輝く。

「お、そうだと忘れるとこだった」

アランが何かを思い出したのか、懐から一枚の紙を取り出した。

「ここからまっすぐ東に向かって数日歩いたところに小さな町があるってユイが言ってたんだ。そこにユイの別荘があるらしいぜ」

「ユイって……別荘なんか持ってたの？」

「実はいいとこのご令嬢なんだとき。桜木家つつたら名門のお家柄らしいぜ」

アランが広げた紙にはその街までのおおまかな道案内、そしてその別荘の位置、別荘に仕える使用人への言葉が書き記されていた。

「ひとまずはそこをめざそうぜ。つと……」

アランのお腹が愉快的な音を立てる。照れ隠しにぼりぼりと頭を掻くアラン。

「ひとまず飯にしようぜ？ 丸一晚動いたら腹減っちゃったよ」

爆笑の渦がまき起こる。事実、アランは夕食も取っていないのだ。お腹が空いていて当然だといえる。

「じゃあ、何か食べるものでも探しに行こっか」

「私も賛成ー！」

五人は街の中を歩いていく。

今日もレンたちは生きている。消耗されるだけの部品としての彼ではなく、彼という一人の人間として……。

END

## 最終章 Two shadows (後書き)

ひとまずは勝利を掴んだレン達。太陽が彼らを祝福する。

そして、繋がるはもう一つのお話。

物語はリンクする。

一人の男の小さな少女を守るための物語。

次章、後日談 AfterStory.



## 後日談 After Story

後日談 After Story

濁った海水。ところどころヘドロのようなものが漂っている。これが発展の賜物だというのなら、人間はなんと愚かな選択をしたのだろうかと彼は嘆く。

やがて彼は深いところから浅いところへと上っていく。水上からは明るい電灯が明るく照らす。

もっとも、人間がこんなところから現れるとは思ってはいないだろう。カメラの用意などあるだろうか。いやない。

たとえばカメラがあったとしても、こんな場所のモニターを覗こうなどという変わり者がどれほどいようか。これだけ広い街である。それこそ監視カメラの数は尋常ではないはずである。

「まったく……戦争をしないって条約を締結してるにもかかわらずこの重装備……か……」

彼は顔を水面に出す。明かりの正体は常備灯、すなわち部屋を使っているようにとしまいと関係なしに常に灯されているわけである。

男……ロバート・エリクソンは水面から顔を出すとフックショットを取り出し、壁に打ち込む。

体が一気に引つ張り拳げられ、彼の体は水面からイルカの跳躍のように飛び出す。空中で見事に一回転を決めてから彼は優雅に着地した。

「こちらロバート。とりあえず中に到着した」

『了解。私達は船上からサポートを行います。商業区は私の方が詳しいですが、居住区に入ったら彼らの方が詳しいはずです』

一瞬ノイズが入ったかと思うと、声の主が少女から少年へと変わる。

『あーあー、聞こえてますかロバートさん？』

「聞こえている。君がレン君か？」

『そうです。今日はよろしくお願いします』

「今日で終わるといいんだがね」

ロバートは軽く準備運動を済ませると、装備の確認を行う。

「ブレードがないのはかなり不安だな」

『しょうがないじゃないですか。そんな長いものを持って泳ぐわけにはいきませんし、何かと邪魔になっちゃいます』

「わかつている。一応銃だけは普段から使っているものを使わせてもらえるんだ。どこぞの元特殊部員は丸腰でタバコだけ持って核兵器保存倉庫に潜入させられたって聞くくらいだからな」

『それはゲームじゃありませんでしたっけ？ まあいいです。ともかく頑張ってくださいね。それにしても緊張してきました……。私、こんな潜入ミッションのサポートとか、そんな経験全然ないんですよ！？ お父様も酷いです……。』

『仕方ないよ。僕達やユイさんしかヘヴンの内部の構造を知ってる人がいないんだから……。』

男は装備の類をきちんと整理すると、ゆっくりと部屋から出る。

「そういうことだ。頼むぜお嬢ちゃん」

『お嬢ちゃんじゃなくてユイですよー！』

時を遡ること数週間、レン達は無事にユイの別荘へと到着した。

そこには一カ月間の謹慎処分を受けて別荘へと戻っていたユイの姿があった。

別荘と言っても、アメリカで生活する際に使う家、という意味でかなり頻繁に使われているそうさ。

彼女はこの家を生まれたときから使っており、日本の本邸はほとんど行っただけがないという。

もともと、彼女は英語はもちろん、日本語やフランス語、中国語からドイツ語果てはアラビア語まで、各国の言語を使いこなしているため、世界中に広がる桜木家別荘のどこで暮らしても不自由がない

と彼女は言う。

そんな彼女は大学に入ったところから親と分かれて暮らすようになって。親はかなり忙しいため、世界中を飛び回ってあちこちで様々な仕事をこなしている。

しかも桜木家は、オキシデリボと並ぶほどの大企業を持っている。ユイの父はその社長で、それと同時に国際連合にも強い力を持った強力な家柄なのだ。

そんな父も娘には甘く、まさに溺愛という言葉が適していると噂されている。数カ月に一、二回の休日はほとんどが娘のために使われていると囁かれている。

さて、これより本題に入るわけであるが、無事レン達は桜木家に保護され、オキシデリボの不正を暴くという、ユイの仕事の手伝いをしていた。ユイはユイで自分の父親にオキシデリボが裏で行っていたクローンプロジェクトについてのメールを書き、送信した。

即座に返ってきた返信メールには、おおそユイの言っていたことと同じことが書かれていた。生命をモノと同じように扱い、あまつさえ商売の道具にするなど許せない、という内容である。

このことは即座に国連へと通知され、国連は調査チームを組むこととなった。

だが、このことはオキシデリボも予想していたのか、すでに証拠は隠滅された後となっていた。データは残っておらず、その痕跡も一切残されてなかった。

問題の子供達もいたが、誰のDNAをコピーしたのかわからなければ彼らがクローンであることを立証すること、それは不可能に近かった。

全てが行き詰まっていた頃、ウィルが一つのことを思い出す。クローン達のデータが詰まったディスクがレンのパソコンの中に入っている、ということである。

これを聞いたユイは父と話をし、結果オキシデリボにエージェントを送り込むことに決定する。大騒ぎをすればそのことがオキシデリ

ボに漏れ、ディスクを処分される可能性があったからだ。

選考の結果、高い身体能力と任務成功率を誇るエージェント、ロバート・エリクソンが任命され、今日彼らは近海まで船で接近し、海中を泳いでヘヴン地下に建設された核シエルターから侵入したのだ。

というのも、ヘヴンは外の人間が出入りすることはできず、それと同時に水上空中を細かくリーダーで索敵し、敵を発見すると同時に迎撃するという厄介なシステムを持っていた。それゆえに、水中以外の侵入方法がなかったのだ。

オキシデリボは多方面に様々な産業を進めている。もちろん、その方向には軍事も含まれる。

リーダー、銃、ミサイル、その他様々な武器を扱っている。とどのつまり、それらがこの都市にすべて配備されていると考えてもほぼ間違いはない。

そして、傭兵企業、つまりは戦争屋をオキシデリボが雇ったことはまず確実だと言われている。いざと言うときに実力行使に出るためだろう。最悪、ロベミライアと組む可能性すらあるのだ。

オキシデリボほどの企業がロベミライアと組めば、確実に連合側は不利となるだろう。

最低でもそれだけは阻止しなければならない。そのためには現時点でオキシデリボを告発する必要がある。

ロバートは歩みを止めながら考える。今、自分は途方もなく重要な任務についているのだ。

それは彼がそれだけ信頼され、任せられているという証でもある。

これはなんとしても任務を成功に導かなくてはならない。

彼はシエルター内通路から下水道へと身を躍らせる。あらかじめ頭に叩き込んでいたルートを進み、商業区へと進む。

行き先は商業区内でも人通りの少ないマンホールである。そこまで進めばあとは街の中に溶け込むだけである。

彼はマンホールを蹴り開くと、街の中へと飛び出した。

「所長、本社より所長あてのメールが届きました」

白衣の男が院を訪れる。ミシエルはやや困ったような表情を浮かべながら白衣の男を迎えた。

「まったく、ここは孤児院よ？　そういう格好、それに所長つてのはやめてほしいわ」

「失礼しました。ともかく、至急の内容とのことですのでお知らせにうかがいました」

ミシエルはしばらく顎に手を当てながら何事かと考え込んでいたが、やがて白衣の男に礼を言う。

「わかったわ。いますぐこっこのパソコンで確認するさせてもらうわね。わざわざありがとう」

もう一度彼女が礼を言うと、男は一礼して院を後にする。

不思議そうに物影からうかがっていた少年達が何事かと尋ねてきた。「先生！　あの人誰？」

「研究所の人だよ。みんなが元気に育っているか聞きに来たの。さ、先生はちよつとだけお仕事があるから皆と遊んでいてね」

「はい」

そう言つて子供達は散っていく。その中、一人だけ彼女の元を去らない少女がいた。

腰までの黒の長い髪。そして大きな黒の瞳。未だ歳は幼いように見えたが、成長すればすばらしい美人になることは間違いないだろう。

「クレアはどうしたの？　何か先生に用事？」

「……………」  
彼女はしばらくの黙って間ミシエルを見つめていたが、やがて微笑を浮かべて答える。

「別に。ただ面白かったから見ていただけよ」

そう言つて彼女もミシエルから離れていく。やがては彼女も友人達の輪の中に加わっていくだろう。そう思つてミシエルは職員室の方

へと向かって行った。

……だが、クレアは一度は去ったものの、再びミシエルの居た場所へと戻ってきた。

「至急のメールね……。何が“視える”か楽しみだわ」

彼女は薄笑いを浮かべたまま、しばらくの間そこに一人で立ったまま、目を瞑り続けていた。

ロバートはしばらくの間日が落ちるのを待ち続けた。その間も不審がられないように街の中を適当に散策する。

傍から見れば、休日にウォーキングを楽しむ男性にしか見えないだろう。というのも、彼はジャージの上下に身を包んでいた。

光学迷彩『オプティカルカモフラージュリビング』。姿を隠すことではなく、そこに生活する人々に溶け込むことで迷彩効果を得ることを目的とした光学迷彩である。つまり、服の柄、見た目を変化させ、他の服を着ているように見せる装置である。といっても実際に材質が変わるわけではなく、見た目だけが変化するという、あくまでも“光学”迷彩装置である。

彼は時々休憩を挟みながら町全体のイメージを頭の中に叩き込む。実際に見ることと、バーチャルで体験することでは差が大きい。

たとえば、臭い、触感、空気の味、雰囲気。そういったものは現地へ赴かなければ感じるできないものだ。

バーチャルで視覚のみの体験をしたところで、決して味わうことのできないものを彼は五感すべてを使って感じ取っていた。

「この街は……とても不快だ。生きている存在が何一つとして存在しない。全てが大きな力によって“生かされている”だけに過ぎない。子供も大人も、オキシデリボという会社の歯車の一つでしかないのだろうか……」

彼のこの街に対する印象は最悪だった。

自主的に生きようとする雰囲気を感じるこのできない街に、彼は

胸の中でくすぶるような感覚を覚えつつも、それを抑えて街を歩く。既に日が傾きかけていた。間もなく動き始めるべき時間である。

「だが、任務はこなさなければならぬ。たとえ不快でも……な」  
そのとき、彼の耳元のイヤホンが声を吐き出す。

『ロバートさん！ そろそろ時間ですよー！』

「わかつている」

『偽造カードを作ればよかったです……あいにく、自分のカードを解析することで手いっぱい、新しくカードを作るにはちょっと時間が足りませんでした。だから、申し訳ありませんが歩いて居住区まで行ってください』

「元からそのつもりだよ、お嬢ちゃん。リニアなんて使う気はない」  
『だからお嬢ちゃんじゃなくてユイですよー！』

イヤホンの向こう側から騒がしい雑音が聞こえてくるが、彼は無視を決め込む。

「居住区に着いたら、予定通りに行動する、以上」  
彼はそう言って通信を切る。

もはや進路上に障害物はない。彼は光学迷彩のモードを切り替え、全身を黒一色のジャージへと切り替える。すでに日は落ち、あたりは暗くなり始めていた。電灯が少ないリニアの高架下を駆け抜けるには最適の格好だといえる。

ロバートは急ぎすぎず、かといって遅くなりすぎないようジョギングで走る。急ぎすぎれば人の目を引き、遅すぎれば目的地への到着が遅れてしまう。熱くなるときは思いつきり燃え上がるが、冷静にこなすときは何事もクールでスマートにこなすのが彼のやり方だ。決して遠い距離ではない。熱くなりすぎて任務を失敗に持ち込むくらいならば、今は思い切り冷めて慎重に行動をとるべき時だ。熱くなるのは、それが必要な場面のみだ。

誰とも会うこともなく、彼は居住区へと到着する。完全に日は落ち、辺りは漆黒と数少ない電灯の光に満たされていた。物影を進みながら目的の建物へと近づいていく。

「目的地に到着。これより潜入する」

彼はそう短くマイクに告げると、窓にカッターを取り付けて鍵の周りを切断する。

こするような音が響くが、注意していなければよほどのことがない限り聞き逃してしまっただろう。

やがて窓は切断され、手を通るほどの小さな穴があく。ロバートは中に人がいないことを確認して鍵を解錠して内部へと踊りこむ。そこはトイレだった。

素早くピッキングで掃除用具入れを開くと、中から掃除中の看板を取り出してそれを入り口へと置いた。

そして、音が響かないようゆっくりと天井付近の板を外していく。彼が頭に叩き込んだ地図が正しければ、頭上を通気孔が通っているはずだった。

予想通り、そこには通気用の道があった。そこから通気孔内へと侵入すると、身を屈めたまま先へと進む。

時折天井下から子供達の声が聞こえてきたが、音を響かせぬように彼は進む。

そう、ここは院生達が住んでいるマンションだった。レンの供述によると、彼の部屋にパソコンが置いてあるはずだという。

やがて通気孔からエレベーター内の空洞へと到着する。足元にエレベーターが止まっており、しばらくは動く気配はないようだ。

彼の目的の階層は18階、つまり最上階だった。

しばらくすると、子供達がエレベーター内へと駆け込んでくる。

「俺の部屋でカードしようぜ！」

「何やる？俺はセブンブリッジでもなんでもいいけど」

「ポーカーにしようぜ。そんでもってアイスクリーム賭けてさあ！」

やがてエレベーターは低い音を立てて唸り出す。徐々に上へと上昇していく。

彼の目的の階層に止まることはないだろう。なぜなら、18階に入っていた子供達……レンとアラン、ウィルの三人が今はそこにいな



いからだ。近くの階まではエレベーターで運んでもらい、上へは自分で上ることとなる。

やがて16階で子供達が去っていく。彼はエレベーターのワイヤーに足を絡ませて上ろうとしたが突如動き出したエレベーターに危うく足を巻き込まれそうになる。エレベーターは徐々に上へと向かっていく。つまり、上の階に利用者がいるということだ。

エレベーターは17階で停止する。そして、再び上へと動き出した。「18階には誰もいないはずなのになぜ……？」

エレベーターに乗っていた誰かは18階で降りる。ロバートも遅れて通気孔内へと飛び込んだ。

一歩ずつ慎重に進みながら、彼は男子トイレへと向かう。通気孔の仕組み上、通気孔から一度出なければ直接部屋へ向かうことはできなかった。

彼はしばらくの間、トイレに人がいないかを伺っていたが、そこに誰もいないのを確認して下へと降りる。

「18階に到着した。これから目的の部屋へ……」

「やっぱり来たわね」

突然、彼の背後から女性の声が響く。

「両手を挙げて」

彼女はゆっくりと彼に指示を出す。彼の到着を見越して行動していたものがあるというのだろうか。ここの院の所長がかなりのやり手だとの噂である。彼女なりの方法でロバートが潜入することを事前に察知していたのだろうか。

そうだとすれば、何とも滑稽な演劇を演じていたことだろうか。彼の背後には大勢の武装した戦争屋が待ち構え、今か今かと手中に握る黒い銃身を撫でながら待っているのだ。

彼はごくりと生唾を嚥下する。何が信頼であろうか。そんなものはただの高慢であったと彼は思い知らされた。

「あなた、例の連合のエージェントさんよね？」

予想通り、彼女は自分の身元をびたりと言い当てる。彼は心の中で

舌打ちをしながら黙って頷く。

「うふふ、やっぱりあの女のメールを盗み“視て”よかったわ。これは思いもよらぬ拾いものね」

「どうやら、彼女の様子がおかしい。彼女の言葉の感じから、彼女は所長本人ではなく、それに仕える研究員の女か何かだろうと彼は予想した。

「あなたがここに来たことは黙っておいてあげる。その代わりに、一つお願いをしてもいいかしら？」

「……」

彼女が本当に内部に繋がる者だとしたら、これは逆にチャンスである。彼女をうまく自分の味方にする事ができれば、今後の任務をこなすのも楽になるだろう。

「話は聞こう」

「うふふ、話は聞こう、ね。あなたは自分の立場を理解できてないのかしら。まあいいわ」

彼女は勝手に一人で自己完結すると、彼女の言うお願い言を述べる。それはロボットにとって予想外のものであり、そして予想以上に厄介なものだった。

「私を……私をこの島から連れ出してほしいの。あなたならできるでしょ？ エージェントさん」

「何……？」

「振り返ってもいいわよ。ただし手は挙げたままでね」

彼はくるりと振り返る。そこにいた女は……少女だった。

黒髪を腰まで伸ばした黒い瞳の少女。成長すれば美人となることは間違いなく、いや、現時点でも美少女といえるほどの輝きを持っていた。

「君は……」

「私はクレア。こここの院生よ」

彼女は手に持った拳銃を構えたまま、ゆっくりとロボットへと詰め寄る。

『ろ、ロバートさんどうしましょう!?!』

『ロバートさん! その子とまともに取り合わないでください! クレアはどこかがおかしいんです!』

耳元で雑音が喚く。だが、この少女に関する情報は少しでもほしかった。

『見えるはずのないものが見えたり、今地球の裏側ではなんとかが起こってますとか言いだしたり、ともかく異常なんです!』

レンの声が頭の中に響く。彼の言葉の中に、彼は一つの言葉を当てはめる。

「彼女は……カードを当てることができたりしないかい?」

『え……? ま、まあ当てたりして遊んでいたことはありませんが……イカサマだと思います。クレアが渡したカードしか当てられませんでしたし……』

「ふむ、どうやらそのクレアという子は想像以上に賢いようだな」

「あら、私の噂話かしら?」

目の前の少女がくすくすと笑う。歳は14、5だろうか。そんな若い少女には似合わないような拳銃が彼女の手の中で黒く輝く。

「君は超能力者じゃないのかい?」

『え!?!』

『嘘!?!』

彼女のくすくす笑いが一段と大きくなる。

「なんでそう思ったのかしら?」

「君はカード当てが得意らしいね」

「イカサマかもよ?」

「それに見えるはずがないものが見える……君は……遠隔透視能力者か。それも超一流だ。地球の裏側で起こっていることが見えるとなると……異常ともいえるレベルだ」

彼女のくすくす笑いが止まる。一瞬うつ向くが、次に彼女が顔を拳げたとき、その顔は嬉しさと涙の入り混じったような顔となっていた。

「やっと……やっと私のことを理解してくれる人がいた……」  
少女は泣きながらその場で崩れ落ちる。

今まで自身の異常な能力に気付いてもらえず、ひたすら孤独を味わってきた少女。それが今、ついに彼女のことを理解できる人間が現れたのだ。これが嬉しくないはずがあるだろうか。

「お、おい！」

「私みたいな人が……ひつく……他にもいるのね？」

「む、そうだな。君ほど能力が高い人は滅多にいないが、普通の透視程度なら山ほどいるぞ」

「地球の裏側つてのは嘘。ミシエルが読んでた新聞を盗み“視”ただけ。変な子のフリをしてないと、私の力を悪用する人がいたら嫌だったから……」

「つまり、君の能力はただの透視？」

「少しだけなら遠くも見えるわ。……うつく……。これって普通？」  
ロバートは僅かな超能力に関する知識を引き出す。そもそもクレヤボヤンスの能力は透視であり、遠視能力とともに持っていることは稀だと聞いた。それも、せいぜい数百メートルか数キロが限界だという。

「確かに珍しいけど、まったくいないってわけじゃない。クレヤボヤンスの中でも遠隔透視能力者は少しならいる。確か、連合の超能力機関にも何人かいたはずだ」

「私みたいな人が集まっている場所があるの？」

ロバートはゆつくりと頷く。今はともかく彼女を味方にしてしまいたかった。クレヤボヤンス能力を持つ人間がいれば、任務の方もかなりやりやすくなるだろう。

「連れてって！ 私をそこまで連れてって！」

「む……どうすべきか……」

ロバートはユイに尋ねた。超能力を持った少女がいれば作業がはかどることも間違いないのである。

『難しいですね……。出るのも入るのもチェックが厳しいへヴンで

す。私が里帰りするときも何時間も待たされました。ましてや院の子供が出るとなりますと……」

『ユイ、転移装置ってのはどう？』  
レンが彼女の思考に口を挟む。だが、彼女は低い声でそれを一蹴する。

『無理ですよ。あの事件以来転移装置の部屋は一切立ち入り禁止です。特殊な鍵がなければ開かないようになってますから……。私の薬でも溶かせそうにありません』

「となると、脱出ポッドを奪って脱出するしかないのか？ まさか一緒に泳がせるわけにもいかないだろう」

『それが一番可能性があるといえますね。ポッドで私達の船の場所まで来れば拾うこともできます。けれども、あれ以来警備が厳重になっているから、さすがにポッドを動かせば気付かれると思います。どうにかしてヘヴンの追撃から逃れられれば一番可能性があると思います』

「大丈夫よ。私には“眼”があるもの。これがあればどんな問題もすぐに片付くわよ」

彼女は強気な表情を浮かべてロバートを見つめる。彼女は自分の“眼”をとて信頼しているのだろう。幸い機転の効く賢い少女のようだ。やってやれないことはないだろう、と彼は思った。

「わかった。だが、必ず俺の言う通りにしろ。いいな？」

「わかってるわ。それがここを出るのに最良の手段だってことくらいね」

そう言っつて、彼女は手に持った銃の引き金を引いた。突然のことにロバートは身構えたが、銃口から出てきたのは弾丸ではなく、数センチほどの火だった。

「ライターよ。誰かさんが使ってたのを見て同じものを買ったの。結構リアルでしょ？」

「まったく、そういう質の悪い冗談はよしてほしい」

ロバートは肩をすくめる。クレアは笑いながらライターをポケット

にしまった。

「私の名前はクレア」

「俺の名前は……ロバートだ。本名ではないがな。とりあえず今はロバートと呼んでくれ」

「ロバートね。よろしく。ところで、あなたはなんでここに来たの？」

彼女は突然ロバートの目的を尋ねる。ロバートは慎重に言葉を選びながら信用を損なわないよう、それでいてすべてを話さないように答える。

「この階にレンという少年がいたのを知っているか？」

「ああ、レウオン先輩ね。それがどうかしたの？」

「彼の私物の中に、俺達が求めるものがある。それを回収しに来た。彼女はくすくすと笑みを浮かべる。

「残念ながら先輩方の私物は全て“処分”されたわ」

「なんだと!？」

「先輩達が飛んだ日、あの日の晩には全部外に運び出されたわ」

ロバートは舌打ちをする。まったくの計算外だった。

『どうしましょうか……』

「どうするもこうするも荷物の行方がわからなければ探しようがない。何か心当たりはないか？」

『プロジェクトリーダーをやっている、そこまではわかりません……』

彼は内心焦っていた。この手の任務は時間が経てば経つほど発覚の危険性が高くなる。どんな人間も完全に痕跡を残さずに行動することは不可能だ。

「大丈夫よ。私はその行き先を“追跡”したものだ。どこに先輩達の荷物が処分されたかわかっているわ」

「それは一体どこだ？」

「その前に約束して。置いていかないって」

「約束する」

しばらくの間、彼女は言い渋っていたが、最後までその場所を明かさなかった。

「明日の午後3時、セントラルモールの駅前まで来れる？」

「どうして今じゃダメなんだ？」

「……私達がどこにいるかは完全に管理されているの。門限を過ぎても自分の部屋にいなければもう大騒ぎ。だから、今私がお店を教えたら、あなたは私を置いて行ってしまおうような気がして……」

「……」

ロバートはしばらくの間黙っていた。

彼女にとって、彼はおそらく唯一の理解者だろう。そんな彼と離れてしまえば、もう二度と会えないような気がしてもおかしくはない。

「……セントラルモールの中にあるのか？」

「ええ。モールの中に、生徒が使っていたものを専門に扱うお店があつて、あの部屋を出ていった人達の荷物は全てそこに送られるの。そして、数年間倉庫で眠らせた後に店頭に出す決まりになっているわ」

「つまり、その店の倉庫にあるということか？」

「ええ。けれども、モール内には無数のお店があるわ。今から一人で行ってもそのお店には行けないわよ」

彼はふうとため息をつく。

「大丈夫だ。俺はちゃんとお前を待っている。だから安心して明日まで待て」

「……信じていいのね？」

クリアの目は彼に懇願する。頼むから置いていかないでと。こんなところで朽ち果てるのは嫌だとそう訴える。

「ああ。信じていい」

「……じゃあ、私はもう自分の部屋に戻るわ。あなたはどつするの？」

「俺は外で今夜を過ごす予定だ。こうすれば」

彼は光学迷彩を操作し、自身の姿を変える。

「こうして地面に化けて、あとは地面に伏せていれば、俺は他人からは見えなくなる」

「へえ……そんなことができるんだ」

「まだこいつは試用段階、それを借りてきただけだ。だから予期せぬ誤作動などもあるかもしれない」

この光学迷彩を渡された際に言われた言葉を今も覚えている。突然迷彩効果が消滅する可能性もある。だから頼りすぎるな、と……。彼自身往來のど真ん中で寝ようなどという気は当然ながらない。迷彩効果を頼りにしているが、もとより迷彩効果がなくとも見つからない場所で一夜をすごすつもりであった。

「ふーん。頼りになるのかならないのか、いまいわからないわね」  
そう言いながら彼女はトイレを後にする。ロバートは黙って彼女を見送った。

翌日、ロバートは指定された時刻に指定された場所へと向かう。

ラフなシャツに身を包み、ズボンも普通のジーンズだ。外から見れば仕事から解放されて休日を過ごす一般的な青年の様に思える。

「待った？」

「いや、こつちも今来たところだ」

クレアも薄地のワンピースに身を包み、涼しげな印象を与えてくれる。彼女のような者が街中にあふれば、過ごしにくい灼熱の夏も幾分か過ごしやすくなるだろう。

「さ、行きましょー！」

「お、おいー！」

彼女は彼の手を引いて歩き出す。歳の離れた兄妹といったところだろうか。カップルには思えないほどの年齢差の二人は、様々な品が並んだ商店街の中を練り歩く。

「どう見ても古物商じゃないんだが」

「いいじゃない。ちょっとくらい寄り道してもさー！」



彼女はさっそく小物屋へと駆け込む。ロバートも肩をすくめながら仕方なしに彼女の後を着いて歩く。

「可愛い……」

店内に入ると、そこには様々なキャラクター物のグッズが所狭しと並んでいた。そんなグッズの山に埋もれて一人の少女がショーウィンドウに張り付いていた。

「ねえ……これ買ってくれない？」

彼女が指さしているのは小さな水晶で飾られたヘアバンドだった。キャラクター物で埋め尽くされている店内で、唯一キャラクターに侵食されていない品だった。

「無理だ。俺はカードがない」

ロバートもここに潜入する以上、このシステムを一応は勉強していた。クレジットカードのみで全ての買い物を済ませることが基本となっているシステムは、逆を言えばカードがなければ一切買い物をする事ができないということを目指す。

「あう……」

彼女はしょんぼりとして、だがなお恨めしそうにそのアクセサリを見つめる。

「連れ出せたらあんなものいくらでも買ってやる。だから……今は諦める」

「……本当？」

「ああ」

ロバートはしつかりと頷く。給料の支払いは破格といってもいい。それこそヘアバンドごとき100本でも買うことができる。

彼女はしばらくの間ショーケースの中を見つめていたが、ついに諦めたのかゆっくりとケースから離れる。

「約束だからね」

「ああ」

少女は小指を突き出す。

「指切り……」

「わかったよ」

二人は小指を絡ませて、歌を歌う。

「指切りげんまん……」

「嘘ついたら釘千本飲ーます……」

「指切った！」

色々目移りしがちなクレアをどうにかなだめつつ、二人は古物商へと向かっていた。

やや危険な漢方を扱う商店が連続している地域を抜けると、それは唐突にあらわれる。

『あなたの欲しいものがきつとみつかります』

そう掲げられた看板の脇には古ぼけたショーケースが置かれている。中にはいかにも古そうな本や、古物が所狭しと並べられ、いかにも古物商といった感じのたたずまいだった。

「クレア、“視える”か？　こんなパソコンなんだが……」

彼はあらかじめ渡されたパソコンの型番に関する資料を彼女に見せる。しばらくの間クレアはそれを見つめていたが、やがて目を瞑って精神を集中させる。

「ちよつと待つてて」

彼女には今何が見えているのだろうか。この薄いドアの向こう側にある商店のそのまた奥にある倉庫にあるとされる目標のコンピュータ。それが、ここにいる彼女に見えているのだろうか。

「それを取ってくればいいの？」

「いや、中に入っているデータディスクだけで十分だ。簡単なプッシュ方式でディスクが排出される仕組みだったはずだ」

「じゃあ……私が取りに行くわ」

「なぜ君が行くんだ。俺が……」

「私には“眼”があるもの。これはそんな頼りにならない迷彩とは違うわよ」

しばらくの間ロバートは黙って考える。

『彼女に任せてみてはどうでしょうか？』

耳元のイヤホンから声が聞こえてくる。

『ロバートさん！ その店に俺ら行ったことがあります！』

今度は先とは別の少年の声が聞こえてくる。パソコンの持ち主……レンだった。

『ちよつとレンさん！？』

『そこでアリスの誕生日プレゼントを買ったんです！ 間違いない……！』

もし、クレアの言っていることが本当ならば、その誕生日プレゼントも元は持ち主がいたのかもしれない。

『つまり……』

『元の持ち主がいた、ということだな』

『ちよつと待って！ じゃあ、僕の部屋にあった写真はもしかして……』

『待て。話が見えない。順に言ってくれ』

取り乱していたことに気付いたのか、レンはいったん咳払いをしてゆっくりと話し始める。

『僕の部屋には一枚の写真があったんです。その写真は誰が誰を撮ったものかはわからないけど……院内キャンプのときに撮った写真だと思っんです』

『その写真がどうかしたのか……？』

『写っていたんです。アリスの誕生日プレゼントに贈られたものにそっくりなペンダントが……』

そのことから予測されることをロバートは考える。

『それはつまり……その写真は君達を写したのではなく、他の誰か……もうこの島には恐らく生きて存在してはいない誰かを写したものだっというのか？』

『……はい』

ロバートは舌打ちをする。

今まで、クローン人間を臓器移植に使うということなど半ば信じられなかった。だが、実際にここで消えた人間がいるのだ。

彼はこのオキシデリボという会社に恐れを抱くと同時に、強い嫌悪感を感じる。

「ともかく、ここに島で生活をしなくなった子供達の私物が運び込まれていることはわかった。もう目的まであとわずかだ。後のことは任せてくれ」

『はい……。お願いします』

通信が終わるのを今か今かと待ちわびていたクリアがすぐさま尋ねる。

「で、どうすることに決めたの？」

「俺が店主の気を引く。その隙に、君はコンピューターからディスクを抜き取ってくれ。君ならどこにそれがあるかわかるだろう？」

「わかったわ」

二人はドアをゆっくりと開き、店の中へと足を踏み入れる。ドアベルが小さな音を立てて揺れる。

突然目の前に現れる本の山。ロバートは辺りの様子を見回しながら店の奥へと進んでいく。

「いらつしゃい」

突然本の影から現れる老人。ロバートは彼を見据えながらゆっくりと口を開いた。

一方、クリアはロバートとは別のルートを通って店の奥へと進んでいく。

彼女の眼にはどこに店員がいるか“視えて”いる。今の位置なら問題なく奥へと侵入できる。

その視界の隅にロバートの姿が映る。何を話しているかはわからなかったが、きちんと店員の気を引いているようだ。

「今は彼に頼るしかないわ。でないと私も……」

彼女は自分の記憶を巡らせる。数週間ごとに記憶操作を受ける身であることを知ったのは彼女がまだ7歳のときだった。

次々と記憶を変えられる自分の友人達の姿を“視て”、彼女はそのことをノートに書き留めた。そして、自分自身の記憶にロックを掛けて封印し、研究員にその記憶を改竄されないようにした。

自分がなぜこんな能力を持っているかはわからないが、少なくとも彼女のことをクローンだと強く信じている研究員の連中は、クローンがオリジナルの持っていない能力を持っていることを知らない。こうして3カ月が経過し、彼女は12歳まで成長を遂げた今も昔の記憶をわずかも損なうことなく今に至っている。

彼女の眼は知っていた。クローンとして生まれた自分がどのような最期を遂げるのかを。だから彼女は逃げ出した。

本の山を崩さないように先へと進むと、やがて扉が見えてくる。その前に、脇にある机の中身を漁る。

「鍵がここにあるはずね」

当然ながら倉庫には鍵がかかっている。だが、シリンダー錠の構造を“視る”ことができる彼女なら、どの鍵が正解の鍵かすぐにわかった。

クレアは机の中から一つの鍵を盗み出すと、扉のノブを捻って奥へと進む。

目の前には二つの扉が並んでいた。片方は外へと繋がる扉。そしてもう一つは倉庫への扉だ。

迷うことなく鍵を差し込み、ドアノブを捻る。音もなく扉は開き、クレアは体を滑りこませた。

「どのパソコンよ……」

その中は乱雑に物が並べられ、似たようなパソコンも数台並んでいた。

クレアは目を瞑って眼で“視る”。

「見つけた」

彼女は一台のパソコンに近付き、ディスクスロットからディスクを

排出する。

それをポケットに仕舞いこむと、彼女は再び倉庫から外に出る。もちろん鍵をかけることも忘れない。

クレアは念の為に扉の向こう側を“視る”。ロバートと店主は未だに会話を続けていた。そんなロバートの話術にクレアは感心する。

入ったとき同様扉をゆっくりと開き、音も立てずに閉じる。そして、鍵を元の場所へと戻し、店主に見つからないように店の入り口の方へと進む。

彼女は一度扉を開く。ドアベルが鳴り響き、客の来店を店主へと知らせる。そして、クレアは外へ出ずにロバートの方へと向かう。

「終わったわよ」

「わかった。時間を取らせてすまん。連れの用事が終わったみたいだ」

「おお、そうですか。いや残念です。あなたのようなお客さまはなかなかお目に掛かれない。ぜひともまた来てくだされ」

老人はロバートの手をぎゅっと握り、笑顔で見送る。ロバートも笑顔で応えると、二人は店の外へ出た。

「うまくやれたか？」

「はい、これでしょ？」

ロバートはクレアが差し出したディスクを持っていった端末へと差し込んだ。少々のラグの後、画面上に情報が映し出される。

「これだ。間違いない」

そこにはオリジナルの人間の事細かなデータが記載されていた。

「著名な資産家に軍の高官……ロベミライア側にも顧客がいるな……」

「……」

「ロバート……私は？」

「君は……いや、やめておこう。こんなことを知っても不快になるだけだ」

彼は端末の電源を切ると、ポーチの中へと仕舞った。

「そう……そうよね」

クレアはうつむいて頷く。自分のオリジナルになった人間を知ったところで何になるだろうか。親とも言える存在ではあるが、殺すために生んだ親に言う感謝の言葉などあるだろうか。

「行きましょ。一秒でも早く外の世界を見てみたいわ。“眼”じゃなくて、この目でね」

「ああ、そうだな。それがいい」

ロバートはクレアを率いて侵入の際に通ったマンホールの方へと向かった。

「所長、準備が整いました」

「ご苦労様。下がっていいわよ」

ミシエルは白衣の男性を煙たそうに手で追い払う。彼は一礼すると部屋から出ていった。

「まったくもってありがたいわね。こっちが必死に探していたデータを引っつけてくれるとはね。それにしてもあの子娘、子供達にデータを流すなんて、リーダーとして採用したのが間違いだったわ」  
彼女はこのような事態に至った原因……ユイの顔を思い出す。

「ま、あの子娘が送り込んだ男が予想以上に役に立って助かったわ」  
彼女は防犯カメラの映像へと目を映す。数万と設置された防犯カメラの映像の中から一つの映像を選び出す。そこには一人の男と一人の少女の姿が映っていた。

「まったく、勝手に“商品”を盗み出すなんて手癖の悪い男ね」  
ミシエルはクレアのことを見つめる。いつの間にか知ったのか、それともただの偶然か。ともかく彼女が外に出ようとしていることは明らかだった。

「どうやらデータも手に入れたみたいだし、そろそろ捕まえるところでしょうか」

彼女はテレビ電話を起動し、一人の男の元へとかける。

「ジョージ、出番よ」

「ようやく暴れられるのか？」

「男は殺していいわ。けれども少女は無傷で捕らえなさい。大事な商品だもの」

「承った」

男はそう短く言うつと電話を切った。

ミシエルはうんざりしたような表情を浮かべる。

「まったく愛想の悪い男。でも、使えない口だけの男よりはマシね」  
ミシエルは深く椅子に腰かける。彼の實力は折り紙付きである。

数ある戦争屋の中でも高い実績を誇り、確実に獲物を仕留め、中でもブレードの扱いは一級品だという。

そんな彼にはオキシデリボの試作品のヴィブロブレードを渡してある。どう転んでも、諜報員に勝ち目はない。

ミシエルは妖艶な笑みを浮かべてカメラの映像を見下した。

ロバートは焦っていた。地下シエルターの警備が目に見えて厳しくなっていたのだ。

「ロバート、そこは右」

「ああ」

彼一人だったらとつと兵と出くわしている。ここまで敵と鉢合わせせずにはいられるのも、偏にクレアのお陰だといえた。

「次は左ね」

だが、それもはや厳しくなってきた。敵の数は徐々に数を増し、そして敵もただ見張っているのではなく明らかにこちらを探していた。

「困ったわ。もう敵のいない道がないわ」

ついにクレアも敵のいない道を見つけないことができなくなっていた。しかし、脱出ポットまであと数百メートル。無理やり突破できない距離ではなかった。

「クレア、強硬突破だ」



「本気？ 結構な数がいるわよ？」

ロバートは腰のポーチから拳銃を取り出す。それは玩具でもライタ  
ーでもない、本物の銃弾が込められた銃だった。

「だいたい200メートルくらいか。走れるか？」

「わからない……。体はまだ12歳だから……。もしかすると捕まる  
かもしれないわ」

「それなら……。俺が囮になる。俺が奴らを引き付けている間にポツ  
トまで走れ」

ロバートは影から敵兵の様子を窺う。飛び出す最良のタイミングを  
掴もうとしているのだった。

「……。絶対戻ってきてよ？ 私はポットなんて操縦できないわ」

「わかった。必ず戻る」

ロバートは目を瞑り、深呼吸する。

多対一、そしてこちらの手には一丁の銃のみ。明らかに不利だった。  
けれども、やるしかないのだ。ここを生きて抜けるには、この場を  
制圧するほかにはなかった。

……。そして彼は走った。

「いたぞ！」

声が響くと同時に彼は銃を抜く。狙いを定めて確実に戦力を削る様  
に攻撃する。

「ぐあッ！」

「クソ、足をやられた！」

命を奪う必要はない。戦力とらないように足止めさえすればよい  
のだ。

ともかく、短期決戦が重要である。増援が駆け付けたら間違いなく  
勝ち目はない。

「ッ！？」

死角から白刃が迫る。気配だけでロバートは振り向くと、銃で刃を  
受け止める。

「なッ！？」

そのまま相手の胸を蹴り抜き、腕を撃って鎮圧する。

「があッ！」

ロバートは敵兵からブレードを奪い取る。弾丸の数に限りがある銃よりも、敵の数がわからない戦いでは刀剣類の方が役に立つ。体を低く屈ませながらロバートは剣を振るった。

「ぐわッ！」

「な、なんなんだ、コイツ!?」

確かな手応えと共に人が倒れる音が聞こえる。彼はそのまま血を拭うこともせずにブレードを振るう。

「きゃあああああああッ！」

しかし、彼の獅子奮迅もそこまでだった。耳をつんざくような悲鳴が辺りを駆け抜けた。

ロバートは振り返る。そこには首元を捕まれて吊り上げられるクレアの姿があった。

「クレアッ！」

ロバートは身を低く屈ませたまま走る。クレアを掴む敵兵めがけてまっすぐに走った。

その手の刃がもう少しで敵へと届こうという瞬間、別の方から刃が飛び出した。

「くッ！」

なんとか体は捻らせロバートは回避する。刃はそのままくると回転しながら放物線を描き、深々と地面に突き刺さる。

「見事だ」

ぱち、ぱち、と軽く手を叩くような音が響き渡る。

刃の飛び出した方向には一人の男が立っていた。腰には一振りの刃が下げられている。

「お前達は下がれ」

その声で、殺気を放ちながらロバートを取り巻いていた兵達はどこかへと消えていく。

「ロバートっ！」

クレアの声も同時に遠ざかる。だが、ロバートはそこから動くことができなかった。

ナイフのように鋭く冷たい視線がまっすぐにロバートを射抜く。一瞬でもその男から視線を外せば、その瞬間殺られることをロバートは確信していた。

「ガキを追わないのは正解だ。その瞬間殺す」

「お前……見覚えがあるな……」

目の前に立つ巨大な男の顔を見た瞬間、ロバートの頭の中にある男の情報が浮かび上がる。

「国際指名手配、ジェームス・ジェイソン。テロ組織レイリヴァンの実行部隊元隊長、数多くのテロ・暗殺を行い、レイリヴァン壊滅と同時に行方不明になった伝説的テロリスト……か」

数年前まで各地で暗殺とテロ行為で連合国を恐怖に陥れていたテロ組織レイリヴァン。殺した人間の数はそれこそ千にも届き、殺した首相・大統領の数は五十に届きかねないとすら言われている。

ようやく首魁を突き止め、国連軍の投入によってようやく壊滅へと追い込んだ組織だが、今でもその何人かが逃げまわっていると言われている。そのうちの一人が目の前に立っている男だった。

「ほう、よく知っているな」

「どこかで未だにドンパチしてらって噂だったが……戦争屋とはな」「どうせ非合法の殺しをしてきたんだ。非合法の戦争屋をしていたところで驚くこともないだろう」

ジェームスは腰に下げられた刀を手に持った。それは低い音を立てながら細かく振動する。

「ヴィプロブレードか……」

ヴィプロブレードとは、刀身が超微細振動することによって、従来の刀剣と比べて切れ味が数倍も良くなるよう仕掛けを施してあるギミックブレードである。それは岩であってもバターの様に斬ることができると言われている。

「俺が投げたブレードも同じ品だ。抜け」

ロバートは手に持っていたブレードを投げ捨てると、床に刺さっていたブレードを引き抜いた。柄の部分のスイッチを押すと、ジェームスのブレード同様細かく振動する。

「本気の殺し合いだ。まさか経験したことがないとは言わないか？」  
「テロリストを数人殺した。俺は狂ったテロリストと違って殺人嗜好なんてないんでな」

「殺人嗜好？ 違うな。戦いは芸術だ。ブレードは筆で、肢体はキヤンバスだ。傷という名の線を刻み込み、死体という作品を作り出す芸術だ」

「あいにく、俺は芸術を愛でる心も死体を賛美する目もないのでな。お前の芸術とやらを理解できん」

「それならば、お前が作品となるがいい！」

ジェームスは大きな一歩で刀を大きく振るう。ロバートも軽いステップを踏みながら刃を繰り出した。

二つの筆がぶつかり合う瞬間、鋭い火花が噴き出す。それがお互いの顔を明るく照らした。

「ふむ、そこそこ鍛えてはいるようだな」

「諜報員つてのは意外と体を酷使する仕事でな」

二人は大きく後退すると、再びぶつかり合うように刃を突き出す。重い衝撃がロバートを襲う。巨軀から繰り出される一撃は、細身のロバートが受け止めるにはやや重すぎた。

「だが……まだ足りんッ！」

ジェームスが大きく斬り払う。その勢いに耐え切れず、ロバートは思わずブレードを手放す。

回転しながら舞うブレードを目で追う間もなく、ロバートは大きくバックステップで下がる。だが、そこにジェームスの凶刃が襲いかかる。

「ぐッ！」

「紙一重……か」

胸に横一文字の傷を刻まれるロバート。胸元からぼたぼたと血液が

溢れだし、落ちていく。

「だが、早速俺の筆が入った。お前はまもなく作品となる」

「それはどうか」

ロバートは頭の中で弾かれたブレードとの距離を測る。およそ10メートル。取りに行けば確実に斬られること間違いなしだった。

ジエームスがブレードを大きく振りかぶる。ロバートは大きく後ろに飛んでそのままステップを踏みながら後退する。

だが、ジエームスはそのままブレードを引き寄せ、一気に突き出した。

「ぐあッ!？」

刃が左腕を貫通する。とつさに左腕を突き出さなければ、心臓をまっすぐに貫いていただろう。

「ほう……いい判断だ」

「死ぬわけにはいかないのにな」

そのままバック転で大きく飛び、右手でブレードの柄を掴む。すぐさまスイッチを入れると、刃が振動し始めた。

「まだ戦いは始まったばかりだ！ さあ、来い！」

ロバートは片手でブレードを持ち、ジエームスへと斬りかかる。しかし、それを容易く受け止めるジエームス。

ジエームスは再びブレードを力強く打つ。今度は手放すことはなかったが、右腕に強い衝撃が走る。

「クソッ！」

ロバートは再びバックステップを踏む。しかし、それにぴったりとついて来るジエームス。

「逃げるな逃げるな！ 戦いは前進してこそ勝利を得られるものだ！」

ロバートも頭の中では理解している。だが、右腕に痺れがある今、もう一度刃をぶつけあえば結果は見えている。

ついに壁際まで追い詰められるロバート。ジエームスが刃を振り下そうと大きく振りかぶる。

ロバートは力の籠らない両手でブレードを持ち、ジェームスの刃へ叩き込む。  
ぶつかってなお振動し続ける刃は無数の火花を散らしながら激しくせめぎ合う。

「どうした!? 力が入っていないぞ!」

それに答えることもできず、だがともかく斬られぬようとなんとか刃を押し返す。

しかし、それにもかかわらず火花は自分の方へと近付いていく。

そのとき、ロバートは足元に転がっているものに気付いた。だが、それを使っても確実に仕留められる保証はない。

それでも、ロバートはそれに頼るしかなかった。彼は足にそれを引っ掛けると、大きく蹴り上げ左腕で掴んで振るった。

「なッ!?!」

突然の反撃に驚くジェームス。刃を返してそれを防ぐも、それはぼきりと折れてそのままジェームスの胴へと吸い込まれる。

「ぐあッ!?!」

ロバートが振るったブレード……先ほど彼が捨てた普通のブレードが赤い一線を描く。それは半分ほどのところで折れていたが、それでも十分に役目を果たし、ジェームスへと一撃を加える。

「はああ……効いたぞ? 突然の反撃に俺も驚きだ!」

「ちっ……仕留め損ねたか……!」

それはジェームスの胴を横一線に切り裂いたものの、ヴィブロブレードに弾かれて折れてしまったため、深い痛手を負わせることはできなかつた。

左腕から血が滴り、折れたブレードの柄を濡らす。血を流しすぎたのか、彼は平衡感覚がおかしくなっているのを感じた。

「だが……勝負あったな!」

「クソ……!」

血を失い、もはや正確に焦点が合っていない。霞んでは見えるジェームスの姿をなんとか捉えるも、もはや立っているのすら限界だっ

た。

「お前は俺の作品となるのだ。そのことを喜ぶがいい」

ジェームスが手を振り上げる。それがロバートの目にはスローモーションに映り、千手観音の如く手が分裂する。ロバートは、それが彼の命に引導を渡すものだと考えると、神々しくさえ感じられた。今までの一生が思い返される。

初任務、初めて達成したときのこと、初めて人を殺したときのこと、そして今回の任務……。

サポーターがまだ16の少女と聞かされて多少は驚いたものの、話してみてもそれ以上の驚きを感じた。

聡明で、賢く、サポーターとして十分だとさえ感じた。しかし、今はその声も聞こえない。

実際に任務に就いて、着々と自分の仕事が進むことがとても気分がよかった。障害もなく、今回も楽に終わるだろうと感じたときに現れた少女。それがクリアだった。

少し強気だけでも、孤独に苛まされ、寂しさの中にいた彼女を守ってあげたいと感じた。

だが、それももうここまでである。まもなく目の前の男に斬り殺されるのだ。

『ロバートっ！』

「っ！」

頭の中に一人の少女の声が聞こえてくる。その声を聞いた瞬間、仕方がないというような気分になる。

自分がクリアを助けなければ、誰が助けてやるのだろうか。

ロバートはまっすぐにジェームスを見据える。

「ほう……？ 命乞いか？」

「助けてやらなきゃいけないヤツがいるんだ。こんなところでくたばるわけにはいかないんだ」

「だが……俺は作品を完成させなければ気がすまないのでなッ！」

ジェームスのブレードが動き始める。それはまっすぐに落ちていく。

タイミングは一瞬。トドメをさしたと確信する瞬間。要は死ななければいい。

一瞬体を横にずらし、軸をずらす。刃は徐々に左肩へと落ちていく。それを振り下しきる直前に彼は動いた。

左の手が動く。ほんのわずかだが、それは絶対的で確実、そして効果的な一撃を繰り出す。

矢のように投げられたブレードはまっすぐにジェームスへと飛んでいく。左の胸の……心臓へとまっすぐに。

左肩に激痛が走る。ほんの数センチだけだったが、それはロバートにとっても手痛い一撃だ。

だが……ジェームスへと叩き込まれた一撃は、その代償をもってして余りある結果を生み出す。

「な……に……？」

ジェームスの手からブレードが離れる。ロバートの肩から転げ落ちたブレードは血をまき散らしながら転がっていった。

「悪趣味な芸術には興味ない。もちろん、作品になる気もない」

ジェームスはそのまますろへへと倒れる。そして、そのまま動くことは二度となかった。

ロバートは肩口を包帯で縛り、ひとまず止血する。もったも、すでにかんりの量の血を流している。危険な状態であることには変わりなかった。

それでも歯を食い縛って立ち上がり、彼はひたすら歩いた。助けてやらないといけないヤツがそこにいるから。

「ロバートっ！」

彼女は戦いの一部始終を眼で“視て”いたのだろう。ロバートが彼女の前に現れたとき、その顔は涙でぐっしょりと濡れていた。

「死ぬかと……思った……」

クレアは兵に押さえられながらも、最大限に身を乗り出してロバ―



トを見つめる。

「俺も思ったさ。でも、お前のことを思い出したら死ぬ気になれなくてな」

クレアの隣には長身の女性。そして、その周りには多数の兵達。ジームスを倒したとしても、ロバート一人で彼女を奪還するのは不可能に近かった。

白衣の女性はぱちぱちと手を叩きながら彼を見下ろす。ロバートも悔しそうに彼女を見上げた。

「ヘヴン研究所所長にして、クローン達の保護者……いや、監視役のミシエル・シスターヴァか」

「まったく大したものだわ。あの男を倒すとはね」

多くの兵が銃を構える。その標準はまっすぐにロバートへと向けられている。

「あなたの任務はディスクの入手でしょう？　なぜ戻ってきたの？」

「なんでこっちの任務を知ってるかね……。ま、どうせ内通者が国連の中にいるんだろうな」

彼はポーチからタバコを取りだすと、口に加えた。

「しまった、火がない。おいあんた、ちょっと火を貸してくれないか？」

「貴様！　自分の身を……」

「末期の水代わりに楽しませてあげるくらいいいんじゃない？　どうぞ」

ミシエルは懐からライターを取り出し、彼の方へと放った。

ロバートはそれをキャッチし損ねる。彼は床に落ちたそれを拾って、タバコに火をつける。

「……ふう……。助かったよ」

ロバートはライターを投げ返した。ミシエルはそれを空中で受け取る。

「末期のタバコついでにもうひとつ頼んでいいか？」

「聞いてあげるかぐらいはいいわよ」

ロバートはタバコをくわえたまま深く息を吸い込むと、吐き出す。白煙が辺りを漂う。

「クレアと二人で話したい」

ミシエルはしばらくの間考え込んでいたが、やがて頷いた。

「いいわよ」

「所長！　いくらなんでもそれは……」

「投げられたライターもキャッチできないほどフラフラの男に何ができるといふの？　それに、出口は全て封鎖したわ。脱出ポットも許可を出さなければ出ることできないわ。離してあげて」

クレアは拘束を解かれる。彼女はまっすぐ走ってロバートに飛びついた。

「ロバートっ！」

「おっと」

彼は数歩よろめいたが、なんとか彼女の体を受け止めると、ぎゅっと抱きしめた。

「ロバート！　なんで戻ってきたの！？　私を助けることはあなたの任務と関係ないでしょ！　私なんて置いていけば……」

「馬鹿。約束しただろ？　ヘアバンド、買ってやるって」

「そんな……そんなことのために……」

クレアは泣きながらロバートの体を叩く。ロバートはそんな彼女を優しく抱いた。

「こんな血まみれになって……死にそうになって……それでも私なんかのために……大馬鹿謀報員！」

「どうせ俺は馬鹿さ。だから、お前を放っておけなくて来てしまった」

クレアはロバートの目を見つめる。ロバートもクレアの目を見つめた。

「……ありがとう、ロバート……」

彼女は目を瞑ると、ロバートの唇に口付けをした。ロバートも目を瞑ってそれを受け入れる。

唇を離したとき、彼はミシエル達に聞こえないよう小声で呟いた。

「クレア……目を瞑って耳を塞ぐんだ」

「え……？」

ロバートはクレアの体を抱きしめると、そのまま覆い被さるようにして地面に伏せる。

『ロバートさん、遅くなりました！ 今から突撃します！』

爆音と同時にまばゆい閃光が辺りを満たす。フラッシュグレネード……視界を奪い、聴覚を麻痺させる非殺傷兵器。それは次々と炸裂し、敵兵達を無力化していく。

「な、何が起きているというの!？」

ミシエルも突然の事態に目を白黒させながら慌てふためく。

扉が次々と開き、大量の兵達が飛び込んでくる。

つい数時間前、オキシデリボへと強制的に軍事介入するに足る証拠をユイの父親が入手した。彼の独自のルートで、オキシデリボと取引を行っていた者と接触し、その者から証拠を入手した彼は娘のミッションをサポートするために国連軍を配備し、ヘヴンへと突撃するタイミングを図っていたという。

そして、ロバートの体に仕込まれたマイクから拾った音声を傍受し、そして今の突撃に至ったという。

ユイ自身も数十分前に国連軍の準備があったことを知り、ロバートもつい数分前、ジエームスとの戦いで負った傷に応急処置を施している間に聞いたのだった。ロバートは面食らうと同時に、万が一のためにクレアの保護へと向かったのだった。

正直なところ、もし突撃がなければ彼は脱出ポットへと向かったかもしれない。もっとも、そのことを激しく後悔しながらであろうがミシエルや兵達が拘束された後、ロバートとクレアは国連軍によって保護された。

大至急担架が運ばれ、彼は担架へと乗せられる。

「ちよつと……待ってもらってもいいか」

ロバートは軍の兵に声をかけると、半身を起こしてクレアを抱き寄

せた。

「もう……心配しなくていい。もうこれで……全て終わった」

「私は……もう一人でいなくてもいいの？」

「俺がずっと一緒にいてやる。もう、お前は一人でいなくていいんだ」

ロバートは彼女を抱きしめたまま、そのまましばらくの間、離れることはなかった。

後日談 AfterStory (後書き)

オキシデリボの全てが終わった。

ついに白日の下へと晒された陰謀は白塵と化す。

さあ、始めよう。

全てを終えた者達の最後の物語。

終局章 Actual End

## 終局章 Actual End

終局章 Actual End

After Storyから一年後

「ねえ、ロバート。本当に仕事をやめるの？」

クレアは心配そうにロバートのことを見つめる。そんな彼女はもはや子供ではない。外見だけを見れば、すでに18歳の少女と同じものだった。

「ああ。お前のためにも、もう危険なことはしたくないんだ。来年度から事務を担当することになった。もう、命を失うようなことはないさ」

ロバートは過去の仕事を振り返りながら考える。収入こそ減るものの、普通に生活するには不便にならない金額をもらうことができる。これからの生活を思えば十分すぎるくらいだった。

クレアは国連の専門機関の一つ、WESP O（世界超能力者機関）の試験を見事合格し、来年からロバートと同じ国際連合で働くこととなった。

彼女が超能力を持っていたのは、恐らく成長促進剤の副作用だろうとWESP Oは分析していた。

成長促進剤は成長ホルモンを大量に含むと同時に、精神年齢を成長させるための物質が多分に含まれている。それは脳の活性化、成長を促す代わりに、脳へ大きな影響を与える。そのため、精神障害者などを生み出しやすい半面があった。

そして、超能力とは基本的に脳の発達異常によって発現するもので、成長促進剤の副作用によって発現する可能性が少なからずある。決して高い確立というわけではないが、クレアは超能力を現に発現し

ていた。

実はクレアだけではなく、レンも超能力を発現している。それはクレアのように自由自在に扱えるものではなく、彼の別人格（成長促進剤の副作用によって生まれた潜在的な二重人格）が持っているものであった。

彼の能力はプレコグニション、予知能力である。別人格が表面的に出ているときにのみ出現する能力で、クレアのようにWESPPOで生かせるようなものではなかったが、彼は後述するオキシデリボの難民救助で働くこととなる。

クローンの存在が発覚したオキシデリボは当然のことながら株価が暴落し、株主総会で重役は全員解雇され、ミシエルも投獄されたためにオキシデリボは部門を縮小させるも、経営は大変な困難極まる状態となった。

その危機を救ったのがユイであった。彼女は部門が縮小された後も研究者として残り続け、再びオキシデリボを再興させた。

今では彼女がミシエルの地位に就き、オキシデリボの研究部門を導いている。以前と同じというところまではいかないものの、かなりの再興を遂げたといえる。

一度解体の危機にまで陥ったオキシデリボであったが、今では国連の指示に従って難民救助を行うことによって国連を顧客とし、再興を手助けしていた。

オキシデリボが開発した製品を用いて、難民を救済するというものだ。もちろんタダで製品を提供するわけではなく、きちんとお金のやりとりがある商売なので、解体寸前だったオキシデリボにとって大きな助けとなった。国連もオキシデリボほどの技術を持つ企業を解体するのが惜しかったのだった。

オキシデリボの元でクローンとして研究されていた子供達の多くは成長促進剤の効果で今ではほとんどが18歳となり、立派に働きに出ている。その中の何人かはオキシデリボに籍を置き、難民救済を

行っていた。レン達もそのうちの一人だった。

そして、任務を終えたロバートは今の諜報員の仕事をやめ、事務へと移った。クレアと安心して生活を送るために、諜報の仕事を捨てたのだった。

クレアも成長し、今では二人は恋仲とも言える関係となっている。署内では二人は近いうちに結ばれるだろうともっぱらの噂だった。

クレアはロバートの肩によりかかると、今の幸せな生活を思い返す。「ロバートが助けに来てくれて、私の生活は一変したわ。まさか、こんなにも幸せな生活が遅れるようになるとは思ってもいなかったもの」

クレアは幸せそうな笑顔を浮かべながらロバートを見つめる。

「約束もきちんと果たせたしな」

彼女の髪は可愛らしいヘアバンドで二つにまとめられ、ツインテールを下していた。彼女は愛できるようにヘアバンドを両手で包む。

「ロバートは戻ってきて一番にこれを買ってくれたもんね」

「約束だからな」

二人は笑い合うとそっと口付けする。

幸せそうに微笑むと、彼女は大きく伸びをした。

「さーって、そろそろ買い物に行かないとね。タイムセールが始まっちゃうわ」

クレアは今では完全に彼の妻気取りである。ロバートもまんざらではないので、彼女に従っている。

「よし、俺が荷物を持ってやるよ」

ロバートは懐から車のキーを取り出した。

「うん、お願いね」

クレアは嬉しそうに笑うと、ロバートの手を取って部屋から出ていった。



T  
r  
u  
e  
  
E  
n  
d

## 終局章 Actual End (後書き)

これでオキシデリボにまつわる『I as parts』series 1st story. はおしまいです。

次回からは『部品としての俺』I as parts series 2nd story. を展開していきたいと思えます。

詳しいことは活動報告の方に書かせていただきます。

これからも皆様、よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6893i/>

---

部品としての僕 『I as parts』 series 1st story.

2011年2月6日13時31分発行